Form No. 3431-112 Rev A

TORO®

Count on it.

オペレーターズマニュアル

Workman® HDX-Auto 汎用作業車

モデル番号07390—シリアル番号 403430001 以上
モデル番号07390TC—シリアル番号 403430001 以上

製品の登録は www.Toro.com.
この文書は翻訳です。 (JA)

CE

3431-112 A

この製品は、関連するEU規制に適合しています 詳細については、DOC シート規格適合証明書をご覧ください。

カリフォルニア州の森林地帯・潅木地帯・草地などでこの機械を使用する場合には、エンジンに同州公共資源法第4442章に規定される正常に機能するスパークアレスタが装着されていること、エンジンに対して森林等の火災防止措置をほどこされていることが義務づけられており、これを満たさない機械は、第4442章または4443章違犯となります。

エンジンの保守整備のため、および米国環境保護局EPA並びにカリフォルニア州排ガス規制に関連してエンジンマニュアルを同梱しております。エンジンマニュアルはエンジンのメーカーから入手することができます。

⚠ 警告

カリフォルニア州
第65号決議による警告

カリフォルニア州では、この製品に使用されているエンジンの排気には発癌性や先天性異常などの原因となる物質が含まれているとされております。

バッテリーやバッテリー関連製品には鉛が含まれており、カリフォルニア州では発ガン性や先天性異常を引き起こす物質とされています。取り扱い後は手をよく洗ってください。

はじめに

この製品は、公道以外の場所で主に人や資材を運搬することを目的として製造されている汎用作業車です。この機械は本来の目的から外れた使用をすると運転者本人や周囲の人間に危険な場合があります。

この説明書を読んで製品の運転方法や整備方法を十分に理解し、他人に迷惑の掛からないまた適切な方法でご使用ください。この製品を適切かつ安全に使用するのはお客様の責任です。

製品の安全や取り扱い講習、アクセサリなどに関する情報、代理店についての情報の入手、お買い上げ製品の登録などをネットで行っていただくことができますwww.Toro.com

整備について、また純正部品についてなど、分からないことはお気軽に弊社代理店またはカスタマーサービスにおたずねください。お問い合わせの際には、必ず製品のモデル番号とシリアル番号をお知らせください。図 1 にモデル番号とシリアル番号を刻印した銘板の取り付け位置を示します。いまのうちに番号をメモしておきましょう。

重要 **シリアル番号デカルについている QR コード無い場合もありますをモバイル機器でスキャンすると、製品保証、パーツその他の製品情報にアクセスできます。**

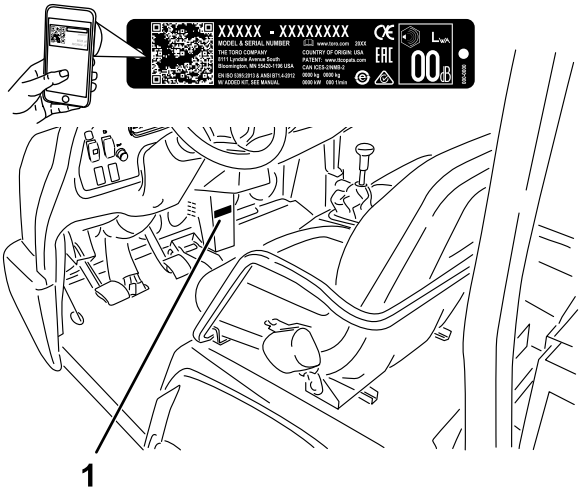


図 1

1. モデル番号とシリアル番号の表示場所

モデル番号_____

シリアル番号 _____

この説明書では、危険についての注意を促すための警告記号図 2を使用しております。これらは死亡事故を含む重大な人身事故を防止するための注意ですから、必ずお守りください。

g000502

図 2
危険警告記号

この他に2つの言葉で注意を促しています。**重要**「重要」は製品の構造などについての注意点を、**注**はその他の注意点を表しています。

© 2019—The Toro® Company
8111 Lyndale Avenue South
Bloomington, MN 55420

連絡先 www.Toro.com.
Printed in the USA
禁無断転載

目次

安全について 4
安全上の全般的な注意 4
安全ラベルと指示ラベル 5
組み立て 10
1 ハンドルを取り付ける 11
2 バッテリーを接続する 11
3 オイル類の量とタイヤ空気圧を点検する 12
4 ROPSを取り付ける 12
5 CVT インテークダクトを接続する 12
6 ブレーキの慣らし掛けを行う 13
製品の概要 14
各部の名称と操作 14
コントロールパネル 16
計器類 16
仕様 19
アタッチメントとアクセサリ 19
運転の前に 20
運転前の安全確認 20
毎日の整備作業を実施する 20
タイヤ空気圧を点検する 20
燃料を補給する 21
新車の慣らし運転 21
安全インタロックシステムの動作を確認する 21
運転中に 23
運転中の安全確認 23
荷台の操作 24
エンジンの始動手順 25
マシンを運転する 26
車両の停止手順 26
エンジンの停止手順 26
速度レンジコントロールの使い方 26
デファレンシャルロックの使用 27
油圧コントロールを使用する 27
運転終了後に 29
運転終了後の安全確認 29
トレーラへの積み込み 30
緊急時の牽引について 30
トレーラを牽引する場合 30
保守 31
保守作業時の安全確保 31
推奨される定期整備作業 31
特殊な使用条件下で使用する場合の保守整備について 33
整備前に行う作業 34
整備作業のための準備 34
安全サポートの使い方 34
フルサイズ荷台の取外し 35
フルサイズ荷台の取付け 35
車体をジャッキで持ち上げる場合 36
フードの取り付けと取り外し 37
潤滑 38
ベアリングとブッシュのグリスアップ 38
エンジンの整備 39
エンジンの安全事項 39
エアフィルタの整備 39
エンジンオイルについて 40
オイル圧警告灯を点検する 42
点火プラグの整備 42
燃料系統の整備 43
カーボンキャニスタエアフィルタの点検 43
燃料フィルタの交換 43
燃料ラインとその接続の点検 43
電気系統の整備 44
電気系統に関する安全確保 44
ヒューズの整備 44
救援バッテリーによるエンジンの始動 44
バッテリーの整備 45
走行系統の整備 46
タイヤの点検 46
ホイールナットのトルクを点検する 46
前輪の整列の点検 47
トランスミッションの保守 47
デファレンシャルとアクスルの保守 51
冷却系統の整備 52
冷却系統に関する安全確保 52
冷却液の量を点検する。 52
冷却部の清掃 53
エンジンの冷却液の交換 53
ブレーキの整備 55
ブレーキオイル量の点検 55
駐車ブレーキの調整 55
ブレーキペダルの調整 56
制御系統の整備 57
速度表示単位の切替え 57
油圧系統の整備 57
油圧系統に関する安全確保 57
油圧オイルについて 57
緊急時の荷台の上げ方 60
洗浄 62
車体を清掃する 62
保管 62
格納保管時の安全 62
マシンの保管 62
故障探究 64

安全について

この機械は SAE J2258 (Nov 2016) 要求に準拠して設計されています。

安全上の全般的な注意

この機械は人身事故を引き起こす能力がある。重大な人身事故を防ぐため、すべての注意事項を厳守してください。

- マシンを始動する前に必ずこの*オペレーターズマニュアル*をお読みになり内容をよく理解してください この製品を使用する人すべてが製品を良く知り、警告の内容を理解してください。
- この機械を運転する時は常に十分な注意を払ってください。運転中は運転操作に集中してください 注意散漫は事故の大きな原因となります。
- 機械の可動部の近くには絶対に手足を近づけないでください。
- ガードなどの安全保護機器が正しく取り付けられていない時は、運転しないでください。
- 作業場所に、無用の大人、子供、ペットなどを近づけないでください。子供に運転させないでください。
- 整備や給油などを行う前には、必ず車両を停止させ、スイッチを切り、キーを抜き取ってください。

間違った使い方や整備不良は負傷などの人身事故につながります。事故を防止するため、以下に示す安全上の注意や安全注意標識 ⚠ のついている遵守事項は必ずお守りください 「 注意 」、「 警告 」、および「 危険 」 の記号は、人身の安全に関わる注意事項を示しています。これらの注意を怠ると死亡事故などの重大な人身事故が発生する恐れがあります。

安全ラベルと指示ラベル

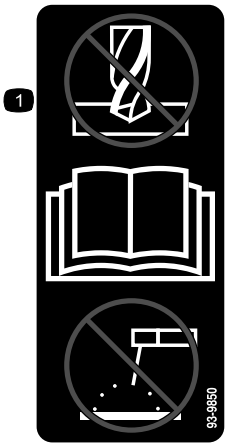
以下のラベルや指示は危険な個所の見やすい部分に貼付してあります。破損したりはがれたりした場合は新しいラベルを貼付してください。

decalbatterysymbols

バッテリーに関する注意標識

全てがついていない場合もあります。

1. 爆発の危険
2. 火気厳禁、禁煙厳守のこと
3. 劇薬につき火傷の危険あり
4. 保護メガネ等着用のこと。
5. *オペレーターズマニュアル* を読むこと。
6. バッテリーに人を近づけないこと。
7. 保護メガネ等着用のこと 爆発性ガスにつき失明等の危険あり。
8. バッテリー液で失明や火傷の危険あり
9. 液が目に入ったら直ちに真水で洗眼し医師の手当てを受けること
10. 鉛含有普通ゴミとして投棄禁止。



decal93-9850

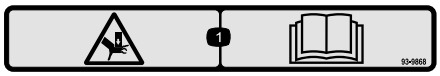
93-9850

1. 修理や改造をしないこと*オペレーターズマニュアル* を読むこと。

decal93-9852

93-9852

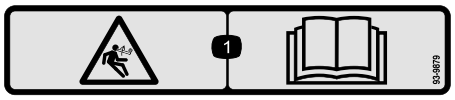
1. 警告*オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. 落下の危険シリンダロックを装着すること。



decal93-9868

93-9868

1. 手を潰される危険*オペレーターズマニュアル* を読むこと。



decal93-9879

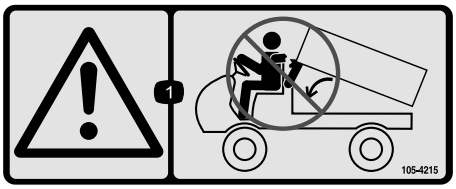
93-9879

1. 負荷が掛かっている危険 *オペレーターズマニュアル* を読むこと

decal93-9899

93-9899

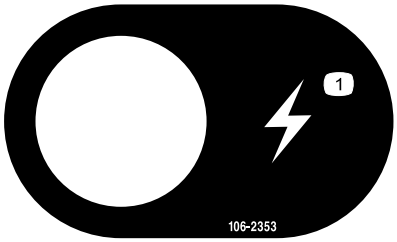
1. 落下の危険シリンダロックを装着すること。



decal105-4215

105-4215

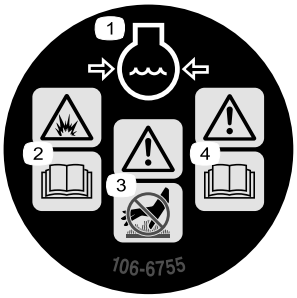
1. 警告 挟まれないように注意



decal106-2353

106-2353

1. 電気ソケット



decal106-6755

106-6755

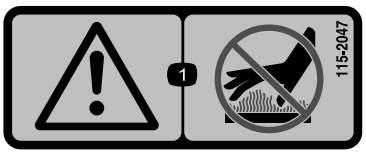
1. 冷却液の噴出に注意。
2. 爆発の危険 *オペレーターズマニュアル* を読むこと。
3. 警告 高温部に触れないこと。
4. 警告 *オペレーターズマニュアル*を読むこと。

---

decal106-7767

106-7767

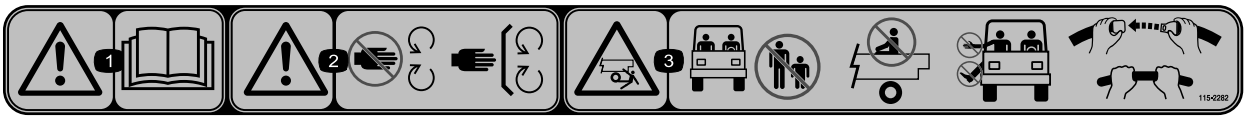
1. 警告*オペレーターズマニュアル* を読むこと 転倒注意 シートベルトを着用すること 転倒方向と反対側に身体をそらすこと。



decal115-2047

115-2047

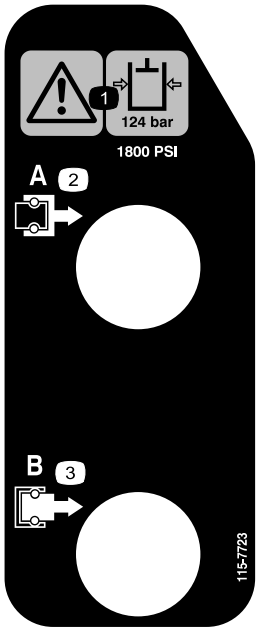
1. 警告 — 高温部に触れないこと。



decal115-2282

115-2282

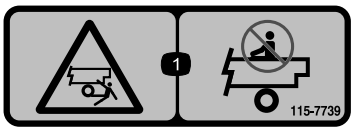
1. 警告*オペレーターズマニュアル*を読むこと。
2. 警告 可動部に近づかないこと 全部のガード類を正しく取り付けて運転すること。
3. 手足の負傷の危険人を近づけないこと荷台に人を乗せないこと 乗車中は手足を車両外に出さないこと シートベルトを着用し、手すりを握ること。



decal115-7723

115-7723

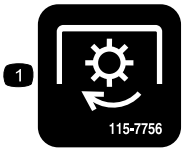
1. 警告 油圧オイルの圧力は 124 bar124 kg/cm2=1800 psi。
2. カップラ A
3. カップラ B



decal115-7739

115-7739

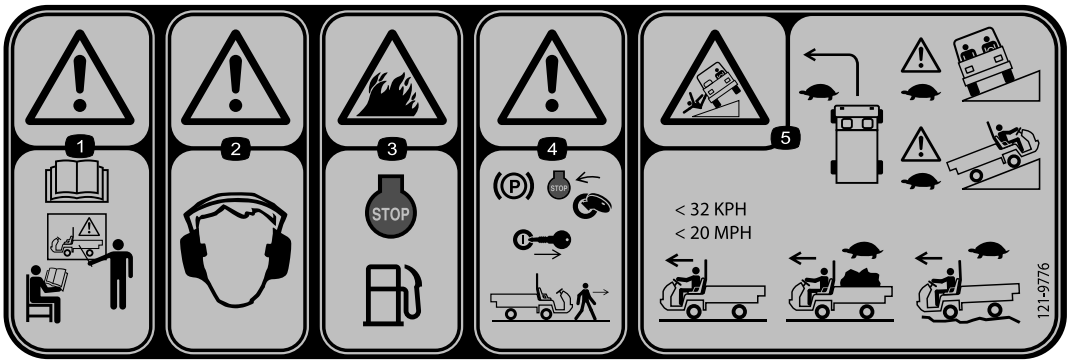
1. 車体から振り落とされて大けがをする危険人を乗せないこと。



decal115-7756

115-7756

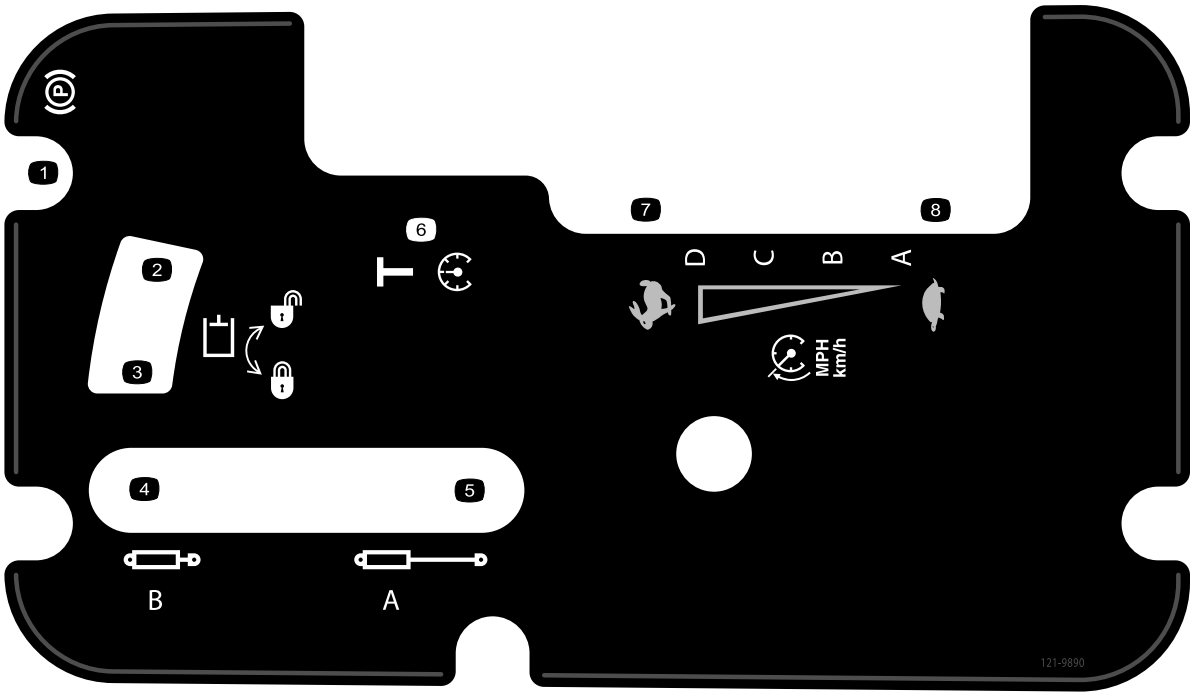
1. ハイフロー油圧: ON



decal121-9776

121-9776

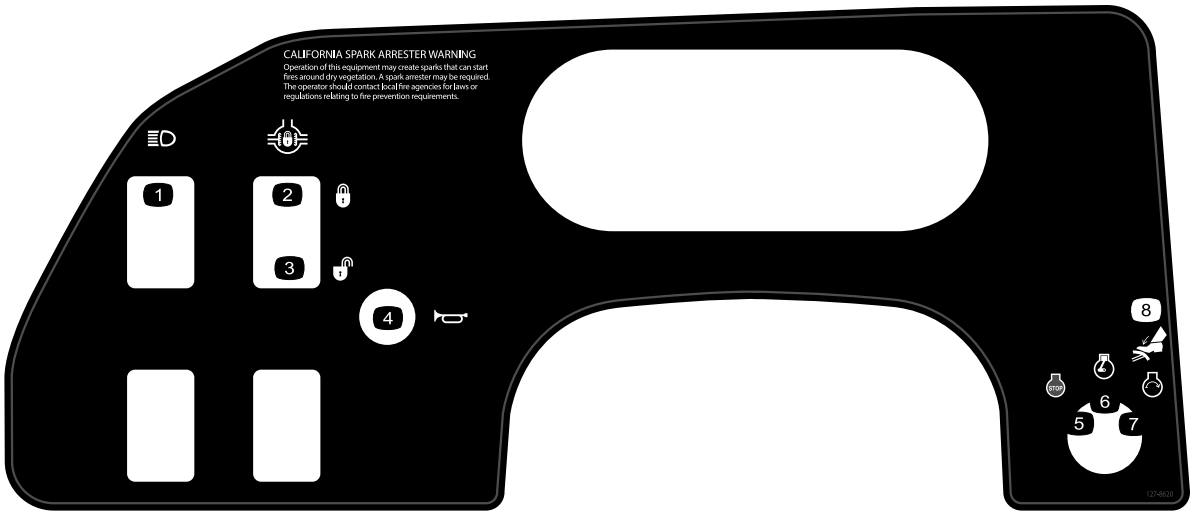
1. 警告初めて運転する前に*オペレーターズマニュアル*を読み適切なトレーニングを受けること。
2. 警告 聴覚保護具を着用のこと。
3. 火災の危険 燃料補給前はエンジンを止めること。
4. 警告 車両を離れるときは駐車ブレーキをロックし、エンジンを停止し、キーを抜くこと。
5. 転倒の危険旋回時は速度を落とすこと斜面の登り走行や横断走行は低速で行うこと荷物を積んでいない場合でも時速 32km 以上で運転しないこと荷物を積んでの走行や不整地の走行は速度に十分注意して行うこと。



decal121-9890

121-9890

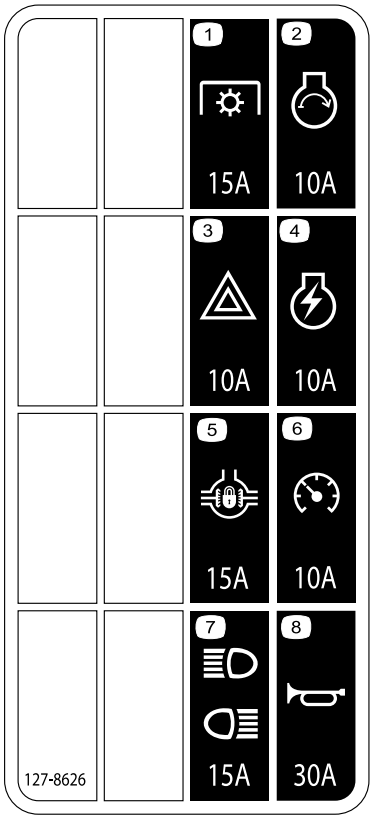
1. 駐車ブレーキ
2. 油圧系統ロック解除
3. 油圧系統ロック
4. シリンダ縮む
5. シリンダ伸びる
6. 移動走行
7. 高速
8. 低速



decal127-8620

127-8620

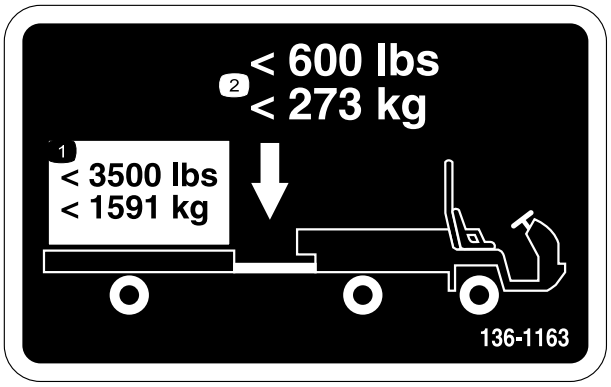
1. ヘッドライト
2. デファレンシャルロックロック
3. デファレンシャルロックロック解除
4. ホーン警笛
5. エンジン停止
6. エンジン作動
7. エンジン始動
8. ブレーキ



decal127-8626a

127-8626

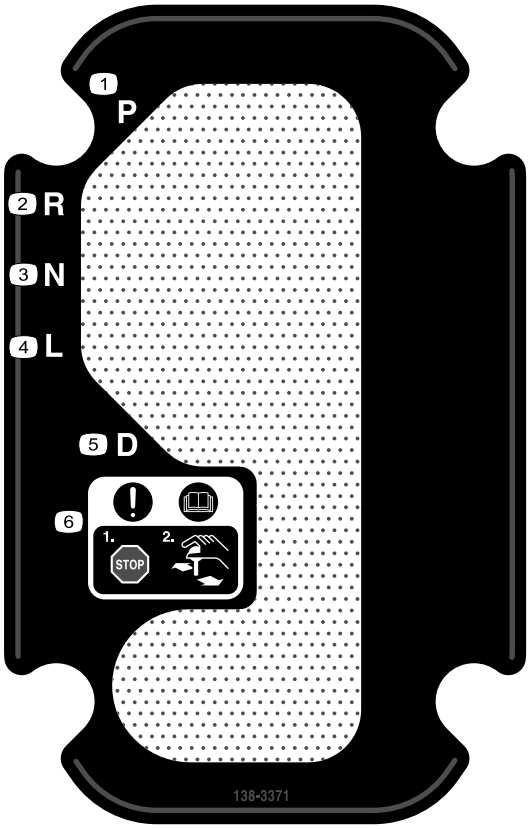
1. PTO 15A
2. エンジン始動10A
3. ハザードランプ10A
4. エンジン点火10A
5. デファレンシャルロック15A
6. 速度計10A
7. ヘッドライトと後部ライト15A
8. ホーン30A



decal136-1163

136-1163

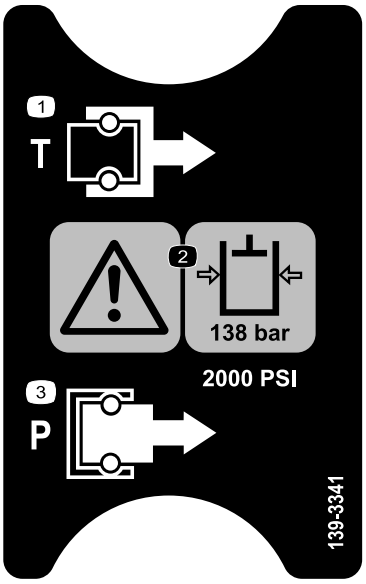
1. 積載重量は 1591kg を限度としてください。
2. 牽引重量トング重量は 273 kg を限度としてください。



decal138-3371

138-3371

1. 駐車
2. 後退
3. ニュートラル
4. 低
5. 走行
6. 注意*オペレーターズマニュアル*を読むことギア変更は停車して行うこと。



decal139-3341

139-3341

1. タンク
2. 警告 油圧オイルの圧力は 138 bar124 kg/cm2=2,000 psi 。
3. 加圧側

組み立て

付属部品

すべての部品がそろっているか、下の表で確認してください。

手順	内容	数量	用途
1	ハンドル カバー ワッシャ⅝"	1 1 1	ハンドルを取り付けますTCモデルの場合のみ
2	必要なパーツはありません。	–	バッテリーを接続するTCモデルのみ
3	必要なパーツはありません。	–	オイル類の量とタイヤ空気圧を点検する。
4	ROPS バー フランジヘッドボルト ½ x 1¼"	1 6	ROPSを取り付けます。
5	必要なパーツはありません。	–	CVT インテークダクトを接続します。
6	必要なパーツはありません。	–	ブレーキの慣らし掛けを行います。

その他の付属品

内容	数量	用途
オペレーターズマニュアル	1	ご使用前にお読みください。
オペレータのためのトレーニング資料	1	ご使用前にご覧ください。
CVTキット、121-9853	1	CVT インテークダクトを接続するTC モデルの場合のみ
CVTアダプタ、127-8750	1	CVT インテークダクトを接続するTC モデルの場合のみ

注 前後左右は運転位置からみた方向です。

1

ハンドルを取り付ける

TC モデルのみ

この作業に必要なパーツ

1	ハンドル
1	カバー
1	ワッシャ⅝"

手順

1. ハンドルのハブにカバーがついている場合には、これを取り外す図 3。
2. ハンドルのシャフトからジャムナットを外す図 3。
3. ハンドルシャフトに、ハンドルとワッシャを順に取り付ける図 3。
4. ナットでハンドルを固定し、27-34 N·m2.8-3.5 kg·m = 20-25 ft-lbにトルク締めする。
5. ハンドルにキャップを取り付ける図 3。

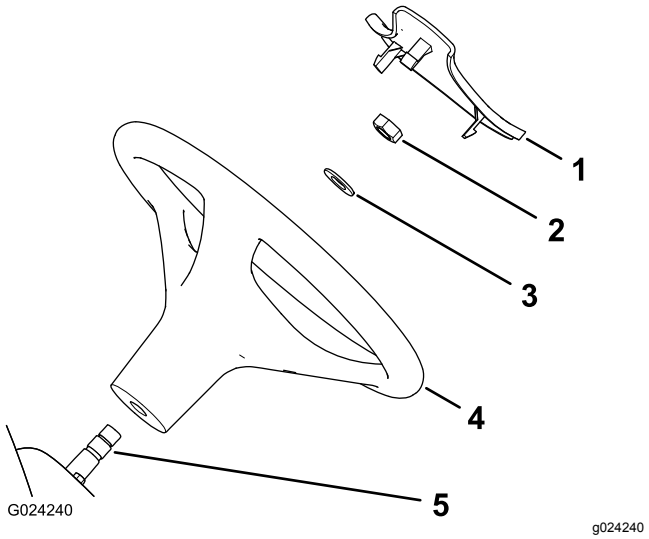


図 3

1. カバー
2. ナット
3. ワッシャ⅝"
4. ハンドル
5. ハンドルシャフト

2

バッテリーを接続する

TC モデルのみ

必要なパーツはありません。

手順

⚠ 警告

バッテリーケーブルの接続手順を間違うとケーブルがショートを起こして火花が発生する。それによって水素ガスが爆発を起こし人身事故に至る恐れがある。

- **必ず、バッテリーのマイナス黒ケーブルを外してから、プラス赤ケーブルを外すこと。**
- **接続する時は必ずプラス赤ケーブルから取り付ける。**

1. バッテリーカバーを握り込んで、タブをバッテリーベースから外す図 4。

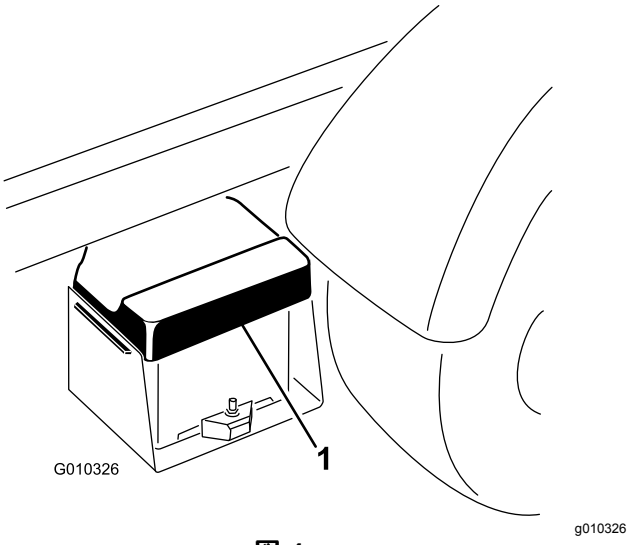


図 4

1. バッテリーカバー

2. バッテリーベースからバッテリーを取り外す図 4。
3. 赤いプラスケーブルをバッテリーのプラス端子に取り付けてボルトとナットで固定する図 5。

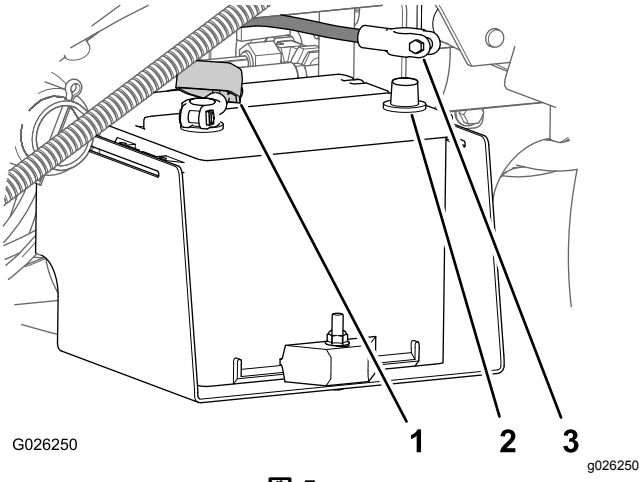


図 5

1. 絶縁カバープラスケーブル
2. マイナス端子
3. マイナス–ケーブル黒

4. プラス端子に絶縁ゴムカバーを取り付ける。

   注 絶縁ゴムカバーは、ショート防止用です。
5. マイナス黒ケーブルをバッテリーのマイナス端子に取り付けてボルトとナットで固定する。
6. バッテリーベースにバッテリーカバーを合わせる図 4。
7. バッテリーカバーを握り込んで、タブをバッテリーベースに合わせ、力をゆるめるとカバーがセットされる図 4。

3

オイル類の量とタイヤ空気圧を点検する

必要なパーツはありません。

手順

1. 初めてエンジンを作動させる前と後に、エンジンオイルの量を点検する エンジンオイルの量を点検する (ページ 40)を参照。
2. 初めてエンジンを作動させる前に、トランスミッションオイルの量を点検する トランスミッションオイルの量の点検 (ページ 47) を参照。
3. 初めてエンジンを作動させる前に、エンジン冷却液の量を点検する 冷却液の量を点検する。(ページ 52) を参照。
4. 初めてエンジンを作動させる前に、ブレーキオイルの量を点検する ブレーキオイル量の点検 (ページ 55) を参照。
5. タイヤ空気圧を点検する タイヤ空気圧を点検する (ページ 20)を参照。

4

ROPSを取り付ける

この作業に必要なパーツ

1	ROPS バー
6	フランジヘッドボルト ½ x 1¼"

手順

1. フランジヘッドボルト½ x 1¼"6本のねじ山にロッキングコンパウンド中程度整備時に外せるレベルを塗りつける。
2. ROPS の両サイドを車両フレーム側面の取付け穴に揃える図 6。

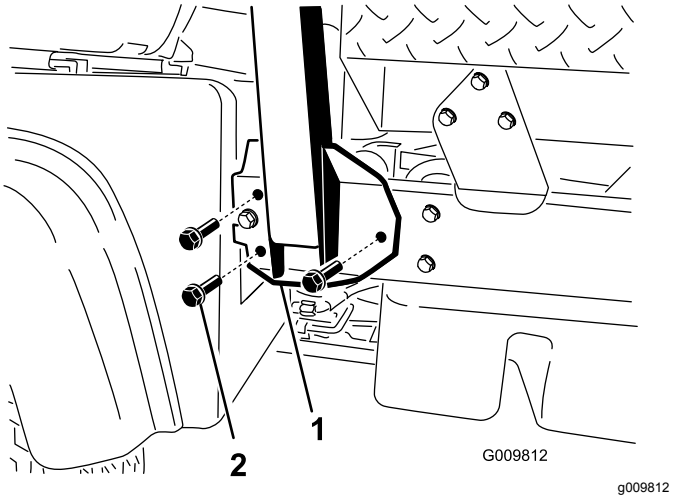


図 6

1. ROPS 取り付けブラケット
2. フランジヘッドボルト ½ x 1¼"

3. ROPS 固定ブラケットを車体フレームに固定するフランジヘッドボルト½ x 1¼"3本を使用する。図 6
4. フランジヘッドボルト ½ x 1¼"を115 N·m 11.5 kg.m = 85 ft-lbにトルク締めする。

5

CVT インテークダクトを接続する

必要なパーツはありません。

手順

重要 **エンジンを始動する前に、CVT ダクトについているビニルカバーを取り除いてください。**

CVT キットP/N 121-9853とアダプタキット127-8750が必要です。

1. CVT インテークホースの端部についているビニル袋を止めているホースクランプをゆるめて袋を外す。
2. 以下の手順で荷台を上げる
   A. 駐車ブレーキを掛ける。
   B. エンジンを掛ける。
   C. レバーを後ろに引いて荷台を上昇させる。
   D. エンジンを停止する。
   E. ROPS パネルの裏にある荷台サポート収納ブラケットからサポートを外して荷台昇降シリンダのロッドに取り付ける 安全サポートの使い方 (ページ 34)を参照。
3. CVT インテークホースを、ROPS パネルの裏にあるインテークチューブのコネクタに接続してホースクランプで固定する (図 7)。

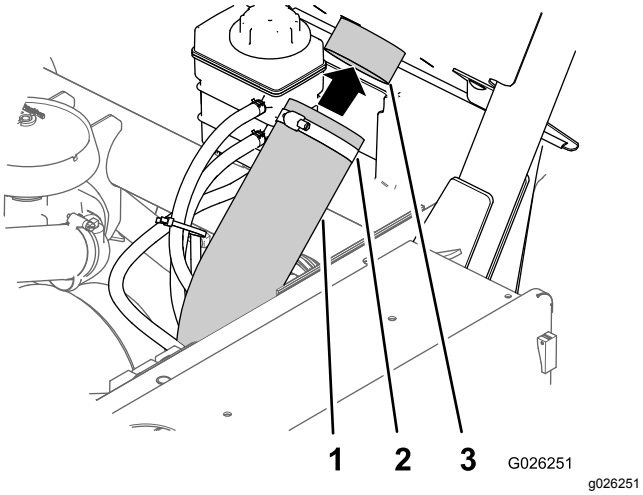


図 7

1. CVTインテークホース
2. ホースクランプ
3. インテークチューブのコネクタ

4. 荷台サポートを外し、荷台を降下させ、エンジンを停止し、キーを抜き取る。

6

ブレーキの慣らし掛けを行う

必要なパーツはありません。

手順

ブレーキの性能を最大限に発揮させるために、実際の使用前にブレーキの「慣らし掛け」をする。

1. フルスピードで走行してブレーキを掛け、タイヤをロックさせないで急停車する。
2. これを10回繰り返す。ブレーキがオーバーヒートしないように停止と停止の間に1分間の間隔を空ける。

   重要 **車両に 454kg を積載しておくと最も効果的です。**

製品の概要

各部の名称と操作

実際にエンジンを始動して作業を始める前に、各部分の操作方法をよく知っておいてください。

アクセルペダル

アクセルペダル図 8は、走行中に車両の走行速度を調整するペダルです。ペダルを踏み込むとエンジン速度が上がって走行速度が上がります。ペダルの踏み込みを浅くするとエンジン速度が下がって走行速度が下がります。

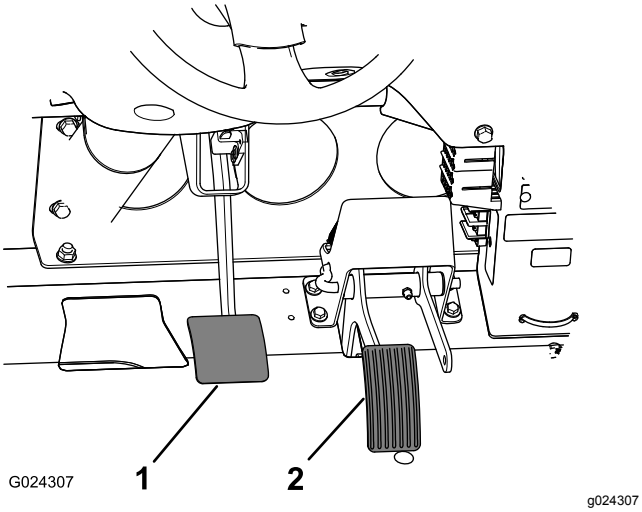


図 8

1. ブレーキペダル
2. アクセルペダル

ブレーキペダル

ブレーキペダル図 8は、車両を減速させたり停止させるのに使用します。

⚠ 注意

ブレーキが摩耗したり正しく調整されていなかったりすると人身事故を起こす危険がある。

ブレーキペダルを一杯に踏み込んだ時にペダルと運転台の床との距離が 25 mm 以下となるようなら調整または修理が必要です。

トランスミッションレバー

トランスミッションレバー (図 9) は、**P** (駐車)、**R** (後退)、**N** (ニュートラル)、**L** (低速全身)、**D** (通常前進) を切り替えるレバーです。

重要 **ギアの切り替え後退、低速、前進は、車両を完全に停止させて行なってください。これを怠るとトランスミッションを破損する恐れがあります。**

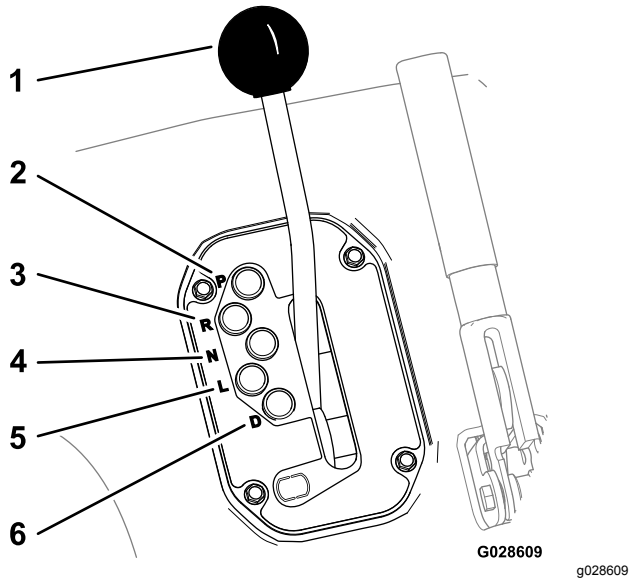


図 9

1. トランスミッションレバー
2. **P**駐車
3. **R**後退
4. **N**ニュートラル
5. **L**低速前進
6. **D**通常運転

駐車ブレーキレバー

エンジンを停止させたら、車体が不意に動き出さないよう、必ず駐車ブレーキ図 10を掛けてください。急な斜面に停車する場合にも、必ず駐車ブレーキを掛けてください。

- 駐車ブレーキレバーを引くとブレーキがかかります。
- レバーを下げると駐車ブレーキが解除されます。

  注 車両を動かす前に駐車ブレーキを解除してください。
- 急な斜面上り坂、下り坂で駐車する場合には、トランスミッションを **P** (駐車) にセットして、駐車ブレーキをしっかり掛けてください。谷側のタイヤに輪止めを掛けてください。

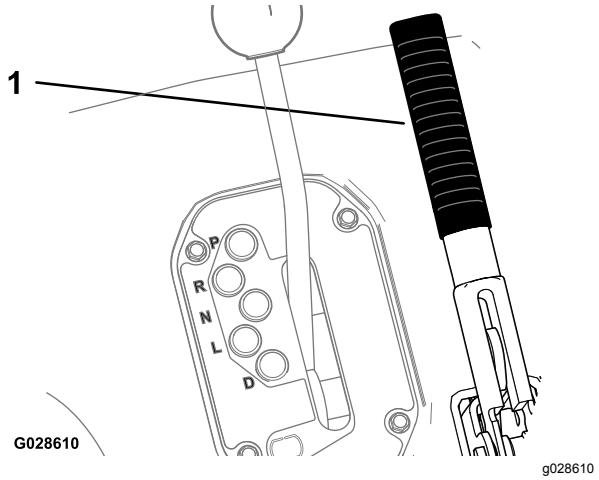


図 10

1. 駐車ブレーキレバー

油圧昇降レバー

荷台の昇降を行ないます。後ろに引くと荷台が上昇し、前に倒すと降下します図 11。

重要 **荷台を降下させる時は、降下し終わってからさらに 1-2 秒間、レバーを前に倒したままで保持し、荷台が完全にフレーム位置まで降りるようにしてください。ただし、油圧シリンダがその行程の端まで到達したら、そこから 5 秒間以上はレバーを保持しないでください。**

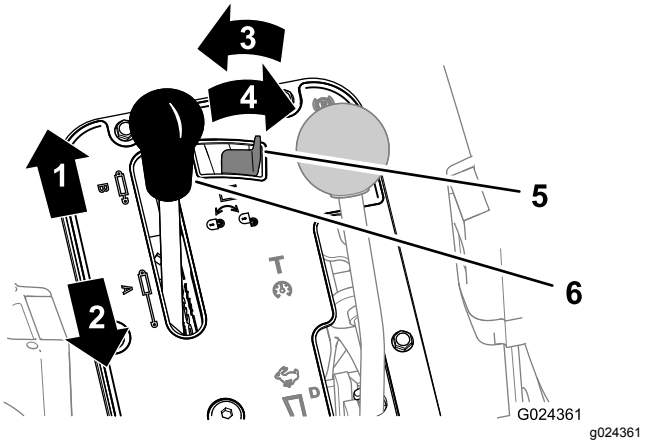


図 11

1. 荷台を降下させる
2. 荷台を上昇させる
3. ロック
4. ロック解除
5. 油圧昇降ロック
6. 油圧昇降レバー

油圧昇降ロック

車両に荷台を取り付けていない場合には、油圧シリンダが動かないように昇降レバー図 11をロックしておきます。また、アタッチメントを取り付けて使用している場合には、レバーを ON 位置にロックすることができます。

速度レンジ切り替えレバー

速度レンジ切り替えレバー図 12を使って、4種類の速度レンジから作業に最もふさわしい速度レンジを選択することができます。運搬用、人員移動用など、積荷の重さや必要な最高速度に応じて選びます。

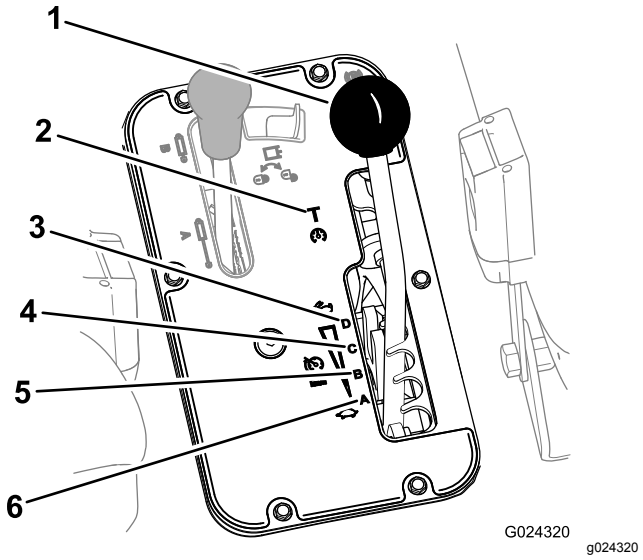


図 12

1. 速度レンジ切り替えレバー
2. **T**移動走行レンジ
3. **D**高速レンジ
4. **C**中高レンジ
5. **B**中低レンジ
6. **A**低速レンジ

コントロールパネル

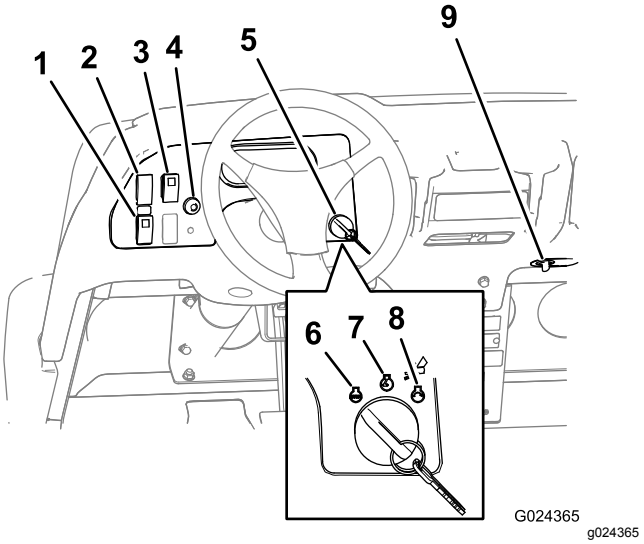


図 13

1. ハイフロー油圧スイッチTC モデルのみ
2. ライトスイッチ
3. デファレンシャルスイッチ
4. ホーンボタンTC モデルのみ
5. 始動キー
6. OFF
7. ON
8. 始動
9. 電源ソケット

ハイフロー油圧スイッチ

TC モデルのみ

下へ押すとハイフロー油圧が作動を開始し、上に押すと停止します図 13。

注 ハイフロー油圧スイッチをOFFにしないとエンジンを始動できません。

ライトスイッチ

ライトスイッチ図 13を押すとヘッドライトの点灯・消灯を切り替えることができます。

デファレンシャルロックスイッチ

このスイッチは後部車軸の作動ギアをロックして走行力を増強する働きがあります。デファレンシャルスイッチ図 13を押すとこの機能のON・OFFを切り替えることができます。

注 このスイッチは車両が走行中でも操作することができます。

ホーンボタン

米国外用モデルのみ

ホーンボタンはコントロールパネルについています図 13。押すと警笛がなります。

キースイッチ

キースイッチ図 13はエンジンの始動と停止を行うスイッチです。キーを OFF 位置に回せばエンジンは停止します

キースイッチには3つの位置がありますOFF、RUN、STARTです。キーを右に回して START 位置にすると、スタータモータが作動します。エンジンが始動したら、すぐにキーから手を離してください。キーは自動的にON位置に動きます。

電源ソケット

電動アクセサリ用に電源ソケット図 13から12 Vの電源をとることができます。

計器類

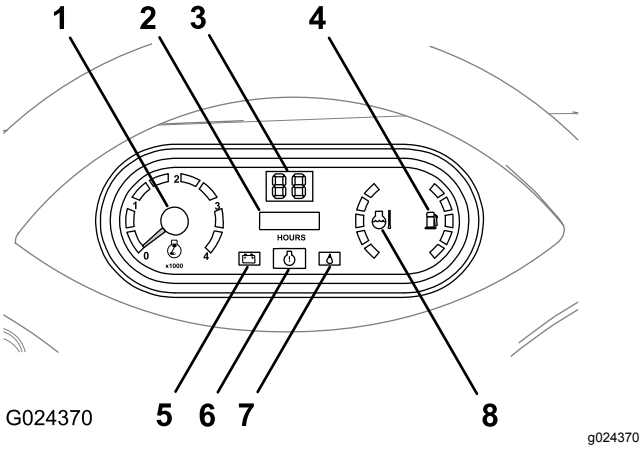


図 14

1. タコメータ
2. アワーメータ
3. 速度計
4. 燃料計
5. 充電表示ランプ
6. エンジン点検ランプ
7. エンジンオイル圧警告灯
8. 冷却水温度表示計

タコメータ

タコメータは、エンジンの回転数を表示します図 14。

注 白い三角マークはPTOを使用する際の適正回転数540 rpmです。

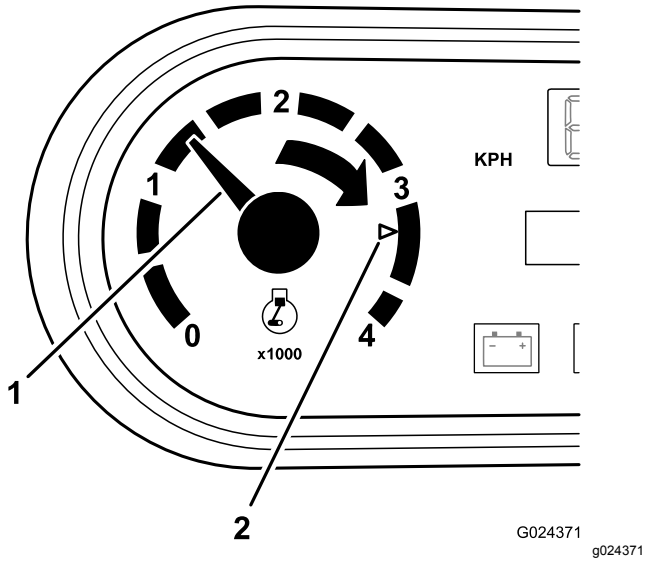


図 15

1. エンジン速度rpm
2. PTO速度 540 rpmに必要な回転数は 3300 rpm

アワーメータ

アワーメータは、左側コントロールパネルにあって本機の稼働時間を積算表示します。図 14アワーメータは始動スイッチをON位置に回すと始動し、エンジンが回転している間作動を続けます。

速度計

速度計は車両の走行速度を表示します図 14。速度計の表示単位は mphマイル毎時ですが、簡単にkm/hに切り替えることができます 速度表示単位の切替え (ページ 57)を参照してください。

エンジン点検ランプ

エンジン点検ランプ図 14の点灯は、エンジンに不具合が発生していることを示します。

代理店に連絡してください。

オイル圧警告灯

エンジンの回転中にエンジンオイルの圧力が危険域まで下がるとオイル圧警告灯図 14が点灯します。

重要 **このランプが点滅や点灯を続ける場合は、エンジンを止めてエンジンオイルの量を点検してください。オイルが減っていて、補給したのに、エンジン再始動時にランプが消えない場合は、ただちにエンジンを止めての正規代理店にご連絡ください。**

以下の要領で警告ランプ類の作動を確認してください

1. 駐車ブレーキを掛ける。
2. キーをON/PREHEAT位置に回すが、エンジンは始動させない。

   注 オイル圧警告灯が赤く点灯する。点灯しないランプがあった場合には、電球が切れているかそれぞれの監視回路に異常が発生しているので、必ず原因を突き止めて修理を行なう。

   注 エンジンを停止させた直後は、1-2 分間待たないとランプが点灯しない場合があります。

冷却水温度計及び警告灯

冷却水温度計もランプも、キースイッチがON位置にある時のみ作動し、冷却液の温度を示します図 14。エンジンがオーバーヒートすると警告灯が点滅します。

燃料計

燃料計は、燃料タンクに残っている燃料の量を表示します。キースイッチがON位置の時にのみ作動します図 14。燃料計にある赤いゾーンは、燃料残量が少なくなっている時のゾーンです。このゾーンではランプが赤く点滅して燃料切れが近いことを警告します。

助手席用手すり

助手席用の手すりがダッシュボードについています図 16。

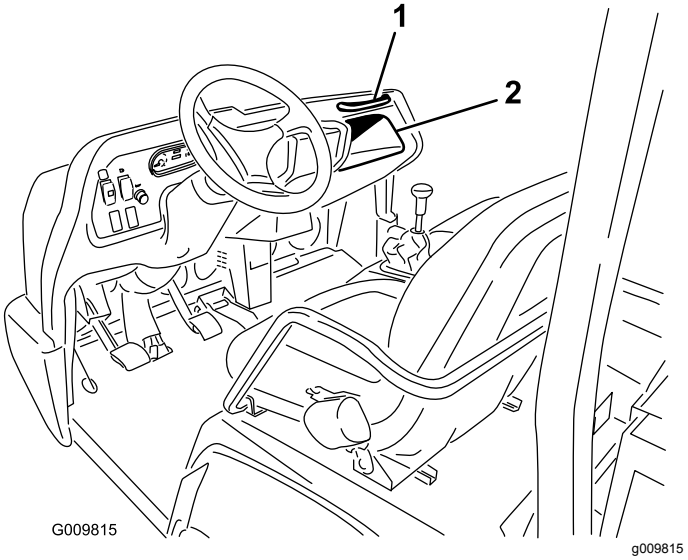
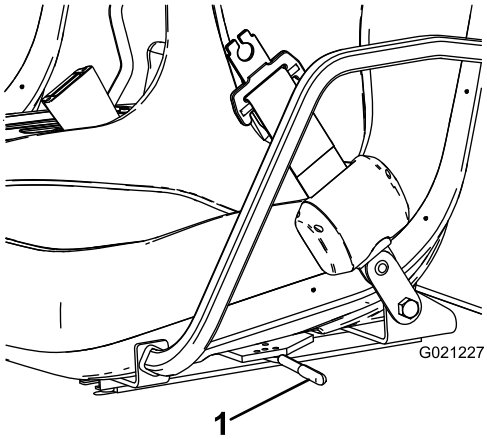


図 16

1. 助手席用手すり
2. 物入れ

座席調整レバー

好みに合わせて座席の前後位置を調整することができます図 17。



g021227

図 17

1. 座席調整レバー

仕様

注 仕様および設計は予告なく変更される場合があり
ます。

全幅:	165.1 cm65"
全長	荷台なし 326 cm フルサイズ荷台付き 331 cm 2/3サイズ荷台を後ろ寄りに取り付け346 cm
基本重量乾燥重量	モデル 07390: 866 kg モデル 07390TC: 887 kg
定格積載重量運転手の体重 91kg、助手席乗員の体重 91kg、搭載されているアタッチメントを含む	モデル 07390: 1498 kg モデル 07390TC: 1477 kg
車両総重量GVW	2363kg
牽引能力	トング重量272kg トレーラ最大重量 1587kg
地上高	18 cm何も積載していない場合
ホイールベース	118 cm
トレッドセンターライン間	前輪 117 cm 後輪 121 cm
高さ	192.5 cmROPS最上部まで

アタッチメントとアクセサリ

トロが認定した各種のアタッチメントやアクセサリがそろっており、マシンの機能をさらに広げることができます。詳細は弊社の正規サービスディーラ、または代理店へお問い合わせください弊社のウェブサイト www.Toro.com でもすべての認定アタッチメントとアクセサリをご覧になることができます。

いつも最高の性能と安全性を維持するために、必ずToroの純正部品をご使用ください。他社の部品やアクセサリを御使用になると危険な場合があり、製品保証を受けられなくなる場合がありますのでおやめください。

運転操作

運転の前に

運転前の安全確認

安全上の全般的な注意

- 子供、講習を受けていない大人、安全運転に必要な身体的能力を持たない人などには、絶対に運転させないでください。地域によっては機械のオペレータに年齢制限を設けていることがありますのでご注意ください。オーナーは、オペレータ全員にトレーニングを受講させる責任があります。
- 各部の操作方法や本機の正しい使用方法、警告表示などに十分慣れ、安全に運転できるようになりましょう。
- エンジンを停止させ、キー付きの機種ではキーを抜き取り、各部の動作が完全に停止したのを確認してから運転位置を離れる。調整、整備、清掃、格納などは、車両が十分に冷えてから行ってください。
- 車両の緊急停止方法に慣れておきましょう。
- 車両に備え付けてある手すりの数運転者と助手の2人以外の人を乗せないでください。
- 安全装置やステッカー類が所定の場所あることを確認してください。機能しない安全装置はすべて交換、読めないステッカーはすべて貼り替えてください。これらが正しく機能しない時には機械を使用しないでください。

燃料についての安全事項

- 燃料の取り扱いに際しては安全に特にご注意ください。燃料は引火性が高く、気化すると爆発する可能性があります。
- 燃料取り扱い前に、引火の原因になり得るタバコ、パイプなど、すべての火気を始末してください。
- 燃料の保管は必ず認可された容器で行ってください。
- エンジン回転中などエンジンが高温の時には、燃料タンクのふたを開けたり給油したりしないでください。
- 締め切った場所では燃料の補給や抜き取りをしないでください。
- ガス湯沸かし器のパイロット火やストーブなど裸火や火花を発するものがある近くでは、機械や燃料容器を保管格納しないでください。
- 燃料がこぼれたら、エンジンを始動せずにマシンを別の場所に動かし、気化した燃料ガスが十分に拡散するまで引火の原因となるものを近づけないでください。

毎日の整備作業を実施する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

毎日の運転前に、保守 (ページ 31)に記載されている「使用ごと/毎日の点検整備」を行ってください。

タイヤ空気圧を点検する

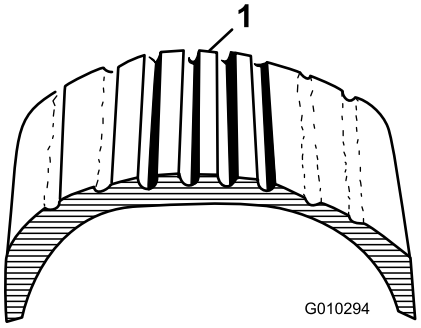
整備間隔: 使用するごとまたは毎日

前タイヤの規定空気圧2.20 bar2.24 kg/cm2 = 32 psi

後タイヤの規定空気圧1.24 bar2.24 kg/cm2 = 18 psi

重要 **タイヤ空気圧はひんぱんに点検して適正に保ってください。空気圧が適正でないと、タイヤの摩耗が通常より早くなって四輪駆動できなくなる場合があります。**

図 18は空気圧不足で生じる磨耗の例です。

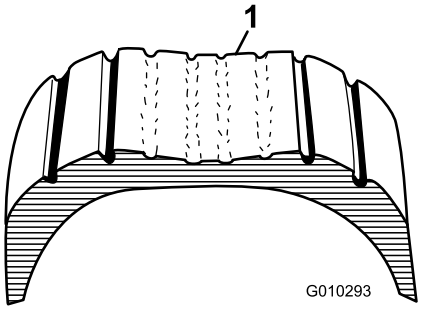


g010294

図 18

1. 空気圧不足のタイヤ

図 19は空気圧過多で生じる磨耗の例です。



g010293

図 19

1. 空気圧が高すぎるタイヤ

燃料を補給する

- 機械の性能を最も良く発揮させるために、セタン価87以上の、きれいで新しい購入後30日以内無鉛ガソリンを使ってくださいセタン価評価法は(R+M)/2を採用。
- **エタノール** エタノールを添加10% までしたガソリン、MTBEメチル第3ブチルエーテル添加ガソリン15% までを使用することが可能です。エタノールとMTBEとは別々の物質です。エタノール添加ガソリン15% 添加=E15は使用できません。**エタノール含有率が 10% を超えるガソリンは絶対に使用してはなりません**たとえば E15含有率 15%、E20含有率 20%、E85含有率 85%がこれにあたります。これらの燃料を使用した場合には性能が十分に発揮されず、エンジンに損傷が発生する恐れがあり、仮にそのようなトラブルが発生しても製品保証の対象とはなりません。
- メタノールを含有するガソリンは**使用できません**。
- **燃料タンクや保管容器でガソリンを冬越しさせないでください。 冬越しさせる場合には必ずスタビライザ品質安定剤を添加してください。**
- ガソリンに**オイルを混合しないでください**。

スタビライザー/コンディショナー

燃料の品指示保持のため、燃料のスタビライザー/コンディショナーを添加してください。スタビライザー/コンディショナーのメーカーの指示を守ってお使いください。

重要 **エタノール、メタノールを含んだ添加剤は絶対に使用しないでください。**

スタビライザー/コンディショナーは新しい燃料に使用し、メーカーの指示に従った量を添加してください。

燃料を補給する

燃料タンク容量25 リットル

1. 燃料タンクのキャップの周囲をきれいに拭く。
2. 燃料タンクのキャップを取る図 20。

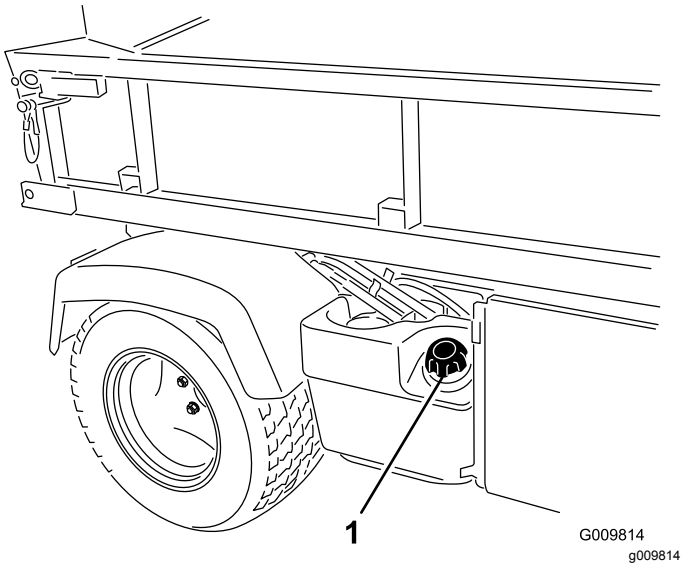


図 20

1. 燃料タンクのキャップ

3. タンクの天井給油口の根元から約 25 mm下まで燃料を入れ、キャップをはめる

   注 燃料を入れすぎないでください。
4. こぼれたガソリンは火災防止のためにすぐに拭き取る

新車の慣らし運転

整備間隔: 使用開始後最初の 100 時間—慣らし運転のためのガイドライン

新しい車両の性能がフルに発揮され永くお使いいただけるよう、以下のことをお守りください

- ブレーキの慣らし掛けができていることを確認する6 ブレーキの慣らし掛けを行う (ページ 13)を参照。
- エンジンオイルその他の液類の量を定期的に点検する。車両そのものや、車両を構成している機器が過熱していないか注意を払う。
- エンジンが冷えている時には、始動後 15 秒間程度のウォームアップを行う。

  注 寒い日に運転する場合には十分にエンジンをウォームアップしてください。
- 意識的に速度を変えながら走行する。急発進や急停止をしない。
- エンジンオイルの初期交換は不要。初期オイルには通常のエンジンオイルを使用している。
- 初期整備については 保守 (ページ 31)を参照する。

安全インタロックシステムの動作を確認する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

インタロックシステムは、ブレーキペダルを踏み込んだ状態でしかも油圧昇降レバーがニュートラル位置にない限りエンジンが始動クランキングもできないようにする安全装置です。

⚠ 注意

インタロックスイッチは安全装置でありこれを取り外すと予期せぬ人身事故が起こり得る。

- **インタロックスイッチをいたずらしないこと。**
- **作業前にインタロックスイッチの動作を点検し、不具合があれば作業前に交換修理する。**

注 アタッチメントのインタロックの点検については、それぞれのアタッチメントの *オペレーターズマニュアル* を参照してください。

油圧昇降レバーのインタロックスイッチの点検

1. 運転席に座り、駐車ブレーキが掛かっているのを確認する。
2. シフトレバーをニュートラル位置にし、油圧昇降レバーが中央位置になっていることを確認する。
3. 非TC モデルでハイフロー油圧キットオプションを搭載しているもの、またはTCモデルの場合 ハイフロー油圧スイッチをOFFにする。
4. ブレーキペダルを踏み込む。
5. 油圧昇降レバーを前に動かし、キーを右に回してSTART位置にする。

   注 クランキングする場合はインタロックスイッチが故障しているので、運転前に修理する。

ブレーキペダルのインタロックスイッチの点検

1. 運転席に座り、駐車ブレーキが掛かっているのを確認する。
2. シフトレバーをニュートラル位置にし、油圧昇降レバーが中央位置になっていることを確認する。
3. 非TC モデルでハイフロー油圧キットオプションを搭載しているもの、またはTCモデルの場合 ハイフロー油圧スイッチをOFFにする。
4. キーを START 位置に回す。

   注 ブレーキペダルは踏み込まない。

   注 クランキングする場合はインタロックスイッチが故障しているので、運転前に修理する。

ハイフロー油圧システムの安全装置の点検

注 ハイフロー油圧キットオプション搭載の非TC モデル、またはTC モデルで必要な作業です。

1. 運転席に座り、駐車ブレーキが掛かっているのを確認する。
2. シフトレバーをニュートラル位置にし、油圧昇降レバーが中央位置になっていることを確認する。
3. ハイフロー油圧スイッチを ON にセットする。
4. ブレーキペダルを踏み込む。
5. キーを START 位置に回す。

   注 クランキングする場合はインタロックスイッチが故障しているので、運転前に修理する。

運転中に

運転中の安全確認

安全上の全般的な注意

- オーナーやオペレータは自分自身や他の安全に責任があり、オペレータやユーザーの注意によって物損事故や人身事故を防止することができます。
- 座席以外の場所に人を乗せないでください。荷台に人を乗せないでください。作業場所に、無用の大人、子供、ペットなどを近づけないでください。
- 作業にふさわしい服装をし、安全めがね、長ズボン、頑丈で滑りにくい安全な靴、および聴覚保護具を着用してください。長い髪は束ねてください。ゆるい装飾品やだぶついた服は身に着けないでください。
- この機械を運転する時は常に十分な注意を払ってください。運転中は運転操作に集中してください注意散漫は事故の大きな原因となります。
- 疲れている時、病気の時、アルコールや薬物を摂取した時は運転しないでください。
- 屋外または換気のよい場所以外では本機を運転しないこと。
- アタッチメントに過負荷を掛けないでください。また、車両総重量GVWの範囲内で使用してください。
- 重い荷を搬送している時は、ブレーキと旋回に十分注意してください。
- また、荷台からはみ出すように積載した場合も、車両の安定性が損なわれます。定格重量以上に積載しないでください。
- 液体タンクなど、車両に固定するのが難しいものを搭載している時はハンドリング、ブレーキング、車両の安定性に影響が出ます。車体に固定できない資材を搬送している時は、ハンドル操作とブレーキ操作に注意してください。
- 不整地、ラフ、凹凸のある場所、縁石の近く、穴の近くなど路面が一定でない場所では必ず減速してください。また、そのような場所を走行する場合には、積荷を減らしてください。車体が揺れると重心が移動し、運転が不安定になります。
- 車両を始動する前に、トランスミッションがニュートラルであること、駐車ブレーキが掛かっていることを確認し、運転席に着席してください。
- 運転中は必ず全員が着席してください可能な限り両手でハンドルを握り、助手席の人は必ず手すりを握ってください。また、手足を車外に出さないようにしてください。
- 運転は良好な視界のもとで行ってください。隠れた穴、わだち、盛り上がり、石などの見えない障害に警戒を怠らないでください。不整地では機体が転倒する可能性があります。深い芝生に隠れて障害物が見えないことがあります。見通しの悪い曲がり角や、茂み、立ち木などの障害物の近くでは安全に十分注意してください。
- 段差や溝、大きく盛り上がった場所の近くなどで運転しないでください。万一車輪が段差や溝に落ちたり、地面が崩れたりすると、機体が瞬時に転倒し、非常に危険です。
- 頭上の危険物に注意し、低く垂れ下がった木の枝、門、歩道橋などの下を通り抜けるときは安全を必ず確認してください。
- バックするときには、足元と後方の安全に十分な注意を払ってください。
- この車両で公道上を走行する場合には、各地域の法令などに従い、また、ヘッドライド、方向指示器、低速走行車両表示など、定められたアクセサリを必ず装備してください。
- 万一、機体に異常な振動を感じたら、直ちに運転を中止し、車両のスイッチを切り、本機の全ての動作が停止するのを待ち、それから点検にかかってください。破損部は必ず修理・交換してから運転するようにしてください
- 路面がぬれているときは、車両の停止距離が長くなります。ブレーキが濡れて利かなくなった、平らな場所で、ブレーキペダルを軽く踏み込んだまましばらく低速で運転しましょう。
- 車両後部が軽いとブレーキを掛けたときに後輪がロックしやすくなり、ロックすると車両を制御できなくなって危険です。
- エンジン回転中や停止直後は、エンジン本体、トランスミッション、マフラー、排気管などに触れると火傷の危険がありますから手を触れないでください。
- エンジンの掛かっているマシンからは離れないでください。
- 運転位置を離れる前に
  - 平らな場所に駐車する。
  - トランスミッションをニュートラルにセットする。
  - 駐車ブレーキを掛ける。
  - 荷台を降下させる。
  - 車両を止め、キーのある機種ではキーを抜き取る。
  - 全ての動きが停止するのを待つ
- 落雷の危険がある時には運転しないでください。
- 弊社Toro® カンパニーが認めた以外のアクセサリやアタッチメントを使用しないでください。

横転保護バーROPSについての安全確認

- ROPS横転保護バーはマシンと一体で使用する重要な安全装置です。
- POPSは機体から**外さない**でください。

- 必ずシートベルトを着用し、緊急時にシートベルトを迅速に外せるよう練習しておいてください。
- 頭上の障害物に注意し、これらに衝突しないように注意してください。
- ROPS自体に損傷がないか、また、取り付け金具がゆるんでいないか、定期的に十分に点検を行い、万一の際に確実に役立つようにしておいてください。
- ROPS が破損した場合は新しいものに交換してください。修理したり改造しての使用はしないでください。

斜面での安全確保

斜面はスリップや転倒などを起こしやすく、これらは重大な人身事故につながります。

- 各斜面の実地調査を行い、乗り入れて良い斜面、乗り入れてはいけない斜面を決めておくようにしましょう。この調査においては、常識を十分に働かせてください。
- 斜面での作業に自信が持てない時は、作業を行わないでください。
- 斜面では動作も運転操作もゆっくりと行うことが原則です。走行速度や走行方向を突然変えないでください。
- ぬれた場所での運転は避けてください。走行できなくなる可能性があります。タイヤが走行力を維持していても転倒する場合があります。
- 斜面ではまっすぐに上るか下るかしてください。。
- 坂を登りきれないと感じた時はゆっくりとブレーキを踏み、バックでまっすぐに ゆっくりと下がってください
- 斜面を登りながらや下りながらの旋回は危険です。斜面で旋回しなければいけないときは、十分に減速し、慎重に操作してください。
- 車両重量が大きいときは斜面での安定が悪くなります。斜面で運転する時や重心の高いものを積んで走る時には重量をなるべく軽くし、速度を落として運転してください。荷台に資材を積む場合には、荷崩れを起こさないようにしっかりと固定してください。荷崩れしやすいもの液体、石、砂などは十分に注意してください。
- 斜面での発進・停止・旋回は避けてください。特に荷を積んでいる場合はこの注意を守ってください。下り坂では平地に比べて停止に長い距離が必要になります。斜面で停止しなければならない場合には、転倒の危険を避けるために急停止や急な速度変更をしないでください。バックで斜面を下っているときに急ブレーキを掛けないでください。後方に転倒する危険があります。

積荷の安全な積み下ろし

- 荷台に荷物を積んで運転するときや、トレーラなどの牽引を行う場合、またこれらを同時に行う場合には、定格総積載重量GWVを守ってください仕様 (ページ 19)を参照。
- また、荷物は荷台に均等に積んで、車両の安定性を確保してください。
- ダンプする時には、後方に人がいないことを確認してください。
- 斜面を横切るように駐車した状態では、ダンプ操作をしないでください。重心の急変により車両が転倒する危険があります。

荷台の操作

荷台を上げる

⚠ 警告

上昇させた荷台が万一落下すると、荷台の下にいる人に非常に危険である。

- **荷台の下で作業する時は、必ず支持棒で荷台を支えておく。**
- **荷台の下で作業するときは荷台を空にしておく。**

⚠ 警告

荷台を上昇させたままで走行すると転倒の危険が増大する。また、荷台を上昇させたままで走行すると荷台が破損させる可能性もある。

- **運転する時は必ず荷台を下げておく。**
- **ダンプ操作を終えたら必ず荷台を下げるようにする。**

⚠ 注意

荷台の後部に積荷が集中していると、ラッチを開けた際に荷台が急に開いて周囲の人間がけがをする恐れがある。

- **積荷はできる限り荷台の中央に載せる。**
- **ラッチを開放する際には、荷台を手でしっかりと押さえ、荷台に寄りかかっている人間や荷台のすぐ後ろに人がいないことを確認する。**
- **整備のために荷台を上昇させる際には、荷台から積荷をすべて降ろす。**

レバーを後ろに引くと荷台が上昇します図 21。

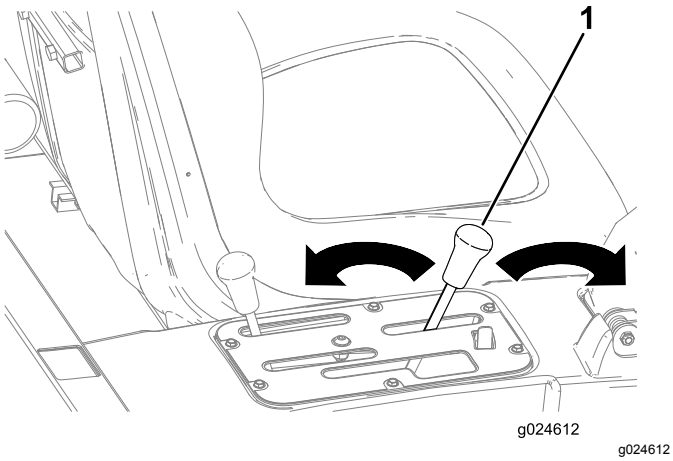


図 21

1. 荷台のレバー

荷台を下げるには

⚠ 警告

荷台は相当の重さになる。万一手などを挟まれると大けがをする。

荷台を降ろすときには、荷台に手やその他の部分を近づけないよう十分注意すること。

レバーを前へ押すと荷台が下降します図 21。

テールゲートの開け方

1. 荷台が完全に降りていてラッチが掛かっていることを確認する。
2. 荷台の左右にあるラッチを解放してテールゲートを下げる図 22。

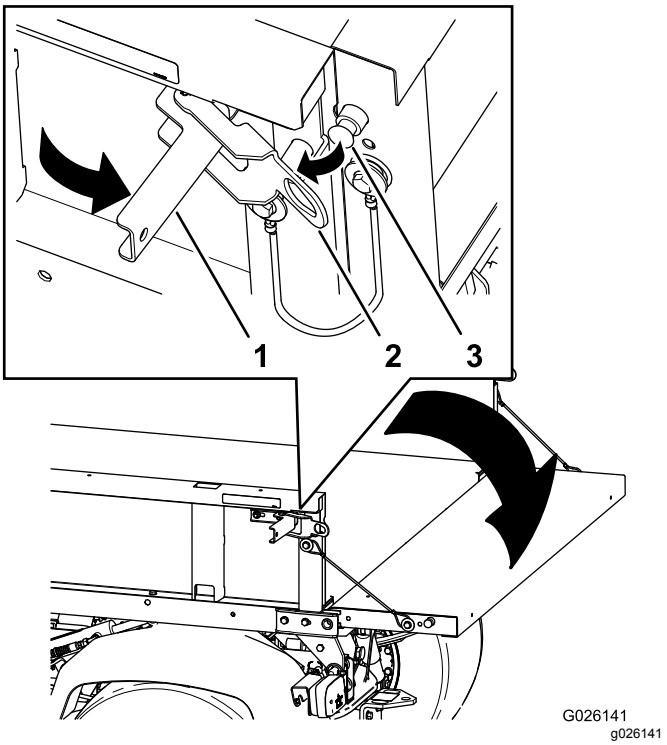


図 22

1. ラッチハンドル
2. ラッチゲート
3. ラッチピン

エンジンの始動手順

重要 **エンジンの押しがけや引きがけをしないでください。駆動系統を破損するおそれがあります。**

1. 運転席に座り、駐車ブレーキが掛かっているのを確認する。
2. PTOとハイフロー油圧装置を搭載している場合はそれぞれを解除、ハンドスロットル装備車ではハンドスロットルをOFFにする
3. トランスミッションレバーを **P** (駐車) 位置にセットする。
4. 油圧昇降レバーがOFF (中央位置) になっているのを必ず確認しておくこと。
5. ブレーキペダルを踏み込む。

   注 アクセルから足を離したままの状態で、

6. キーを差し込んで START 位置に回してエンジンを始動する。

   注 エンジンが始動したら、すぐにキーから手を離してください。

   注 エンジンオイル圧警告灯が消えれば正常。

   重要 **スタータモータを15秒間以上連続で使用するとオーバーヒートする危険があります15秒間連続で使用したら60秒間の休止時間をとってください**

マシンを運転する

1. ブレーキペダルを踏み込む。
2. 駐車ブレーキを解除する。
3. トランスミッションレバーを希望位置にセットする。
4. ブレーキペダルが足を離して、アクセルペダルをゆっくりと踏み込む。

   重要 **前進から後退へ、あるいはその逆に切り換える場合には、必ず車両を完全に停止させて行なってください。**

   以下の表に、速度レンジコントロールを**T** トランスポート移動走行位置にセットした場合の各ギアでの走行速度を示します。

ギア	速度km/h	速度マイル/時
R後退	021	013
L低速前進	018	011
D通常運転	032	020

注 長期間のアイドリングは避けてください。

注 キースイッチをON 位置にしたままエンジンを始動せずに長時間放置するとバッテリー上がりを起こします。

車両の停止手順

アクセルペダルから足を放し、ブレーキペダルをゆっくり踏み込むと車両は停止します。

エンジンの停止手順

1. エンジンを止める。
2. トランスミッションレバーを **P** (駐車) 位置にセットする。
3. 駐車ブレーキを掛ける。
4. キーを OFF 位置にして抜き取る。

速度レンジコントロールの使い方

液剤散布作業、目砂散布作業など、一定の速度で走行することが必要な作業では、速度レンジコントロールレバーを使用して最高走行速度に上限を設けることができます。速度レンジ切り替えレバー図 23で、4種類の速度レンジから作業に最もふさわしい速度レンジを選択することができます。資材の運搬用、人員移動用など、積荷の重さや必要な最高速度に応じて選びます。

注 速度レンジの切り替えは、アクセルペダルから足を離した状態で行う必要がありますが、車両を停止させる必要はありません。

- 切り替えレバーを、A, B, C, D の4つのレンジのどれかにセットすると、そのレンジで決められた最高速度での定速度走行ができます。
- 切り替えレバーが A, B, C, D の4つのレンジのどれかに入っている場合、レバーをその位置から外して前に倒すとT位置 移動走行設定になります。

注 切り替えレバーを**L** 低速前進にセットすると、走行速度が 4-18 km/h になり、**D**通常走行にセットすると、走行速度が 8-32 km/h になります。

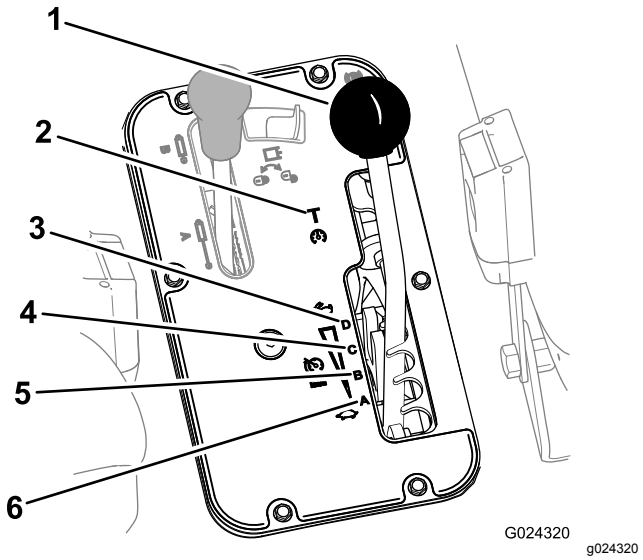


図 23

1. 速度レンジ切り替えレバー
2. **T**移動走行レンジ
3. **D**高速レンジ
4. **C**中高レンジ
5. **B**中低レンジ
6. **A**低速レンジ

デファレンシャルロックの使用

⚠ 警告

斜面での転倒事故は重大な人身事故に直結する。

- **デファレンシャルロックを使用すると、牽引力がアップするが、同時に、旋回ができないほど急な斜面などにも登れるようになるなど、潜在的な危険性も大きくなる。デファレンシャルロックを使用する時、特に急な斜面では十二分の注意を払うこと**
- **デファレンシャルロックを使用中に高速で旋回を行って内側の後輪が宙に浮くと車両の制御ができなくなり横滑りを起こすことがある。デファレンシャルロックは低速でのみ使用すること。**

⚠ 注意

デファレンシャルロックをしたままで旋回するとハンドル制御が不能になる場合があり危険である。小さな旋回をするときや高速で旋回する時は、デファレンシャルロックを解除すること。

デファレンシャルロックは、後輪のデファレンシャルギアをロックすることによって走行力を高めるものです。ぬれた芝面などの滑りやすい場所で重量物を運ぶ時や、斜面を登る時、砂地を走行する時などにデファレンシャルロックが威力を発揮します。しかし、この機能はあくまでも限られた状況で一時的に使用するための機能です。これまでに解説した斜面での安全上の注意や重い荷物を運搬する時の注意を怠ってはいけません。

デファレンシャルロックを掛けると左右の後輪が同じ速度で回転するようになります。従って、小回り機能が若干制限されるようになり、旋回時に芝を削る場合もでてきます。デファレンシャルロックは必要な時だけ、低速でのみ使用すること。

注 デファレンシャルロックの操作には車両が動いていることと、少しの旋回動作が必要です。

- デファレンシャルロックスイッチを上位置にするとデファレンシャルがロックされる図 24。

  注 ロック状態の時には、デフロックスイッチについているランプが点灯します。

- デファレンシャルロックスイッチを上位置にするとデファレンシャルが解除される図 24。

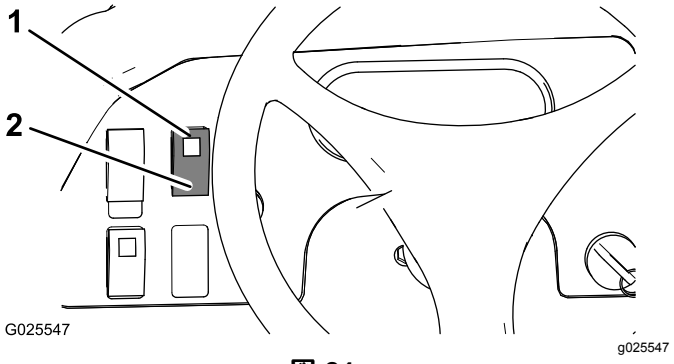


図 24

1. ロック位置デフロックスイッチ
2. 解除位置デフロックスイッチ

油圧コントロールを使用する

エンジン回転中は、常に油圧制御機能によってポンプから油圧パワーが供給されています。油圧パワーは車両後部のクイックカップラから取り出すことができます。

⚠ 警告

高圧で噴出する作動油は皮膚を貫通し、身体に重大な損傷を引き起こします。

油圧クイックカップラ の接続や取り外しは、安全を十分に確認して行うこと。必ずエンジンを停止し、駐車ブレーキを掛け、アタッチメントを降下させ、リモート油圧をフロート位置にセットし、油圧回路内部の圧力を完全に解放してから着脱作業に掛かるようにする。

重要 **ひとつのアタッチメントを複数の車両で共用している場合、トランスミッションオイルの相互汚染が生じる可能性があります。その場合はトランスミッションオイルを交換してください。.**

荷台用の油圧昇降装置を使ってのアタッチメントの操作

- **OFF 位置**

  使用していない時の通常位置です。コントロールバルブのワークポートは閉じており、負荷はすべて両方向ともチェックバルブが受けます。

- **上昇クイックカップラ「A」位置**

  荷台を上げたり、リアヒッチを上げたりする位置で、クイックカップラ「A」に油圧が掛かりますまた、クイックカップラ「B」からの戻りオイルがバルブに戻った後にオイル溜めに戻ります。この位置は連続して使用する位置ではなく、レバーから手を離すとOFFに戻ります。

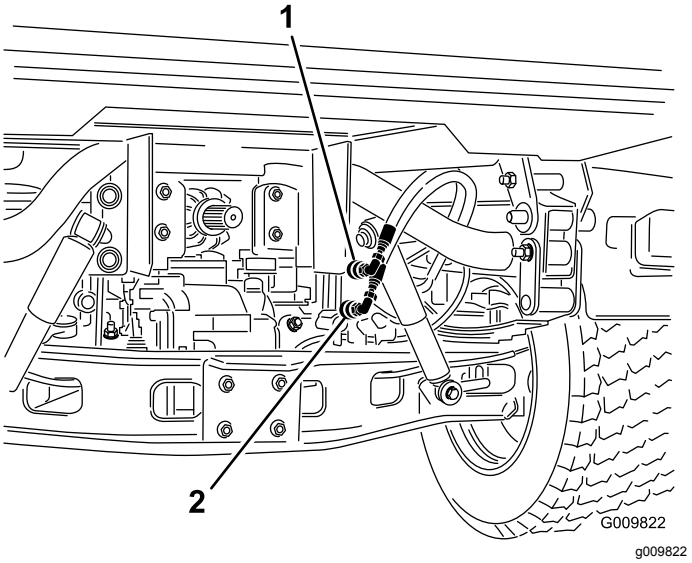


図 25

1. クイックカップラ「A」位置　2. クイックカップラ「B」位置

- **下降クイックカップラ「B」位置**

  荷台を下げたり、リアヒッチを下げたりする位置で、クイックカップラ「B」に油圧が掛かりますまた、クイックカップラ「A」からの戻りオイルがバルブに戻った後にオイル溜めに戻ります。この位置は連続して使用する位置ではなく、レバーから手を離すとOFFに戻ります。また、この位置で一時的にレバーを保持し、その後に手を離すとクイックカップラ「B」にオイルが流れて、リアヒッチに下向きの押圧が掛かります。手を離してもヒッチへの押圧が保持されます。

  重要 **油圧シリンダを取り付けた状態でレバーを「下降」位置に保持すると、オイルがリリーフバルブへ抜け、油圧システムが損傷する可能性があります。**

- **ON 位置**

  下降クイックカップラ「B」位置と似ていますが、レバー位置が固定される点が異なります。これにより、油圧モータを使用する機器に連続的にオイルを送ることができます。

  この位置は、モータを取り付けて使用するか、ごく短時間の使用にとどめてください。

  重要 **アタッチメントを何も取り付けなかったり油圧シリンダを取り付けたりしてON 位置を使用するとオイルがリリーフバルブへ抜け、油圧システムが損傷する可能性があります。この位置は、モータを取り付けて使用するか、ごく短時間の使用にとどめてください。**

  重要 **アタッチメントの取り付けが終了したら、油圧オイルの油量点検を行ってください。次にアタッチメントの作動を点検します。操作を数回行って内部のエアをパージして、その後にもう一度油量の点検を行ってください。アタッチメント用のシリンダにオイルが出入りするためトランスアクスル内のオイル量が若干変化します。オイル不足で運転すると、ポンプやリモート油圧システム、パワステ、トランスアクスルなどを損傷しますから十分注意してください。**

クイックカップラのつなぎ方

重要 **クイックカップラを十分にきれいにしてください。カップラが汚れていると油圧システム全体が汚染されますので注意してください。**

1. カップラについているロッキングリングを後ろに引く。
2. カチッと音がするまでカップラにホースニップルを差し込む。

注 外部装置をクイックカップラに接続する場合には、その装置のどちら側から油圧をかけることが必要なのかを確認し、そちらの側をカップラB に接続します クイックカップラB は、レバーを前に倒した時と ON 位置に固定したときに油圧が掛かる側です。

クイックカップラの外し方

注 車両とアタッチメントの両方を停止させた状態で、油圧昇降レバーを数回前後に動かし、内部の圧力を解放するとクイックカップラが外しやすくなります。

1. カップラについているロッキングリングを後ろに引く。
2. カップラからホースをゆっくり引き抜く。

   重要 **カップラを使用していない時は、カップラにプラグとカバーを取り付けておいてください。**

油圧装置の故障探究

- **クイックカップラがつながらない。**

  油圧が解放されていないクイックカップラに油圧がかかっている。

- **パワーステアリングを回すのに大きな力が要るまたは回すことができない。**
  - 油圧オイルが不足している。
  - 油圧オイルが過熱している。
  - ポンプが作動していない。
- **油圧オイルが漏れている。**
  - フィッティングがゆるんでいる。
  - フィッティングのO リングが無くなっている。
- **アタッチメントが作動しない。**
  - カップラの接続が完全でない。
  - カップラの接続が逆になっている。
- **キーキーというノイズが出る。**
  - リモートバルブが ON 位置になっていてリリーフバルブにオイルが回っている。
  - ベルトがゆるんでいる。
- **エンジンを始動できない**

  油圧レバーが前位置にロックされている.

運転終了後に

運転終了後の安全確認

安全上の全般的な注意

- 運転位置を離れる前に
  - 平らな場所に駐車する。
  - トランスミッションをニュートラルにセットする。
  - 駐車ブレーキを掛ける。
  - 荷台を降下させる。
  - 車両を止め、キーのある機種ではキーを抜き取る。
  - 全ての動きが停止するのを待つ
- 調整、整備、清掃、格納などは、車両が十分に冷えてから行ってください。
- ガス湯沸かし器のパイロット火やストーブなど裸火や火花を発するものがある近くでは、本機を保管格納しないでください。
- マシン各部が良好な状態にあり、ボルトナット類が十分にしまっているか常に点検してください。
- 必要に応じてシートベルトの清掃と整備を行ってください。
- 摩耗、破損したり読めなくなったステッカーは交換してください。

トレーラへの積み込み

- トレーラやトラックに芝刈り機を積み降ろすときには安全に十分注意してください。
- マシンをトレーラやトラックに積み込む際には、機体と同じ幅のある歩み板を使用してください。
- 車体が落下しないように確実に固定してください。

ロープがけポイントについては図 26 と 図 27 を参照してください。

注 トレーラに載せる場合は前進方向に向けて積み込んでください。前向きに載せられない場合、搬送中にフードが外れる危険がありますので、ワークマンのフードをロープなどでフレームにしっかりと固定するか、フードを外して別送するかしてください。

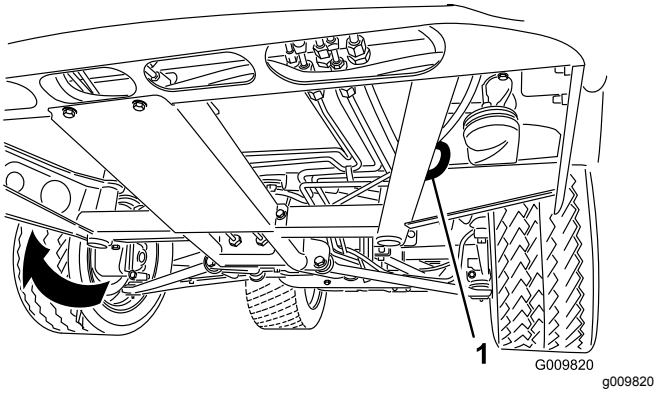


図 26

1. フレームのロープ穴各側

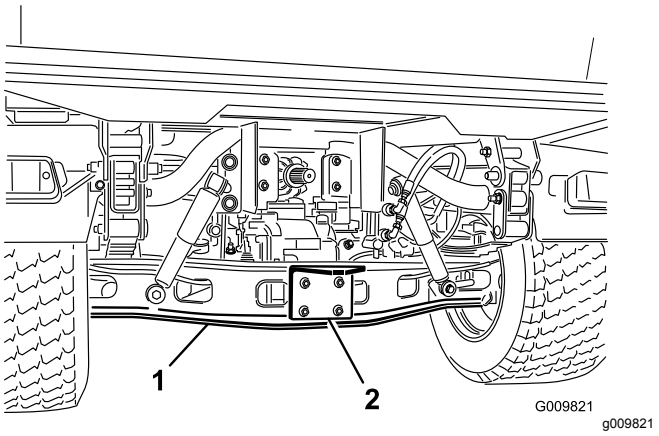


図 27

1. アクスル車軸
2. ヒッチプレート

緊急時の牽引について

緊急時には、短距離に限り、マシンを牽引または押して移動することができますが、この方法は緊急用以外には使用しないでください。

⚠ 警告

牽引時の速度が速すぎると、ハンドル操作ができなくなって人身事故となる危険がある。

牽引速度は時速 8 km/h 以下を厳守すること。

注 パワーステアリングが効きませんのでハンドル操作は重くなります。

牽引作業は二人で行います。移動距離が長くなる場合は、トラックやトレーラに積んで移送してください。

1. 機体前部にある牽引トングにロープなどの牽引索を取り付ける図 26。
2. トランスミッションをニュートラル位置にし、駐車ブレーキを解除する。

トレーラを牽引する場合

ワークマンは自重よりも大きな車両やアタッチメントを牽引することができます。牽引を行う場合、トレーラの重量によってヒッチを使い分けてください。詳細については弊社の正規代理店に問い合わせてください。

リアアクスルチューブに牽引ヒッチを取り付けた、トレーラまたはアタッチメントの最大総重量 1587 kgまでを牽引することができます。

必ず積載重量の60をトレーラの前側に振り分けてください。これにより、ヒッチプレートに掛かる負荷がトレーラの総重量グロスの約10272kgとなります。

トレーラやアタッチメント自体もワークマンも過積載にならないように注意してください。過積載では車両の性能が十分発揮できないばかりか、ブレーキ、車軸、トランスアクスル、モータ、ハンドル機構、サスペンション、ボディー構造、タイヤ等を破損する場合もあります。

重要 **駆動系統の保護のためローレンジで運転してください。**

第五ホイール式のアタッチメントフェアウェイエアレータなどでは、必ずホイールバー第五ホイールキットに付属を取り付け、トレーラ側が急停止した場合でも前輪が浮いてしまわないようにします。

保守

保守作業時の安全確保

- 適切な訓練を受けていない人には機械の整備をさせないでください。
- 運転位置を離れる前に
  - 平らな場所に駐車する。
  - トランスミッションをニュートラルにセットする。
  - 駐車ブレーキを掛ける。
  - 荷台を降下させる。
  - 車両を止め、キーのある機種ではキーを抜き取る。
  - 全ての動きが停止するのを待つ
- 調整、整備、清掃、格納などは、車両が十分に冷えてから行ってください。
- 機体の下で作業する場合には、必ずジャッキスタンドで機体を確実に支えてください。
- また、荷台を上げて作業する場合には、かならず荷台安全サポートで荷台を固定してください。
- 油圧系統のラインコネクタは頻繁に点検してください。油圧を掛ける前に、油圧ラインの接続やホースの状態を確認してください。
- 油圧系統の整備作業を行う時は、必ずモータを停止し、ダンプバルブを上昇から下降に切り替えるか、荷台やアタッチメントを下降させてシステム内部の圧力を完全に解放してください。リモート油圧装置のレバーは平らに寝た状態にセットしてください。荷台を上げた時には、必ず安全サポートで支えてください。
- 機器類を取り外すとき、スプリングなどの力が掛かっている場合があります。取り外しには十分注意してください。
- 整備中に、車両搭載のバッテリーを充電しないでください。
- ねじ類は十分に締めつけ、常に機械全体の安全を心掛けてください。
- 火災防止のため、車両に、余分なグリス、草や木の葉、ほこりなどが溜まらないようご注意ください。
- 可能な限り、車両を稼働させながらの整備はしないでください。可動部に近づかないでください。
- 動作させながら調整を行わなければならない時は、手足や頭や衣服を可動部に近づけないように十分ご注意ください。周囲に人を近づけないこと。
- オイルや燃料がこぼれた場合はふき取ってください。
- 推奨定期整備計画に従って駐車ブレーキの点検を行い、必要に応じて調整や整備を行ってください。
- マシン各部が良好な状態にあり、ボルトナット類が適切に締まっているか常に点検してください。擦り切れたり破損したりしたステッカーは貼り替えてください。
- 安全装置の作動を妨げるようなことや、安全装置による保護を弱めるようなことは絶対にしないでください。
- ガバナの設定を変えてエンジンの回転数を上げないでくださいToro 正規代理店でタコメータによるエンジン回転数検査を受け、安全性と精度を確認しておきましょう。
- 大がかりな修理が必要になった時や補助が必要な時は、Toro 正規代理店にご相談ください。
- 機体の改造を行うと、機械の挙動や性能、耐久性などが変化し、そのために事故が起きる可能性があります。このような使い方をすると Toro® の製品保証が適用されなくなります。

推奨される定期整備作業

整備間隔	整備手順
使用開始後最初の 2 時間	· 前輪と後輪のホイールナットをトルク締めする。
使用開始後最初の 10 時間	· 前輪と後輪のホイールナットをトルク締めする。 · 駐車ブレーキの調整状態を点検する。
使用開始後最初の 50 時間	· エンジンオイルとフィルタの交換を行う。 · フィルタの開口部を点検する。 · トランスミッションオイルの量を点検する。
使用開始後最初の 100 時間	· 慣らし運転のためのガイドライン

整備間隔	整備手順
使用するごとまたは毎日	・ シートベルトに摩耗や破損がないか点検してください。正常に機能しないシートベルトは交換してください。 ・ タイヤ空気圧を点検する。 ・ インタロックシステムの動作を点検する。 ・ エンジンオイルの量を点検する。（初めての運転の前に必ず油量を確認し、その後は毎日点検してください。） ・ エンジンオイル圧低下警告灯を点検する ・ 冷却液の量を点検する。冷却液補助タンクで、液量を点検する。ラジエターのキャップを開けないこと。初めての運転の前に必ず冷却液の量を確認し、その後は毎日点検してください。 ・ エンジン部とラジエターを清掃する。（ほこりの多い環境で使用している場合はより頻繁な清掃が必要。） ・ ブレーキオイルの量を点検する。初めての運転の前に必ず量を確認し、その後は毎日点検してください。 ・ 油圧オイルの量を点検する。（初めての運転の前に必ず油量を確認し、その後は毎日点検。） ・ マシンを洗浄する。
25運転時間ごと	・ エアクリーナのカバーを外して内部のごみを除去する。
50運転時間ごと	・ バッテリー液の量を点検する（格納中は30日ごとに） ・ バッテリーケーブルの接続状態を点検する。
100運転時間ごと	・ ベアリングとブッシュのグリスアップを行う（過酷な条件で使用している場合はより頻繁な潤滑が必要）。 ・ エアクリーナのフィルタの交換（ちりやほこりの多い環境で使用している場合はより頻繁に） ・ 点火プラグを点検する。 ・ タイヤの状態を点検する。 ・ 風速安定ボックスが破損していないか、潤滑剤が漏れていないか点検する。
200運転時間ごと	・ エンジンオイルとフィルタの交換を行う。 ・ カーボンキャニスタフィルタを交換する。 ・ 前輪と後輪のホイールナットをトルク締めする ・ 速度コントロールシリンダのオイル溜めの油量を点検する。 ・ 駐車ブレーキの調整状態を点検する。 ・ ブレーキペダルの調整状態を点検する。 ・ 通常ブレーキと駐車ブレーキを点検する。
400運転時間ごと	・ 燃料フィルタを交換する。 ・ 燃料ラインとその接続状態を点検する。 ・ 前輪の整列を点検する。 ・ トランスミッションオイルの量を点検する。 ・ 走行ベルトの状態を点検する。 ・ クラッチを洗浄する。 ・ ブレーキシューが磨耗していないかブレーキを目視点検する。
800運転時間ごと	・ 推奨油圧オイルを使用していない場合や代替品のオイルを使用したことがある場合には、ハイルフロー油圧オイルとフィルタを交換してください。
1000運転時間ごと	・ 冷却系統の内部を洗浄し新しい冷却液に交換する。 ・ ブレーキオイルを交換する。 ・ 推奨オイルをご使用の場合には、油圧オイルフィルタを交換してください。
2000運転時間ごと	・ 推奨オイルを使用している場合には、油圧オイルを交換してください。
1年ごと	・ エンジンマニュアルに記載されている1年ごとの定期整備をすべて実施する。

注 www.Toro.com から、電気回路図を無料でダウンロードすることができます。弊社ホームページからマニュアルへのリンクをご活用ください。

重要 **エンジンの整備に関しての詳細は、付属のエンジンマニュアルを参照してください。**

⚠ 警告

適切な保守整備を行わないと車両が故障・破損したり、搭乗者や周囲の人間まで巻き込む人身事故を起こす恐れがある。

マニュアルに記載された作業を行って、マシンをいつも適切な状態に維持することが重要である。

⚠ 注意

許可を受けた有資格者以外には保守、修理、調整、点検などの作業をさせないでください。

- **作業場には危険物を置かぬようにし、また、防火機 器を備えること。燃料やバッテリー液、オイルなどの点検に裸火を使用しないこと。**
- **ガソリンや溶剤を使ってパーツ部品を洗浄する時には必ず密閉型の洗浄容器を使うこと。**

⚠ 注意

始動スイッチにキーをつけたままにしておくと、誰でもいつでもエンジンを始動させることができ、危険である。

整備を行う前には、エンジンを止め、キーをスイッチから抜き取ること。

特殊な使用条件下で使用する場合の保守整備について

重要 **以下のような条件で使用する場合には、保守間隔を通常の半分に短縮し、より頻繁な整備を行ってください**

- 砂漠、荒れ地での使用
- 酷寒地気温10℃以下での使用
- トレーラ作業
- 非常にほこりの多い条件下での頻繁な使用
- 建設現場での使用
- 泥地、砂地、濡れた場所など車体が汚れる場所で長時間の作業を行った後は、以下を行ってください
  - 使用が終わったらできるだけすぐにブレーキの洗浄と点検を行ってください。 これにより無用な摩耗を防止することができる。
  - 水または水と刺激の少ない洗剤で車体を洗浄する。

    重要 **塩分を含んだ水や処理水は機体の洗浄に使用しないでください。**

整備前に行う作業

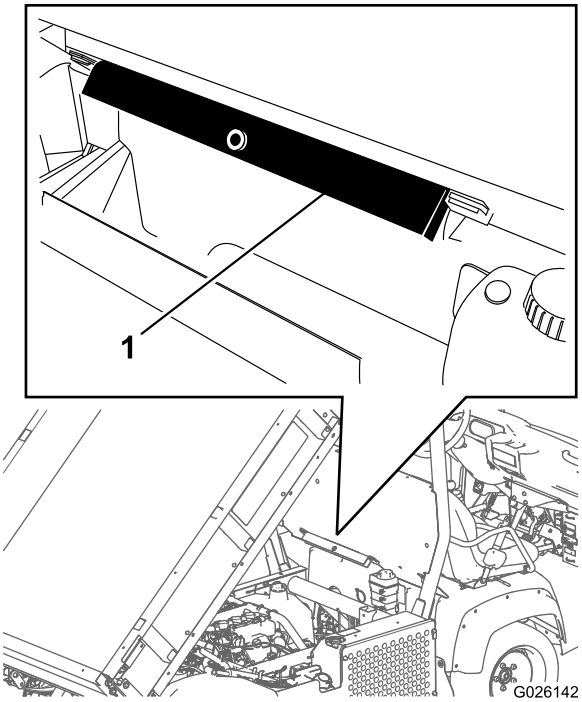
整備作業のための準備

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛ける。
3. 荷台を空にして上昇させる 荷台を上げる (ページ 24)を参照。
4. エンジンを止め、キーを抜き取る。
5. 車体が十分冷えるのを待って整備作業を開始する。

安全サポートの使い方

重要 **サポートの取り付け取り外しは必ず荷台外側から行う。**

1. 荷台を上げ、シリンダが完全に伸びたのを確認する。
2. ROPS パネルの後ろについている保管用ブラケットから荷台サポート安全サポートを取り外す図 28。

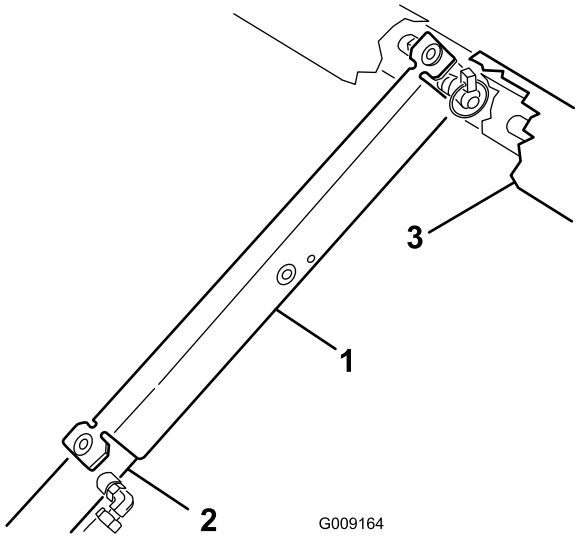


g026142

図 28

1. 安全サポート

3. サポートをシリンダロッドにはめ込んで、安全サポートの端部でシリンダバレルの端とシリンダロッドの端を確実に支える図 29。



g009164

図 29

1. 安全サポート
2. シリンダバレル
3. 荷台

4. 荷台を下げる時は、安全サポートを取り外して元の位置ROPS パネル後ろ保管用ブラケットに収納する。

   重要 **昇降シリンダに安全サポートを取り付けたままで荷台を下げようとしないこと。**

フルサイズ荷台の取外し

1. エンジンを始動し、油圧昇降レバーで荷台を降下させてスロットの中でシリンダが遊んでいる状態にする。
2. 昇降レバーから手を離し、エンジンを停止する。
3. シリンダの外側端部からリンチピンを外す図 30。

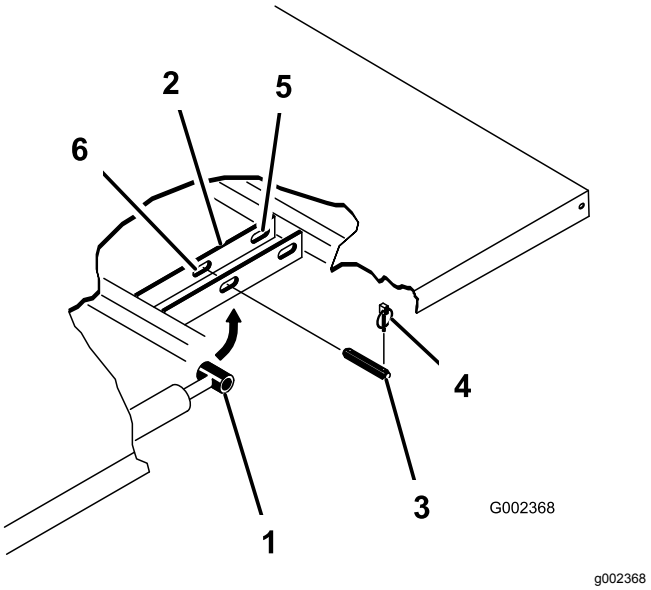


図 30

1.	シリンダロッドの端部	4.	リンチピン
2.	荷台取り付けプレート	5.	後ろのスロットフルサイズ荷台用
3.	クレビスピン	6.	前のスロット2/3 荷台用

4. シリンダロッドの端部を荷台取り付けプレートのスロットに固定しているクレビスピンを内側に押し込んで外す(図 30)。
5. ピボットブラケットをフレームに固定しているリンチピンとクレビスピンを外す図 30。
6. 車体から荷台を外す。

⚠ 注意

フルサイズ荷台は約148kg の重量があり、一人で作業することは不可能である。

必ず 2 人または 3 人で行なうか、ホイストを使うこと。

7. シリンダを格納用クリップで固定する。
8. 油圧昇降レバーを誤って操作しないように、ロックしておく。

フルサイズ荷台の取付け

注 荷台に側板を取り付ける場合は、先に側板を取り付けてから荷台を車両に取り付けると楽に作業ができます。

後部のピボットプレートは下端を後部に向けて荷台フレームチャネル鋼材にボルトで固定されています図 31。

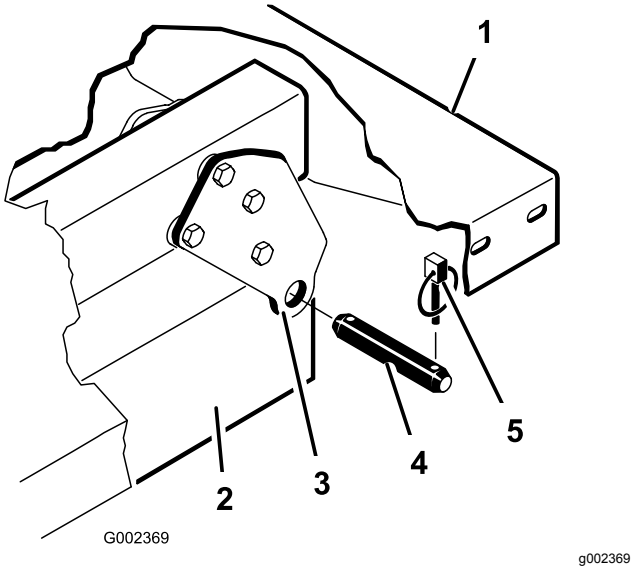


図 31

1.	荷台の左後ろ角	4.	クレビスピン
2.	機体フレームのチャネル鋼	5.	リンチピン
3.	ピボットプレート		

⚠ 注意

フルサイズ荷台は約148kg の重量があり、一人で作業することは不可能である。

必ず 2 人または 3 人で行なうか、ホイストを使うこと。

スペーサブラケットとウェアブロック図 32はキャリッジボルトで固定しますが、このボルトは必ず頭を車両の内側に向けてください。

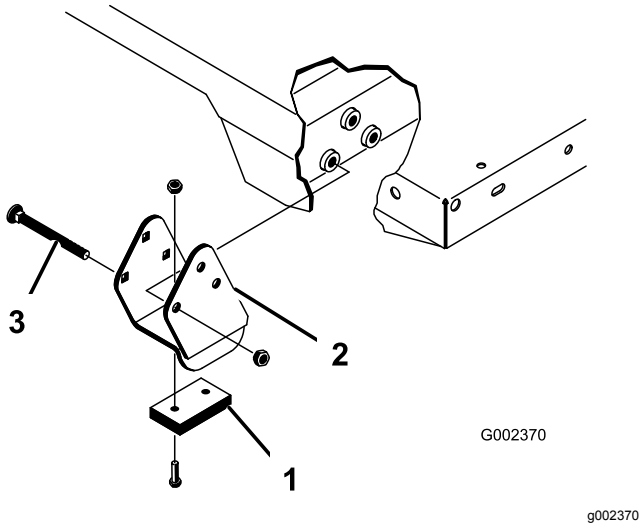


図 32

1. ウェアブロック
2. スペーサブラケット
3. キャリッジボルト

1. シリンダが完全に縮んだのを確認する。
2. 荷台を慎重に車両フレームの上に載せる 後部にある荷台のピボットプレートの穴とリアフレームチャネル鋼材の穴を揃えて、クレビスピンとリンチピン各2個を取り付ける図 32。
3. 荷台を下げた状態のまま、各シリンダロッド端部を荷台取り付けプレートのスロットに固定する クレビスピンとリンチピンを使用。
4. クレビスピンは荷台の外側から差し込み、リンチピンが荷台の外側に向くようにする図 32)。

   注 後ろ側のスロットはフルサイズ荷台の取付け用で、前側のスロットは 2/3 荷台の取付け用。

   注 穴の位置が揃わない場合はエンジンを掛けてシリンダを伸縮させて合わせてください。

   注 使っていない穴をボルトとナットでふさいでおくと、組立て時の間違いを防ぐことができます。
5. エンジンを掛け、油圧昇降レバーを操作して荷台を上げる。
6. 昇降レバーから手を離し、エンジンを停止する。
7. 荷台の安全サポートを取り付けて、誤って荷台が下がってこないようにしておく 安全サポートの使い方 (ページ 34)を参照。
8. クレビスピンの内側の端部にリンチピンを取り付ける。

   注 荷台にテールゲート自動開放装置を搭載している場合は、リンチピンを取り付ける前に、必ず、フロントダンプリンクロッドが左側のクレビスピンの内側にきていることを確認してください。

車体をジャッキで持ち上げる場合

⚠ 危険

ジャッキに載っている車体は不安定であり、万一外れると下にいる人間に怪我を負わせる危険が大きい。

- **ジャッキアップした状態でエンジンを始動してはならないエンジンの振動や車輪の回転によって車体がジャッキから外れる危険がある。**
- **車両から降りる時は必ずスイッチからキーを抜いておく。**
- **ジャッキアップした車両には輪止めを掛ける。**

車両前部をジャッキアップする時は必ず 5×10cm 程度の角材等をジャッキとフレームの間にかませる。

車両前部のジャッキアップポイントは、前中央フレームサポート下側です図 33。

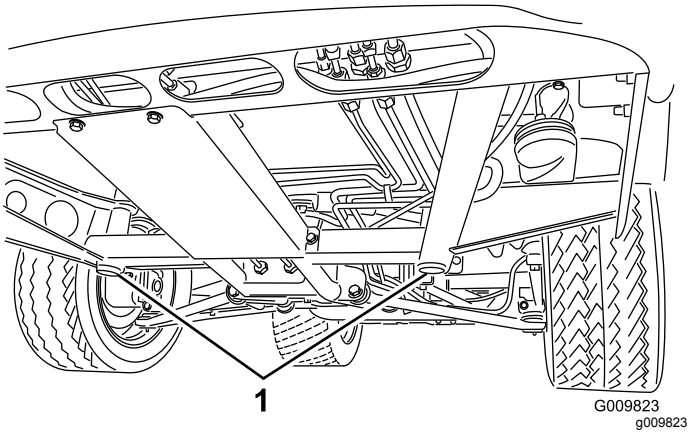


図 33

1. 車体前部のジャッキアップポイント

車体後部のジャッキアップポイントはアクスルチューブの下側です図 34。

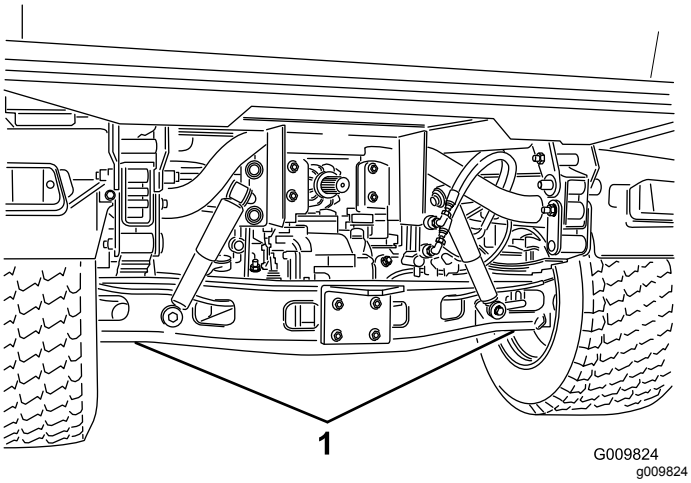


図 34

1. 車体後部のジャッキアップポイント

フードの取り付けと取り外し

フードを外す

1. ヘッドライトの開口部でフードをつかみ、フードを持ち上げて、下側の取り付けタブをフレームの穴から外す図 35。

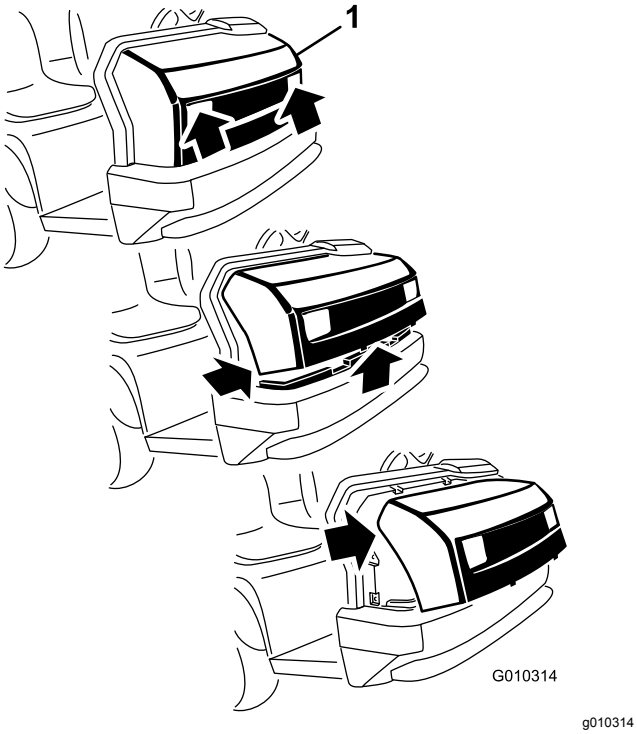


図 35

1. フード

2. フードの下側を手前に持ち上げて、上部の取り付けタブをフレームのスロットから引き抜けるようにする図 35。
3. フードの上側を前に倒し、ヘッドライトからワイヤコネクタを抜く図 35。
4. フードを外す。

フードを取り付ける

1. ライトを接続する。
2. 上側の取り付けタブをフレームの穴に差し込む図 35。
3. 下側の取り付けタブをフレームの穴に差し込む図 35。
4. フードが上下左右の溝にしっかりはまっていることを確認する。

潤滑

ベアリングとブッシュのグリスアップ

整備間隔: 100運転時間ごと 過酷な条件で使用している場合はより頻繁な潤滑が必要。

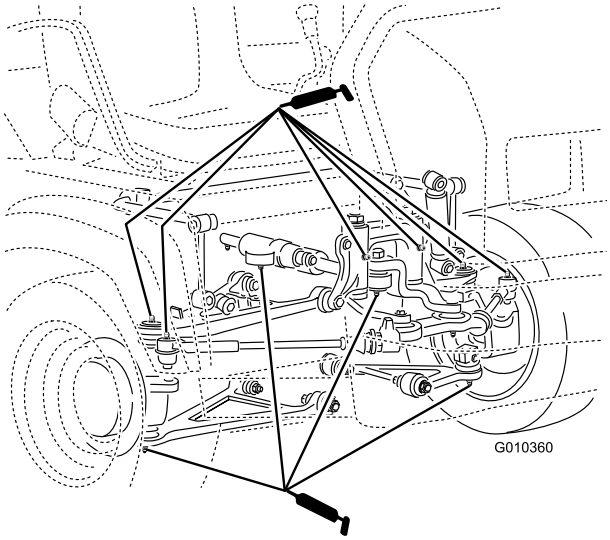
グリスの種類No. 2 汎用リチウム系グリス

***重要*ドライブシャフトとユニバーサルシャフトベアリングのクロス部分では、つのカップ全部からグリスがはみ出てくるまでグリスを入れてください。**

1. 異物を入れてしまわないよう、グリスフィッティングをウェスできれいに拭く
2. フィッティングにグリスガンを接続してグリスを注入する。
3. はみ出したグリスは表面からきれいにふき取る。

グリスアップ箇所は以下の通りです

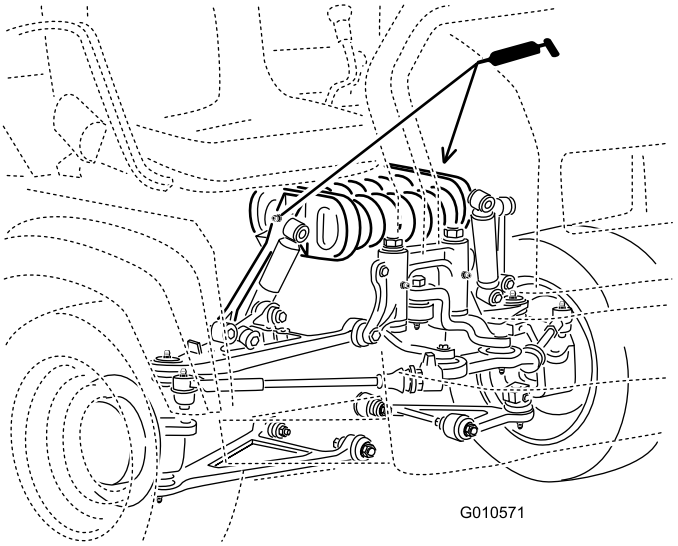
- **ボールジョイント (4ヶ所)**; 図 36を参照
- **ピボットマウント (2ヶ所)**; 図 36を参照
- **ステアリングシリンダ (2ヶ所)**; 図 36を参照
- **タイロッド (2ヶ所)**; 図 36を参照



g010360

図 36

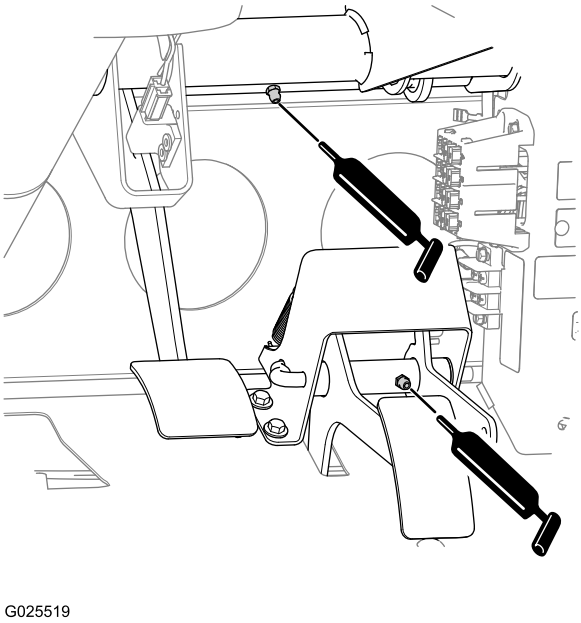
- **スプリングタワー (2ヶ所)**; 図 37を参照



g010571

図 37

- **ブレーキ (1ヶ所)**; 図 38を参照
- **スロットル (1ヶ所)**; 図 38を参照



g025519

図 38

- **駆動シャフトの U ジョイント (2ヶ所)**; 図 39を参照
- **スライディングヨーク (1ヶ所)**; 図 39を参照

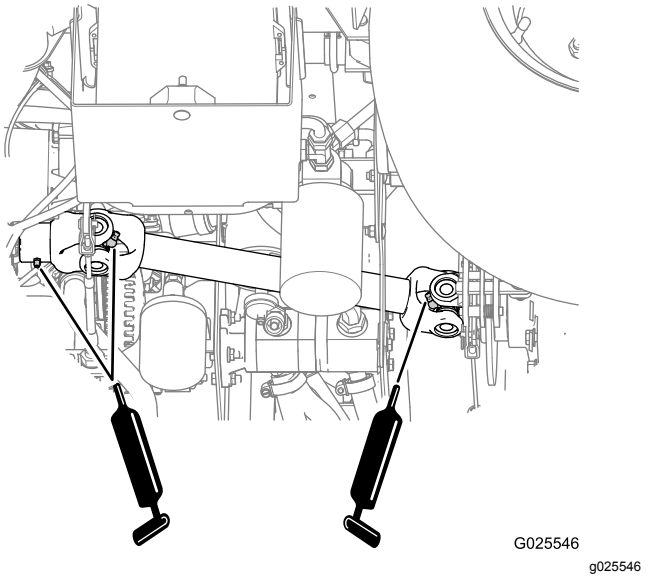


図 39

エンジンの整備

エンジンの安全事項

- オイル量の点検やオイルの補給を行う時は必ずエンジンを停止させ、キーを抜き取り、各部が完全に停止したのを確認してから作業に移る。
- 手足や顔や衣服を回転部やマフラなどの高温部に近づけないよう十分注意すること。

エアフィルタの整備

整備間隔: 25運転時間ごと—エアクリーナのカバーを外して内部のごみを除去する。

100運転時間ごと—エアクリーナのフィルタの交換 ちりやほこりの多い環境で使用している場合はより頻繁に

定期的にフィルタとホースアセンブリを点検し、エンジンの保護と寿命の安定をはかってください。エアフィルタのカバーとハウジングにリーク原因となる傷がないか点検してください。破損している部品は交換してください。

1. ラッチを引いて外し、カバーを左にひねってボディーからはずす図 40。

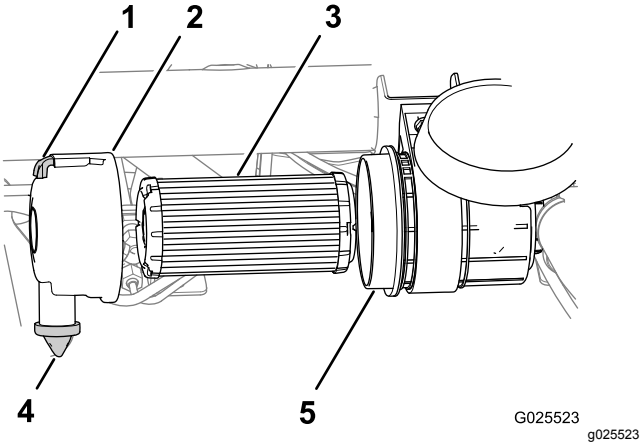


図 40

1. ラッチ
2. エアフィルタのカバー
3. エアフィルタ
4. ダストバルブ
5. エアフィルタのハウジング

2. フィルタを外す前に、低圧のエア2.8 kg/cm2、異物を含まない乾燥した空気で、エアフィルタの外側とエアフィルタのハウジングの間に溜まっている大きなゴミを取り除く。

   重要 **高圧のエアは使用しないこと。異物がフィルタを通ってエンジン部へ吹き込まれる恐れがある。このエア洗浄により、1次フィルタを外した時にほこりが舞い上がってエンジン部へ入り込むのを防止することができる。**

3. ハウジングからエアフィルタを外す図 40。

注 エレメントを破損させる危険が大きいので、エレメントを掃除して再使用しないでください。

4. エアフィルタのカバーとハウジングの内部をきれいに拭く図 40。
5. カバーについているゴム製のダストバルブを取り外す図 40。
6. エアクリーナのカバーについている異物排出ポートとダストバルブの内部を清掃し、ダストバルブを元通りに取り付ける図 40。
7. 新しいエアフィルタに傷がついていないかを点検する。特にフィルタとボディーの密着部に注意する。

   重要 **破損しているフィルタは使用しない。**
8. エアフィルタをボディ内部にしっかり取り付ける。エレメントの外側のリムを軽く押さえて確実にハウジングに密着させる図 40。
9. エアフィルタのカバーをダストバルブの6時の位置カバーの左側から見た時の位置に合わせる図 40)。
10. エアフィルタにラッチを掛けて固定する図 40。

    注 インジケータ装備されている場合が赤になっている場合はリセットする。

エンジンオイルについて

注 ほこりのひどい場所で使用する場合は、より頻繁なオイル交換が必要です。

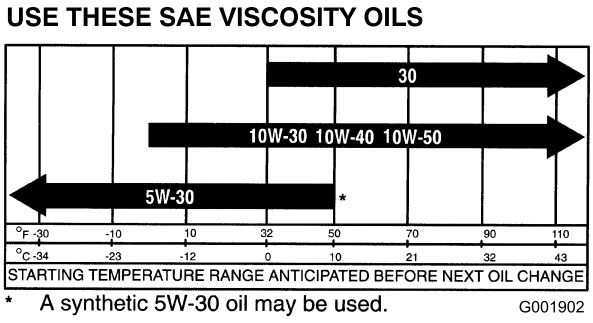
注 使用済みのオイルやフィルタはリサイクルセンターに持ち込むなど適切な方法で処分してください。。

エンジンオイルの仕様

オイルのタイプ 洗浄性オイルAPI 規格 SJ またはそれ以上)

クランクケースのオイル量 2.0 リットルフィルタ交換時

粘度 下の表を参照してください。



g001902

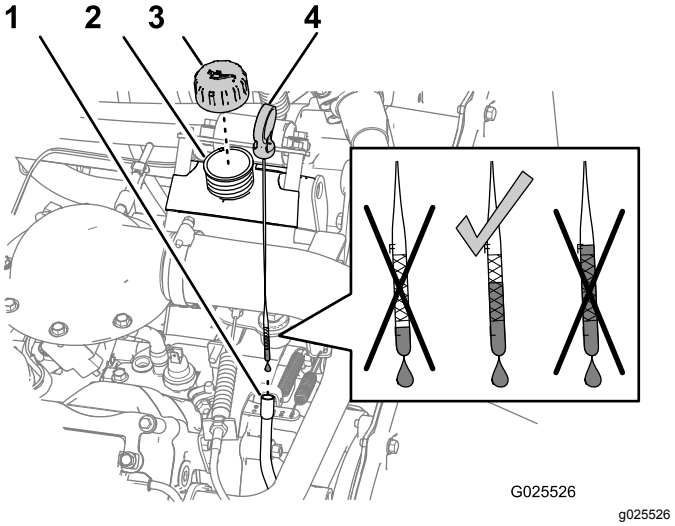
図 41

エンジンオイルの量を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日—エンジンオイルの量を点検する。 初めての運転の前に必ず油量を確認し、その後は毎日点検してください。

注 エンジンオイルを点検する最もよいタイミングは、その日の仕事を始める直前、エンジンがまだ冷えているうちです。エンジン部がすでに高温になっている場合には、エンジン停止後、少なくとも10分間待ってからオイル量の点検を行ってください。

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛ける。
3. エンジンを止め、キーを抜き取る。
4. ディップスティックを抜ききれいなウェスで一度拭く図 42。



g025526

図 42

1. ディップスティックチューブ
2. 補給管
3. 補給口キャップ
4. ディップスティック

5. ディップスティックを、チューブの根元までもう一度しっかりと差し込む。
6. 引き抜いてディップスティックの目盛りで油量を点検する図 42。
7. オイルの量が不足している場合は、補給口のキャップ図 42を取り、ディップスティックの FULL マークまで補給する。

   注 補給は通気を確保するためにディップスティックを抜いて行い、時々ディップスティックで確認しながら、少量ずつオイルを入れるようにする。**入れすぎないように注意してください。**

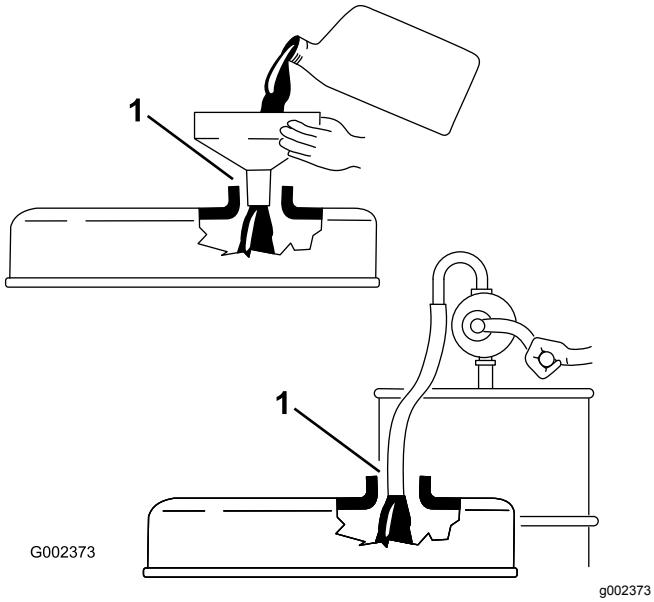


図 43

1. 補給口と補給用のオイル容器との間にすきまを作ってください。

重要 **エンジンオイルを補給する時には、補給口とジョウゴなどの間に 図 43 に示すようなすき間が必要です。オイルを補給するときに空気を逃がすためにこのすき間が必要となります。**

8. 補給口にキャップを取り付ける図 42。
9. ディップスティックを元通りに取り付ける図 42。

エンジンオイルとフィルタの交換

整備間隔: 使用開始後最初の 50 時間

200運転時間ごと

1. 荷台を上げ、サポートを取り付けて、荷台を固定する。
2. ドレンプラグの下にオイルを受ける十分に大きな容器をおく図 44。

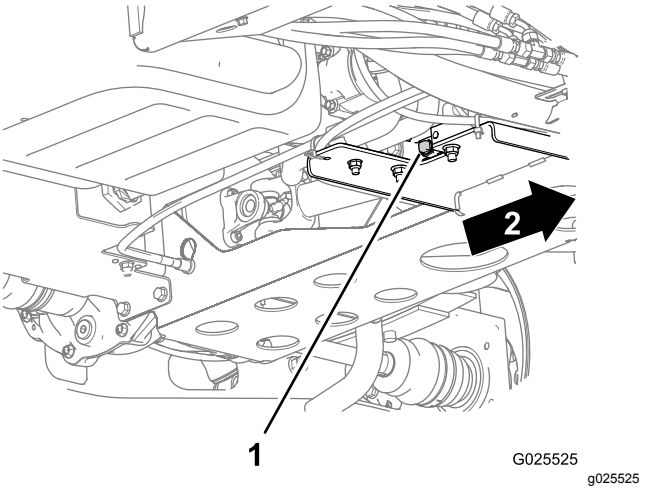


図 44

1. ドレンプラグ
2. 前

---

3. ドレンプラグを外してオイルを容器に受ける(図 44) 。
4. オイルが抜けたらドレンプラグを取り付ける。
5. フィルタのアダプタからオイルフィルタを外す図 45。

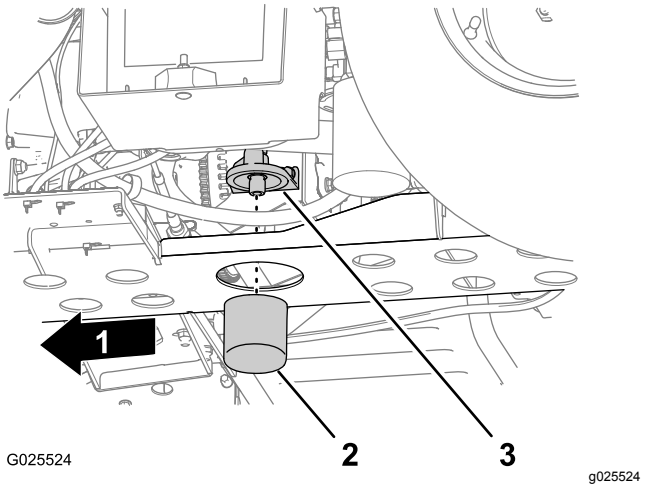


図 45

1. 前
2. オイルフィルタ
3. フィルタのアダプタ

---

6. フィルタのアダプタのシールのベース部分をきれいに拭く図 45。
7. 新しいフィルタのシールにきれいなエンジンオイルを薄く塗る。
8. ガスケットがシールベースに当たるまで手でフィルタを取り付け、そこから更に 1/2 - 2/3 回転増し締めする図 45。

   注 エンジンオイルフィルタを締めすぎないように注意してください。

9. クランクケースに所定のオイルを入れる。

オイル圧警告灯を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日

注 エンジンを停止させた直後は、1-2 分間待たないとランプが点灯しない場合があります。

1. 駐車ブレーキを掛ける。
2. 始動キーをON位置に回すが、エンジンは始動させない。

   注 オイル圧警告灯が赤く点灯する。

   注 点灯しないランプがあった場合には、電球が切れているかそれぞれの監視回路に異常が発生しているので、必ず原因を突き止めて修理を行なう。

点火プラグの整備

整備間隔: 100運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方 必要に応じて点火プラグを交換する。

タイプ Champion RN14YCまたは同等品

エアギャップ0.762 mm

重要 **割れ、欠け、汚れその他の不具合のある点火プラグは交換してください。点火プラグにサンドブラストをかけたり、ナイフ状のもので削ったりワイヤブラシで清掃したりしないでください。プラグに残った細かい破片がシリンダ内に落ちる恐れがあります。実際にこれが起こるとエンジンを破損します。**

注 エンジンにトラブルが出た場合は必ず点火プラグの点検をしてください。

1. 点火プラグを外した時にエンジン内部に異物が落ちないようにプラグの周囲をきれいに清掃する。
2. 点火プラグから点火コードを外す。
3. シリンダヘッドから点火プラグを外す。
4. 電極 (側面と中央) と碍子の状態を点検する(図 46)。

   注 破損したり磨耗したりした点火プラグを使用しないでください。所定タイプの新しいプラグに交換してください。

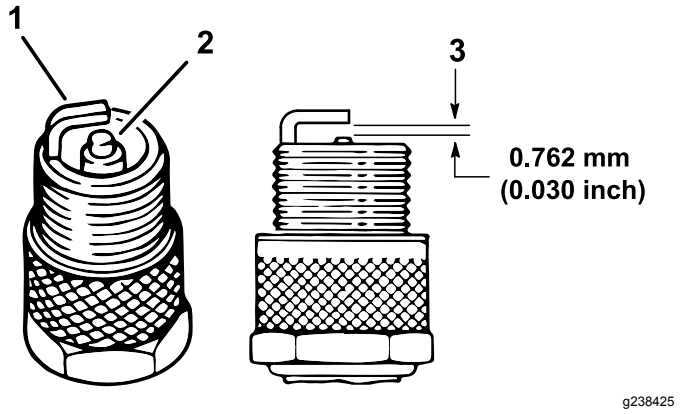


図 46

1. 外側の電極
2. 中央の電極の碍子
3. 隙間実寸ではない

5. 図 46のように、電極間のエアギャップを 0.762 mm に調整する。
6. シリンダヘッドに点火プラグを取り付け、20N·m 2kg.m=14.7ft-lbにトルク締めする。
7. 点火プラグに点火ケーブルを取り付ける。
8. 反対側のコントロールレバーについても、上記手順1-7を行う。

燃料系統の整備

カーボンキャニスタエアフィルタの点検

整備間隔: 使用開始後最初の 50 時間—フィルタの開口部を点検する。

200運転時間ごと—カーボンキャニスタフィルタを交換する。

1. カーボンキャニスタ下部にあるエアフィルタを探し出す図 47。

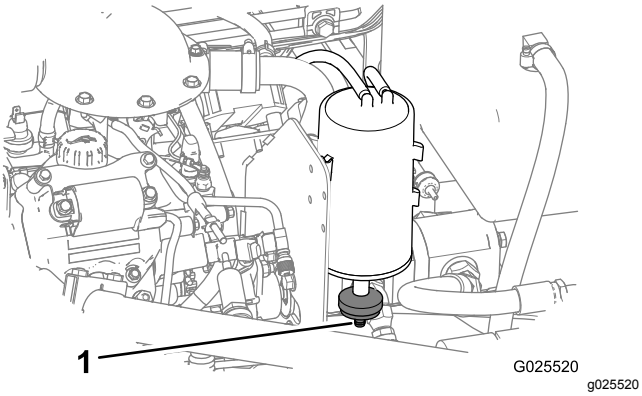


図 47

1. フィルタの開口部

2. フィルタ底部の開口部に汚れや詰まりがないことを確認する。
3. オイルフィルタを交換する必要に応じ。

燃料フィルタの交換

整備間隔: 400運転時間ごと

1. 荷台を上げ、サポートを取り付けて、荷台を固定する。
2. 燃料ポンプからワイヤハーネスのコネクタを外す図 48。
3. ホースのクランプをゆるめ、燃料ポンプキャップから燃料ラインを外す図 48。

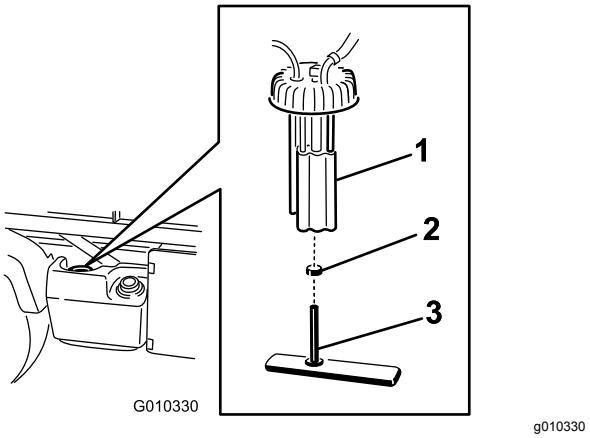


図 48

1. 燃料ポンプ
2. ホースクランプ
3. 燃料ライン/燃料フィルタ

4. 燃料タンクの上部から燃料ポンプのキャップを外す図 48。

   重要 **燃料ポンプを外す時に、燃料ポンプアセンブリをタンク内部で回転させないでください。タンク内部でポンプを回転させるとフロートアセンブリが破損する恐れがあります。**

5. タンクから、燃料ポンプアセンブリと燃料フィルタを外す図 48。
6. 燃料フィルタのホースを燃料ポンプのフィッティングに固定しているクランプを外す。
7. フィッティングからホースを取り外す図 48。
8. 新しい燃料フィルタホースに、新しいホースクランプを取り付ける。
9. ホースを燃料ポンプに接続し、クランプで固定する。
10. アセンブリを燃料タンクに挿入し、キャップをトルク締めする 20-22N·m2.0-2.3kg.m = 175-200in-lb。
11. 電気コードを接続し、ホースをクランプで固定する。

燃料ラインとその接続の点検

整備間隔: 400運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方

燃料ライン、フィッティング、クランプなどに、漏れ、劣化、破損、ゆるみなどが出ていないか点検を行ってください。

注 燃料系統の部品にこうした症状が見られた場合には、それらの部品を交換してください。

電気系統の整備

電気系統に関する安全確保

- マシンの整備や修理を行う前に、バッテリーの接続を外してください。バッテリーの接続を外すときにはマイナスケーブルを先に外し、次にプラスケーブルを外してください。接続するときにはプラスを先に接続し、次にマイナスを接続してください。
- バッテリーの充電は、火花や火気のない換気の良い場所で行ってください。バッテリーと充電器の接続や切り離しを行うときは、充電器をコンセントから抜いておいてください。また、安全な服装を心がけ、工具は確実に絶縁されたものを使ってください。

ヒューズの整備

ヒューズはダッシュパネルの中央下にあります図 49と図 50。

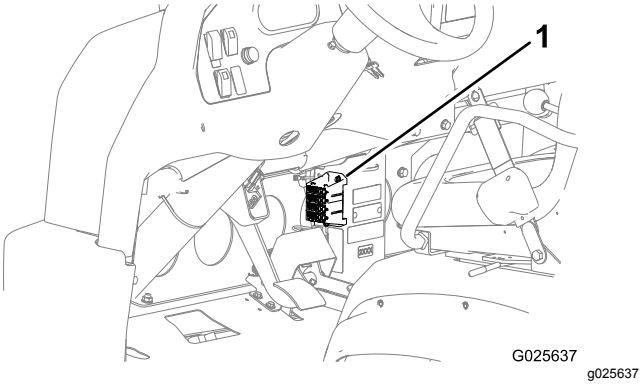


図 49

1. ヒューズ

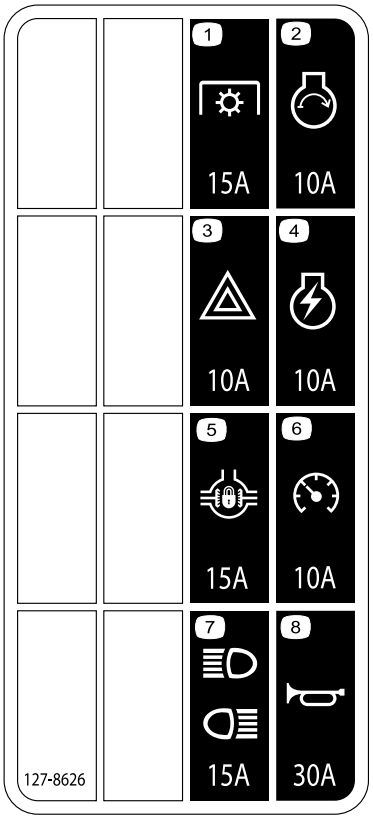


図 50

1. PTO 15A
2. エンジン始動10 A
3. ハザードランプ10 A
4. エンジン点火10A
5. デファレンシャルロック15A
6. 速度計10A
7. ヘッドライトと後部ライト15A
8. ホーン30A

救援バッテリーによるエンジンの始動

⚠ 警告

バッテリー連結によるエンジン始動は危険を伴う作業である。人身事故や電気系統の破損を防止するために、以下の注意を守って行うこと

- **救援用のバッテリーの電圧が DC 15 V を超えないことを確認する これ以上の電圧ではワークマン側の電気系統が破損する。**
- **凍結したバッテリーには絶対に接続してはならない。作業中に破裂や爆発を起こす危険がある。**
- **バッテリーの取り扱いに関する通常の注意事項を守って作業を行うこと。**
- **救援車とワークマンを直接接触させないよう十分注意すること。**
- **バッテリーケーブルの極性を間違えて接続すると電気系統の破壊や人身事故などを起こす可能性があるので注意すること。**

1. バッテリーカバーをたわめて、タブをバッテリーベースから外し、カバーをバッテリーから取り外す図 51。

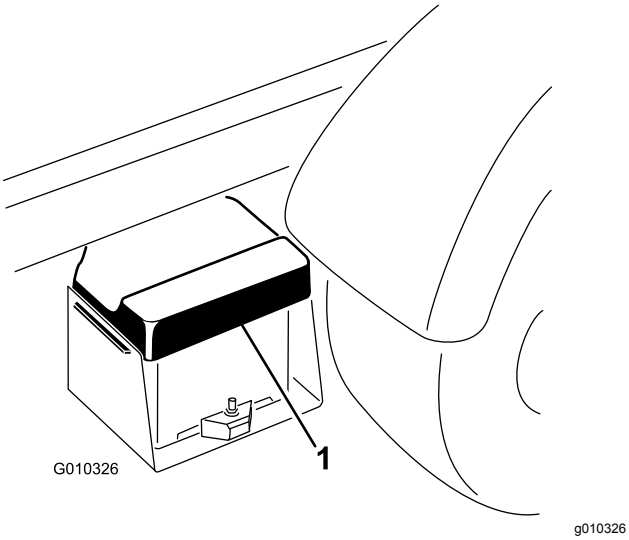


図 51

1. バッテリーカバー

2. 2 台のバッテリーのプラス 端子同士をブースタケーブルでつなぐ図 52。

   注 端子を必ず確認すること バッテリーカバーの「 」の印で確認できることが多い。

3. もう 1 本のケーブルを救援車のバッテリーのマイナス 端子につなぐ。

   注 バッテリーのマイナス 端子の表示を必ず確認すること。

   注 このケーブルの他端は、ワークマンのバッテリーあがっている方のバッテリーに直結するのでなく、エンジンとフレームに救援用ケーブルを接続する。但しエンジンの燃料供給部に接続しないこと。

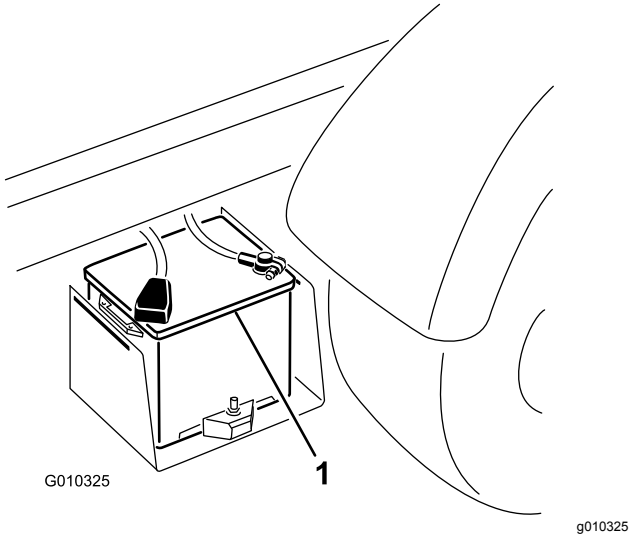


図 52

1. バッテリー

4. 救援側の車両のエンジンを始動する。

   注 エンジンを始動してから数分間待ち、それから救援される側のエンジンを始動する。

5. ケーブルを外す時は、まずマイナスケーブルをエンジンから先に外し、次にバッテリーのマイナス端子から外す。
6. バッテリーベースにバッテリーカバーを取り付ける。

バッテリーの整備

整備間隔: 50運転時間ごと—バッテリー液の量を点検する 格納中は30日ごとに

50運転時間ごと—バッテリーケーブルの接続状態を点検する。

⚠ 危険

電解液には硫酸が含まれており、触れると火傷を起こし、飲んだ場合には死亡する可能性がある。

- **電解液を飲まないこと、また、電解液を皮膚や目や衣服に付けないよう十分注意すること。安全ゴーグルとゴム手袋で目と手を保護すること。**
- **皮膚に付いた場合にすぐに洗浄できるよう、必ず十分な量の真水を用意しておくこと。**

- バッテリーはいつもきれいに、またフル充電状態に保持してください。
- 端子部に腐食が発生した場合には、重曹水水重曹 で清掃します。
- 清掃後は、腐食防止のためにバッテリー端子にワセリンなどを塗布してください。
- バッテリー液の量を所定レベルに維持してください。

- バッテリー上部はアンモニア水または重曹水に浸したブラシで定期的に清掃してください清掃後は表面を水で流して下さい清掃中はセルキャップを外さないでください
- バッテリーのケーブルは接触不良にならぬよう端子にしっかりと固定してください
- 各セルへは、蒸留水またはミネラルを含まない水を適正レベルまで補給してください。水を補給するときは上限各セルの内側の線の下端を超えないように注意してください。
- 高温環境下で保管すると涼しい場所で保管するよりもバッテリーは早く放電します

走行系統の整備

タイヤの点検

整備間隔: 100運転時間ごと

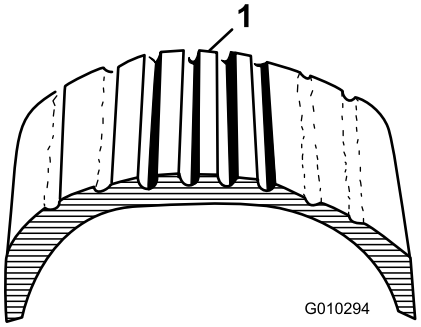
前タイヤの規定空気圧2.20 bar2.24 kg/cm2 = 32 psi

後タイヤの規定空気圧1.24 bar2.24 kg/cm2 = 18 psi

運転中に縁石にぶつけるなどした場合、リムが破損したり、トーインが狂ったりする可能性がありますから、このような事故の後では必ず点検してください。

重要 **タイヤ空気圧はひんぱんに点検して適正に保ってください。空気圧が適正でないと、タイヤの摩耗が通常より早くなって四輪駆動できなくなる場合があります。**

図 53は空気圧不足で生じる磨耗の例です。

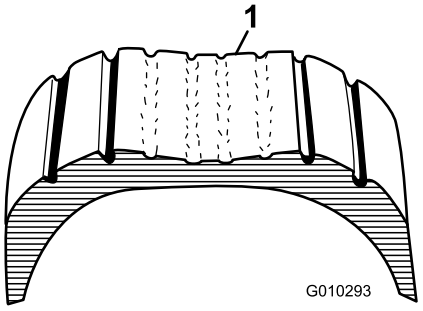


g010294

図 53

1. 空気圧不足のタイヤ

図 54は空気圧過多で生じる磨耗の例です。



g010293

図 54

1. 空気圧が高すぎるタイヤ

ホイールナットのトルクを点検する

整備間隔: 使用開始後最初の 2 時間

使用開始後最初の 10 時間

200運転時間ごと

⚠ 警告

この整備を怠ると車輪の脱落や破損から人身事故につながる恐れがある。

運転開始から1-4時間後に1回と10時間後にもう1回、前輪と後輪のホイールナットのトルク締めを行うこと トルク値は 109-122 N·m12-14 kg·m = 80-90 ft-lb。その後は 200 運転時間ごとにトルク締めを行う。

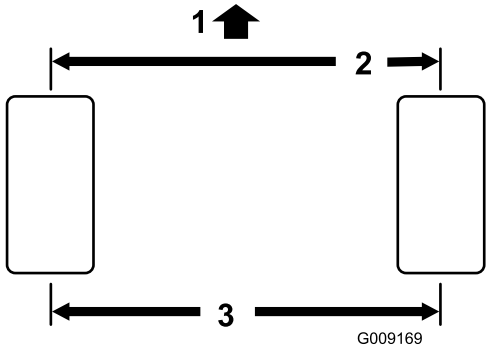
前輪の整列の点検

整備間隔: 400運転時間ごと/1年ごと いずれか早く到達した方

1. タイヤをまっすぐ前に向ける。
2. 後輪の前と後ろで、左右のタイヤの中央線間距離を測るアクスルの高さ位置で計測図 55。

   注 前後での計測値の差が 0±3 mm の範囲内であれば適切である。タイヤを90°回し、同じように計測して確認する。

   重要 **計測はタイヤの同じ位置で行ってください。車両は平らな場所に停めること、またタイヤはまっすぐ前に向けること。**

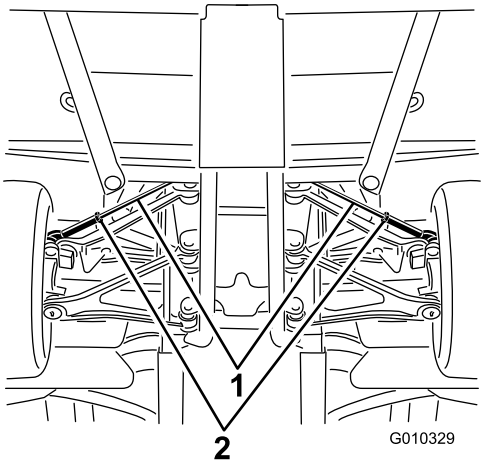


g009169

図 55

1. 機体正面
2. タイヤの前後での差が 0±3 mm
3. 中心線から中心線までの距離

3. 中心線から中心線までの距離は以下の手順で調整します
   A. タイロッドの中心についているジャムナットをゆるめる図 56。



g010329

図 56

1. タイロッド
2. ジャムナット

   B. タイロッドを回して前タイヤを内向き方向または外向き方向に動かし、タイヤの中央線間距離が所定の値になるようにする。
   C. 正しく調整できたら、タイロッドのジャムナットを締める。
   D. タイヤが左右に同じだけ切れることを確認する。

   注 タイヤの切れ角度が左右で等しくない場合には、*サービスマニュアル*を参照して調整する。

トランスミッションの保守

トランスミッションオイルの量の点検

整備間隔: 使用開始後最初の 50 時間

400運転時間ごと

トランスミッションオイルのタイプ Dexron VI

1. トランスミッションの後部、車幅方向内側の低い位置にある補給用プラグを探し出す図 57。

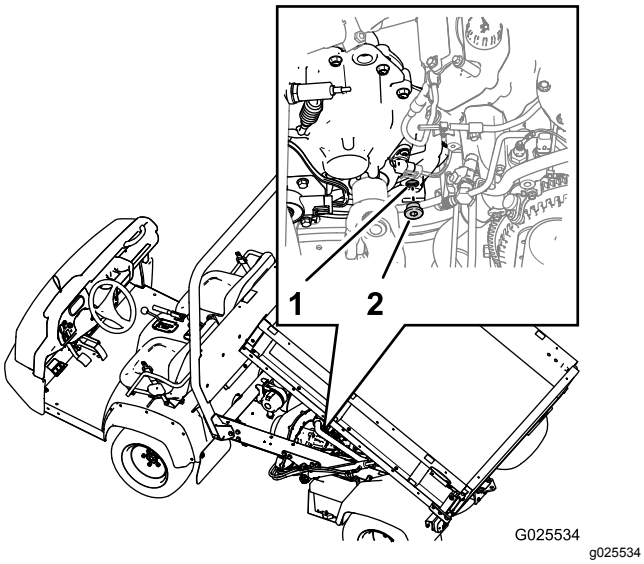


図 57

1. 補給ポートトランスミッション　2. 補給プラグ

2. 補給プラグの下にオイルを受ける容器をおく。
3. プラグを左に回して、トランスミッションの補給ポートから外す図 57。

   注 補給ポートのねじ山の一番低い位置までオイルがあれば、オイル量は適切である。
4. オイル量が不足している場合には、所定のオイルを補給ポートから補給する。油面がねじ山の下と同じ高さになるまで補給する図 57。

   注 トランスミッションにオイルを入れる時にはジョウゴとホースを使うと便利です。
5. 補給プラグのOリングの状態を点検する。

   注 磨耗や破損が見られた場合は新しいものに交換する。
6. トランスミッションに補給プラグを元通りに取り付け、手締めする図 57。

トランスミッションオイルの交換

トランスミッションオイルのタイプ Dexron VI

トランスミッションオイルの容量700 ml

1. 平らな場所に駐車する。
2. トランスミッションの後部、車幅方向内側の低い位置にある補給用プラグ、および、トランスミッションの前部、車幅方向外側にあるドレンプラグを探し出す図 58と図 59。

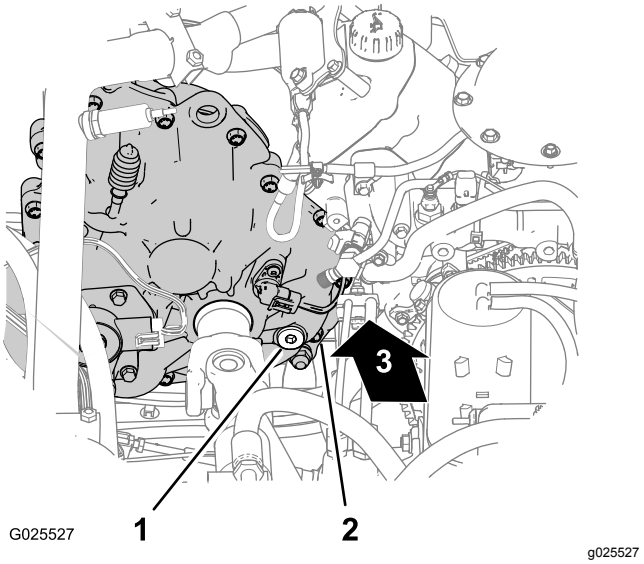


図 58

1. 補給プラグ
2. トランスミッションケース後部、車幅方向内側
3. 前

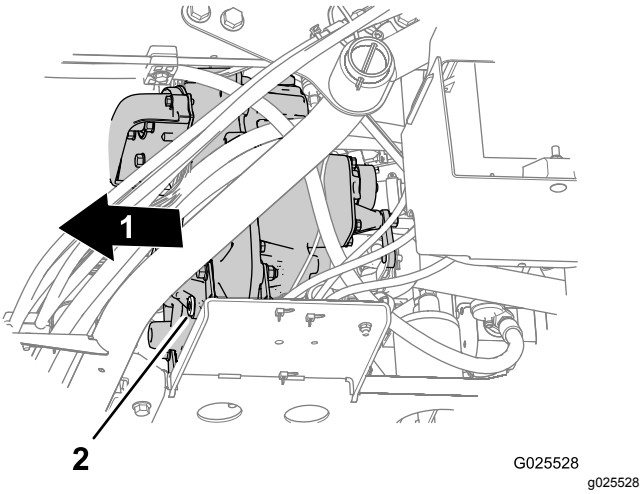


図 59

1. 前　2. ドレンプラグ

3. 補給ポートから補給プラグを外すプラグを左に回す図 58。
4. ドレンプラグの下にオイルを受ける容器をおく図 59。
5. ドレンポートからドレンプラグを外すプラグを左に回す図 59。

   注 トランスミッションオイルが完全に抜けるのを待つ。
6. ドレンプラグを取り付ける(図 59)。
7. 補給ポートから、トランスミッションオイルDexron VI 700 ml を入れる図 58。

   注 トランスミッションにオイルを入れる時にはジョウゴとホースを使うと便利です。

注 補給ポートのねじ山の一番低い位置までオイルがあれば、オイル量は適切である。

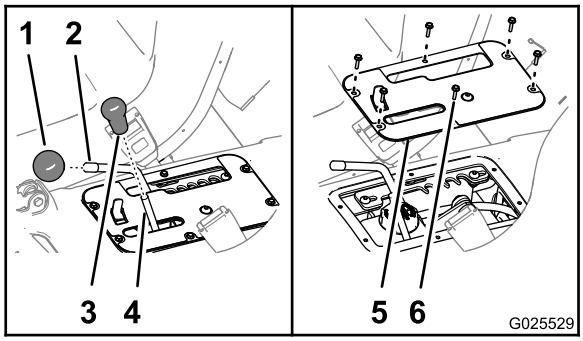
8. 補給プラグを取り付ける図 58。

速度コントロールシリンダのオイル溜めの保守

整備間隔: 200運転時間ごと

オイル溜め用のオイルのタイプ DOT 3ブレーキ作動液

1. 油圧昇降レバーと速度レンジ切り替えレバーからノブを取り外す図 60。



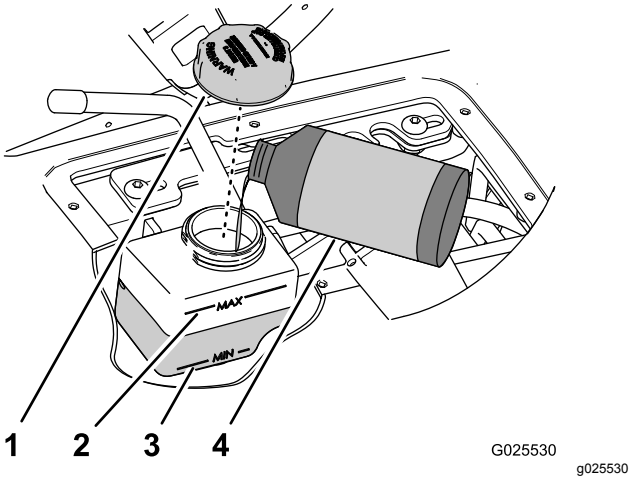
g025529

図 60

1. ノブ速度レンジレバー
2. ロッド速度レンジレバー
3. ノブ油圧昇降レバー
4. ロッド油圧昇降レバー
5. コントロールカバーのプレート
6. 六角ワッシャボルト#10 x ¾"

2. コントロールカバープレートを座席ベースに固定している六角ワッシャねじ6本#10 x ¾"を外して、カバープレートを取り外す図 60。
3. 速度レンジレバーを移動走行位置にセットする 速度レンジコントロールの使い方 (ページ 26)を参照。
4. 速度コントロールシリンダのオイル溜めの油量を点検する図 61。

   注 オイル溜めの側面についている Min マークと Max マークの間に油面があれば適正です。



g025530

図 61

1. キャップ
2. Max マークオイル溜め
3. Min マークオイル溜め
4. DOT 3 ブレーキオイル

5. 量が不足している場合には、以下の作業を行う
   A. タンクのキャップの周囲をきれいに拭く図 61。
   B. タンクからキャップを取る図 61。
   C. オイル溜めの側面についている Min マークと Max マークの間に油面がくるように、所定のオイルを補給する図 61。
   D. キャップを取り付けて手締めする図 61。
6. コントロールカバープレートの穴を、座席ベースの穴に合わせる図 60。
7. プレートをベースに固定する六角ワッシャねじ6本図 60ステップ 2で外したものを使用する。
8. 油圧昇降レバーと速度レンジ切り替えレバーに、ノブを元通りに取り付ける図 60。

速度コントロールの調整

重要 **この車両の最低制御速度エンジン全開時は 4.0km/hです。最低速度を 4.0 km/h未満に設定すると、ベルトやクラッチの摩耗が早くなります。**

1. 速度レンジ A 低速、B 低中速、C 中高速、または D 高速のうち、最高速度を調整したいレンジに合わせて車両を運転してみる 速度レンジコントロールの使い方 (ページ 26)を参照。

   注 最高速度で走らせたときに速度計に表示される速度を読み取る。

2. 油圧昇降レバーと速度レンジ切り替えレバーからノブを取り外す図 60。
3. コントロールカバープレートを座席ベースに固定している六角ワッシャねじ6本#10 x ¾"を外して、カバープレートを取り外す図 60。
4. 速度レンジレバーを **T** 移動走行レンジにセットする図 62。

5. ディテントプレートをレバーサポートブラケットに固定している六角ソケットねじ5/16 x ¾"2本をゆるめる図 62。

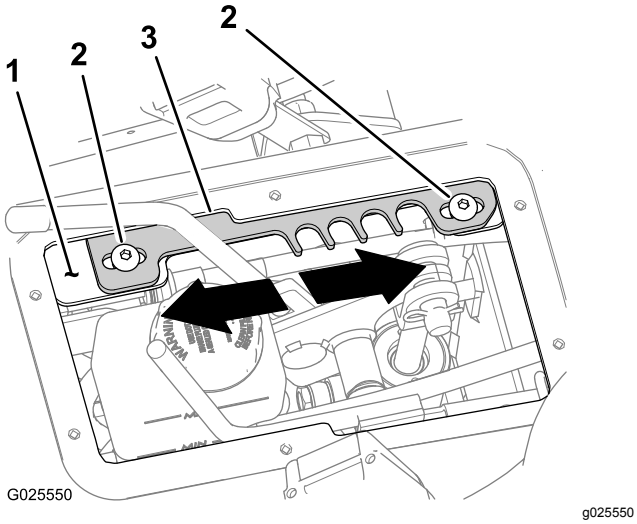


図 62

1. レバーサポートブラケット
2. 六角ソケットねじ
3. ディテントプレート

6. ディテントプレートを、以下のうちのどちらかの方向に移動させる
   - 最高速度を大きくするには、ディテントプレートを **前方に** 移動させる図 62。
   - 最高速度を小さくするには、ディテントプレートを **後方に** 移動させる図 62。
7. 六角ソケットねじ5/16 x ¾"2本を、19.8-25.4 N·m 2.0-2.6 kg·m = 14.6-18.7 ft-lbにトルク締めする。
8. 調整を行っている速度レンジで車両を運転してみる。そのレンジでの最高速度が速すぎる場合や遅すぎる場合には、ステップ1 - 8をもう一度行う。適正な調整ができるまでこれを繰り返す。
9. コントロールカバープレートの穴を、座席ベースの穴に合わせる図 60。
10. プレートをベースに固定する六角ワッシャねじ6本図 60ステップ 3で外したものを使用する。
11. 油圧昇降レバーと速度レンジ切り替えレバーに、ノブを元通りに取り付ける図 60。

走行ベルトの点検

整備間隔: 400運転時間ごと

1. トランスミッションカバーをトランスミッション取り付けプレートに固定している六角ワッシャねじ9本¼ x 1"を外す図 63。

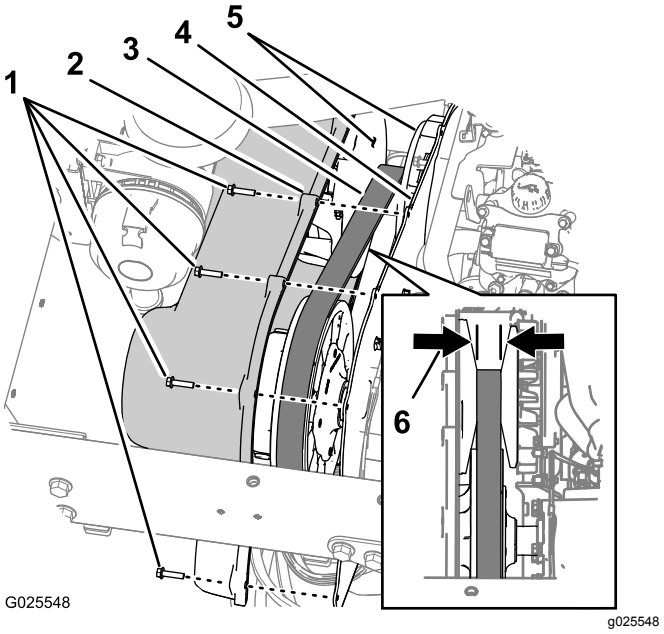


図 63

1. 六角ワッシャボルト¼ x 1"
2. トランスミッションカバー
3. 走行ベルト
4. 取り付けプレート
5. テーパ面一次クラッチ
6. ベルトの幅 29.5 mm 以下になったら交換する

2. 駆動ベルトが見える位置までカバーを前方にずらす図 63。
3. 一次クラッチのテーパ面に破損の兆候がないか点検する図 63。

   注 一次クラッチのテーパ面が破損している場合には、一次クラッチを交換してください 弊社代理店にご連絡ください。
4. 駆動ベルトのコグ歯が欠けていたり破損したりしていないか点検する図 63。

   注 歯が欠けたり破損したりしている駆動ベルトは交換してください。
5. ベルトの幅を測定し、その値を記録する図 63。

   注 ベルトの幅が 29.5 mm 以下になっている場合にはベルトを交換してください図 63。
6. トランスミッションカバーの穴を、取り付けプレートの穴に合わせる図 63。
7. カバーを取り付けプレートに固定する図 63ステップ 1で取り外した六角ワッシャねじ9本¼ x 1"を使用し、10.2-12.4 N·m1.0-1.3 kg·m = 90-110 in-lbにトルク締めする。

クラッチの洗浄

整備間隔: 400運転時間ごと

1. トランスミッションカバーをトランスミッション取り付けプレートに固定している六角ワッシャねじ9本¼ x 1"を外す図 64。

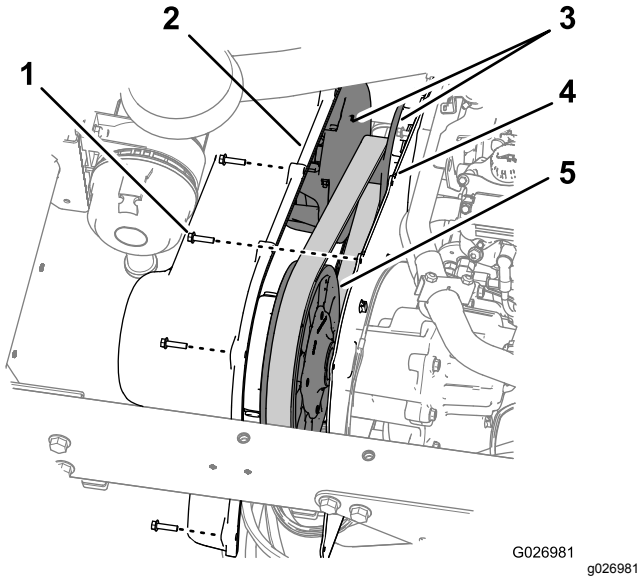


図 64

1. 六角ワッシャボルト¼ x 1"
2. トランスミッションカバー
3. 1次クラッチ
4. 取り付けプレート
5. 2次クラッチ

2. 1次クラッチと2次クラッチにたまっているごみや泥を水で洗い落とし、洗浄後はすぐにコンプレッサで吹いて乾かす。
3. 残っているごみは、速乾性のクリーナかブレーキクリーナで完全に取り除く。

   注 注可動部分およびその付近のごみを除去してください。
4. もし、ベルトやクラッチシャフトにもごみや泥がたまっている場合には、目の細かい研磨用パッドなどで取り除く。
5. トランスミッションカバーの穴を、取り付けプレートの穴に合わせる図 64。
6. カバーを取り付けプレートに固定する図 64ステップ 1で取り外した六角ワッシャねじ9本¼ x 1"を使用し、10.2-12.4 N·m1.0-1.3 kg·m = 90-110 in-lbにトルク締めする。

デファレンシャルとアクスルの保守

デファレンシャルオイルの交換

オイルのタイプ 80W90 API GL-5

オイルの量 550 ml

1. ドレンプラグの下にオイルを受ける容器をおく図 65。

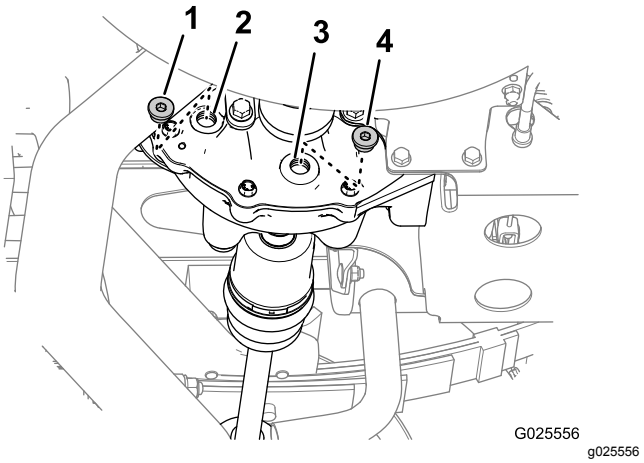


図 65

1. 補給プラグ
2. 給油ポート
3. ドレンポート
4. ドレンプラグ

2. デファレンシャツの補給ポートから補給プラグを、ドレンポートからドレンプラグを、外す図 65。

   注 デファレンシャルオイルが完全に抜けるまで待ってください。
3. 各プラグのOリングの状態を点検する。

   注 磨耗したり破損したりしているOリングは交換してください。
4. ドレンポートにドレンプラグを元通りに取り付け図 65、プラグを 14-19 N·m13.6-19.0 kg·m = 10-14 ft-lbにトルク締めする。

   注 ドレンプラグはマグネットになっています。したがって、プラグに少量の鉄粉が付着しているのは異常ではありません。おろしたての新車の場合にはかなり多量の鉄粉が付着するのが普通です。
5. ディファレンシャルの補給ポートから所定のオイルを 550 ml 入れる図 65。

   注 デファレンシャルにオイルを入れる時にはジョウゴとホースを使うと便利です。
6. 補給ポートに補給プラグを元通りに取り付け図 65、プラグを 14-19 N·m13.6-19.0 kg·m = 10-14 ft-lbにトルク締めする。

風速安定ボックスの点検

整備間隔: 100運転時間ごと

1. 機体の後部を持ち上げてジャッキスタンドで支える 車体をジャッキで持ち上げる場合 (ページ 36)を参照。
2. 後アクスル部分にある風速安定ボックスが破損していないか、潤滑剤が漏れていないか点検する図 66。

   注 風速安定ボックスが破損している場合には、必ず交換してください。

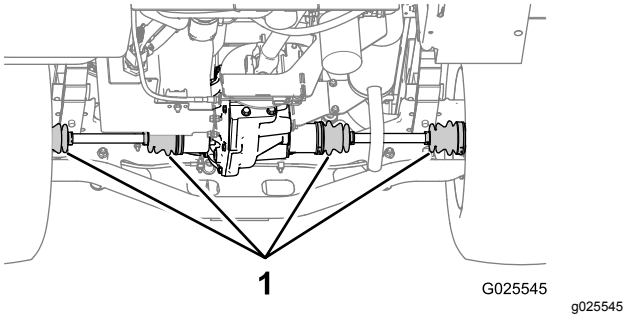


図 66

3. ジャッキをゆるめて機体を床に下ろす。

冷却系統の整備

冷却系統に関する安全確保

- 冷却液を飲み込むと中毒を起こす冷却液は子供やペットが触れない場所に保管すること。
- 高温高圧の冷却液を浴びたり、高温のラジエター部分に触れたりすると大火傷をする恐れがある。
  - エンジン停止後、少なくとも15分間程度待って、エンジンが冷えてからキャップを開けること。
  - キャップを開けるときはウェスなどを使い、高温の水蒸気を逃がしながらゆっくりと開けること。
- マシンは、必ず安全カバー類を取り付けた状態で運転すること。
- 手、指、衣服などを、ファンやベルトに近づけないように注意すること。
- 保守作業を行う前にエンジンを停止し、キーを抜き取っておくこと。

冷却液の量を点検する。

整備間隔: 使用するごとまたは毎日—冷却液の量を点検する。 冷却液補助タンクで、液量を点検する。ラジエターのキャップを開けないこと。初めての運転の前に必ず冷却液の量を確認し、その後は毎日点検してください。

冷却液のタイプ水とエチレングリコール不凍液の 50/50 混合液

⚠ 注意

エンジン停止直後にラジエターのキャップを開けると、高温高圧の冷却液が吹き出してやけどを負う恐れがある。

- **ラジエターキャップは開けないこと。**
- **エンジン停止後、15分間ほど待って、ラジエターキャップが十分に冷えてから取り外すようにすること。**
- **冷却液補給タンクのキャップを開けるときはウェスなどを使い、高温の水蒸気を逃がしながらゆっくりと開けること。**
- **ラジエターの液量は、ラジエター本体でなく必ず冷却液タンクで点検すること。**

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛ける。
3. エンジンを止め、キーを抜き取る。
4. 冷却液タンクで、液量を点検する図 67。

   注 補給口の首の根元まであれば適正である

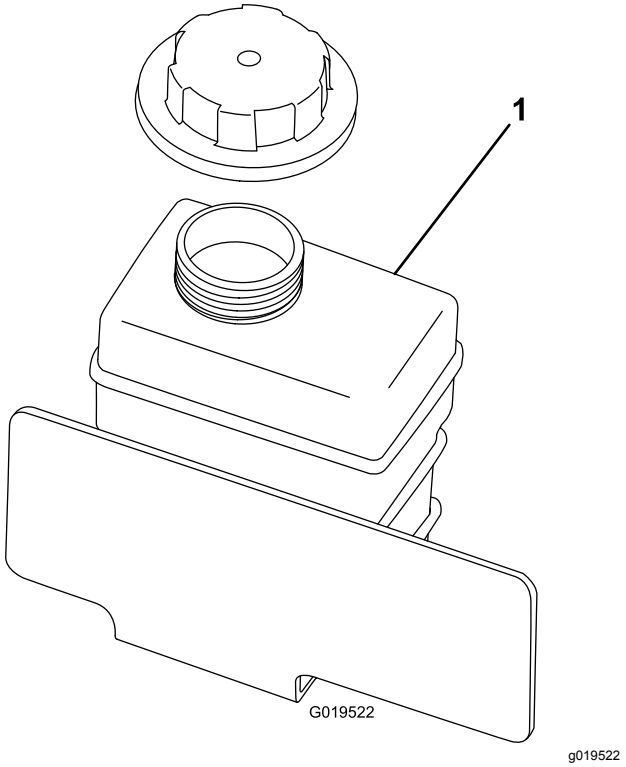


図 67

1. 冷却液タンク

5. 液量が不足している場合には、補助タンクのふたをとり、水とエチレングリコール不凍液の50/50 混合液を補給する。

   注 入れすぎないこと。

6. 補助タンクのキャップを取り付けて終了。

冷却部の清掃

整備間隔: 使用するごとまたは毎日—エンジン部とラジエターを清掃する。 ほこりの多い環境で使用している場合はより頻繁な清掃が必要。

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛ける。
3. エンジンを止め、キーを抜き取る。
4. エンジンの周囲を丁寧に清掃する。
5. ラジエタースクリーンのラッチを外して、ラジエター前面から外す図 68。

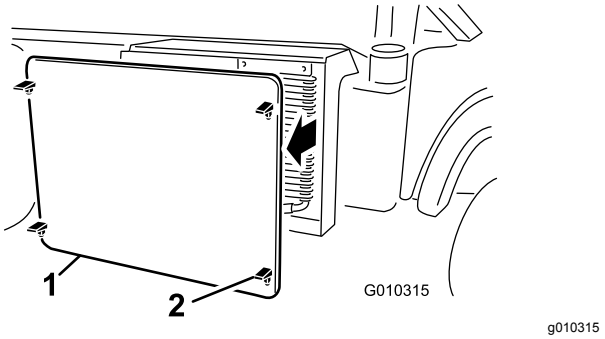


図 68

1. ラジエタースクリーン
2. ラッチ

6. ラッチを外し、オイルクーラを装備している場合にはそれを倒してラジエターから遠ざける図 69。

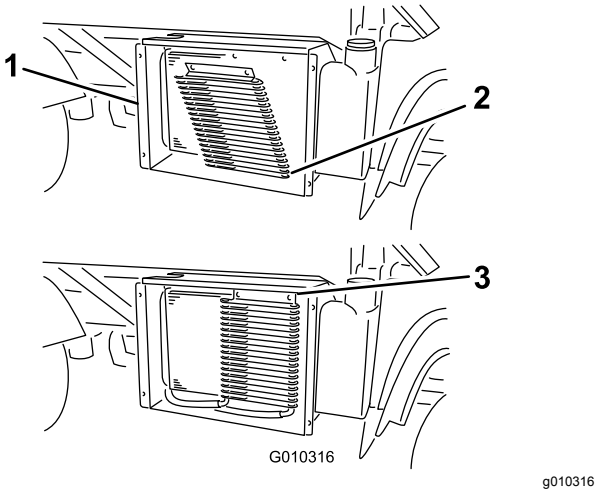


図 69

1. ラジエターハウジング
2. オイルクーラ
3. ラッチ

7. ラジエターとオイルクーラ、スクリーンを圧縮空気で洗浄する。

   注 圧縮空気でごみを吹き飛ばしてください。

8. クーラとスクリーンをラジエターに取り付ける。

エンジンの冷却液の交換

整備間隔: 1000運転時間ごと/2年ごと いずれか早く到達した方

冷却液容量 3.7 リットル

冷却液のタイプ水とエチレングリコール不凍液の 50/50 混合液

1. 平らな場所に駐車する。
2. 荷台を上げ、荷台サポートを取り付けて、荷台を固定する。

⚠ 注意

エンジン停止直後にラジエターのキャップを開けると、高温高圧の冷却液が吹き出してやけどを負う恐れがある。

- **エンジン回転中はラジエターのふたを開けないこと。**
- **エンジン停止後、15分間ほど待って、ラジエターキャップが十分に冷えてから取り外すようにすること。**
- **ラジエターキャップを開けるときはウェスを使用すること。キャップは、高温の水蒸気を逃がしながらゆっくりと開けること。**

3. ラジエターキャップを取る図 70。

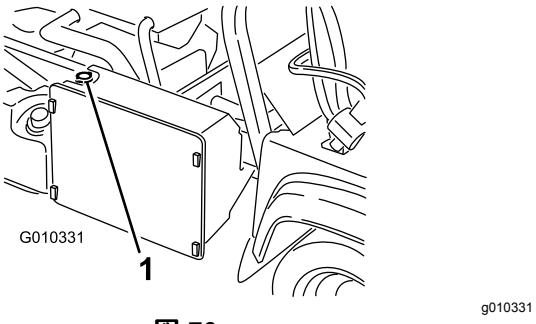


図 70

1. ラジエターのキャップ

4. 冷却液タンクのキャップを取る図 70。

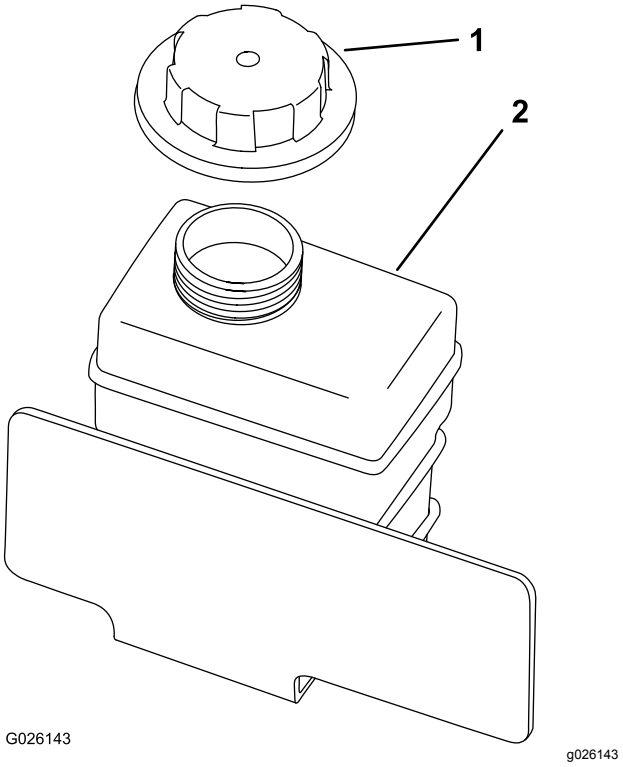


図 71

1. 冷却液タンクのキャップ
2. 補助タンク

5. 下側のラジエターホースを外して、冷却液を容器に回収する。

   注 冷却液が抜けたら下側のラジエターホースを元通りに接続する。

6. 水とエチレングリコール不凍液の50/50 混合液をゆっくりと注入する。
7. ラジエター液を一杯にして、キャップを閉める図 70。
8. 補助タンクにも、補給管の根元までゆっくりと冷却液を補給する図 71。
9. 補助タンクのキャップを取り付けて終了図 71。
10. エンジンを始動しウォームアップする。
11. エンジンを停止させ、冷却液の量を点検し、必要に応じて補給する。

ブレーキの整備

ブレーキオイル量の点検

整備間隔: 使用するごとまたは毎日—ブレーキオイルの量を点検する。 初めての運転の前に必ず量を確認し、その後は毎日点検してください。

1000運転時間ごと/2年ごと いずれか早く到達した方—ブレーキオイルを交換する。

ブレーキオイルのタイプ DOT 3ブレーキ作動液

注 ブレーキオイルタンクに DOT 3 ブレーキオイルを入れて出荷しています。

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛ける。
3. エンジンを止め、キーを抜き取る。
4. フードを外す。
5. ブレーキオイルタンク内の液量を点検する図 72 と 図 73。

   注 タンクの FULL マークまでオイルが入っているのを確認する。

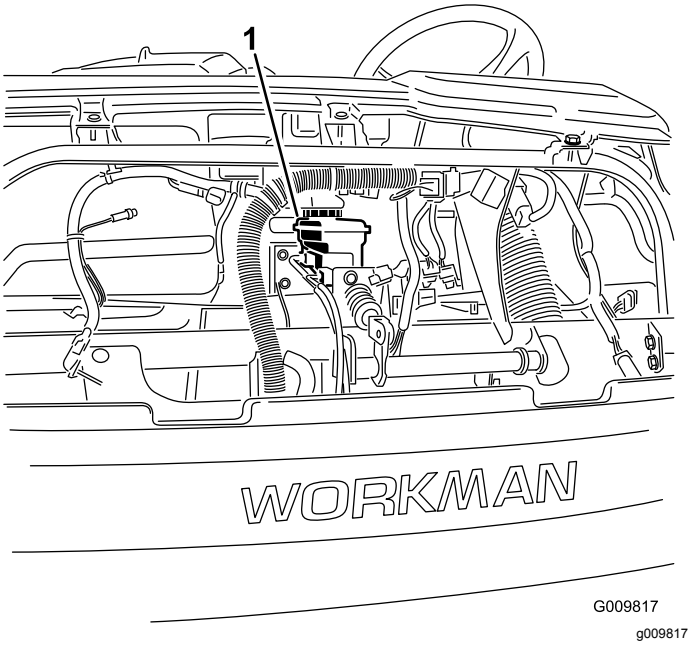


図 72

1. ブレーキオイルのタンク

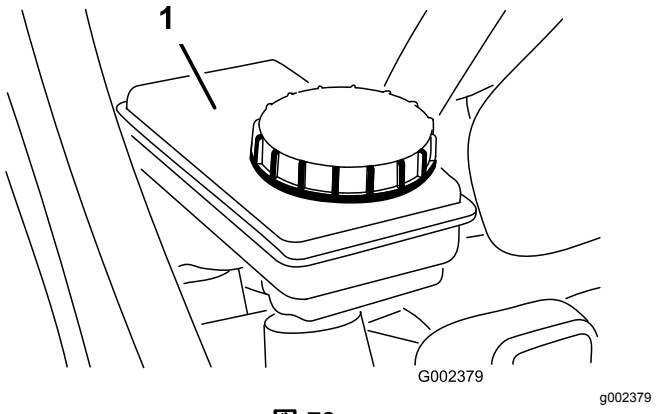


図 73

1. ブレーキオイルのタンク

6. 量が不足している場合には、以下の作業を行う
   A. タンクのキャップの周囲をきれいに拭く図 73。
   B. タンクからキャップを外す図 73。
   C. タンクの FULL マークまで液を追加する図 73。

      重要 **ブレーキ液を入れすぎないように注意してください。**

   D. キャップを取り付ける図 73。
7. フードを取り付ける。

駐車ブレーキの調整

整備間隔: 使用開始後最初の 10 時間

200運転時間ごと

1. 駐車ブレーキレバーのゴム製グリップをはずす図 74。

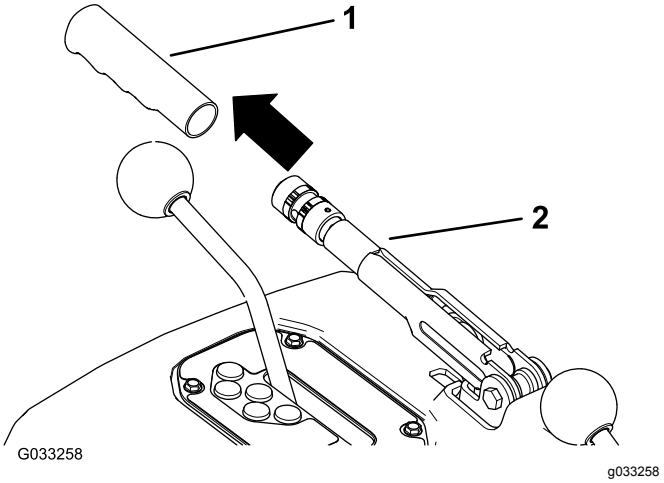


図 74

1. グリップ
2. 駐車ブレーキレバー

2. 調整ノブをブレーキレバーに固定している固定ねじをゆるめる図 75。

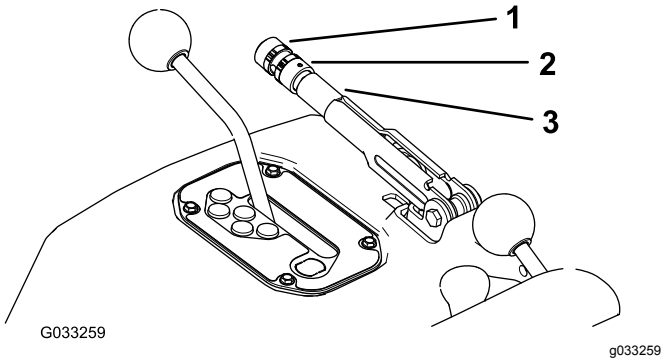


図 75

1. ノブ
2. 固定ねじ
3. 駐車ブレーキレバー

3. ノブ図 75を回し、20-22 kg程度の力でブレーキを作動させられるように調整する。
4. 調整が終わったら固定ねじを締める図 75。

   注 駐車ブレーキレバーでは調整ができなくなった場合には、ハンドルを調整域の中央部までゆるめ、後部でケーブルを調整し、その後にステップ3をもう一度行ってください。
5. 駐車ブレーキレバーにゴム製グリップを取り付ける図 74。

ブレーキペダルの調整

整備間隔: 200運転時間ごと

1. フードを外す。
2. マスターシリンダのヨークをブレーキペダルのピボットに固定しているコッターピンとクレビスピンを取る図 76。

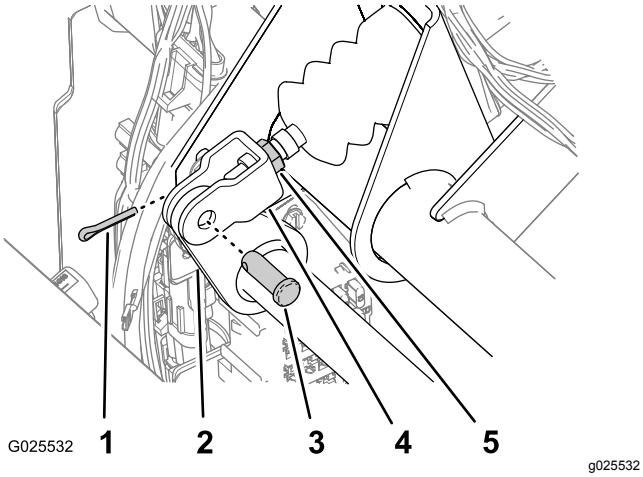


図 76

1. コッターピン
2. ブレーキペダルのピボット
3. クレビスピン
4. マスターシリンダのヨーク
5. ジャムナット

3. ブレーキペダル図 77を持ち上げてフレームに接触させる。

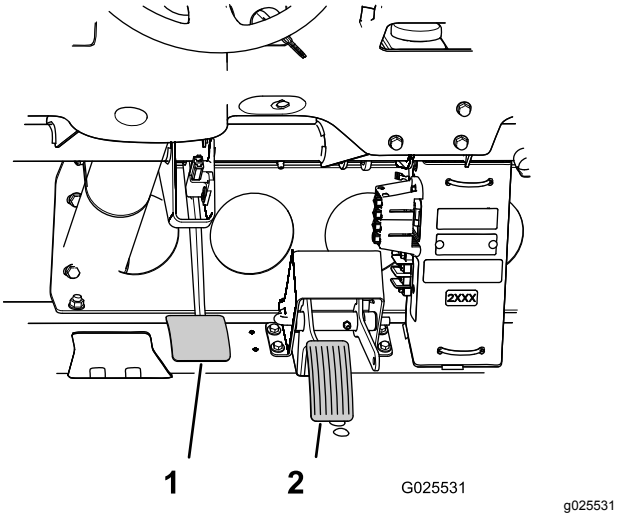


図 77

1. ブレーキペダル
2. アクセルペダル

4. ヨークをマスターシリンダ・シャフトに固定しているジャムナットをゆるめる図 76。
5. ヨークを調節してヨークの穴とブレーキペダルのピボットの穴を揃える図 76。
6. ヨークをペダルのピボットに固定する クレビスピンとコッターピンを使用図 76。
7. ヨークをマスターシリンダのシャフトに固定しているジャムナットを締める図 76。

   注 正しく調整できると、ブレーキのマスターシリンダにブレーキからの力が掛かっていない状態になります。
8. フードを取り付ける。

制御系統の整備

速度表示単位の切替え

スピードメータの表示単位をMPHマイル毎時からKPH km毎時に、またKPHからMPHに、切り替えることができます。

1. 平らな場所に駐車し、エンジンを停止させ、駐車ブレーキを掛けてキーを抜き取る。
2. フードを外す。
3. 速度計近くにある接続されていないワイヤ2本を探す図 78。

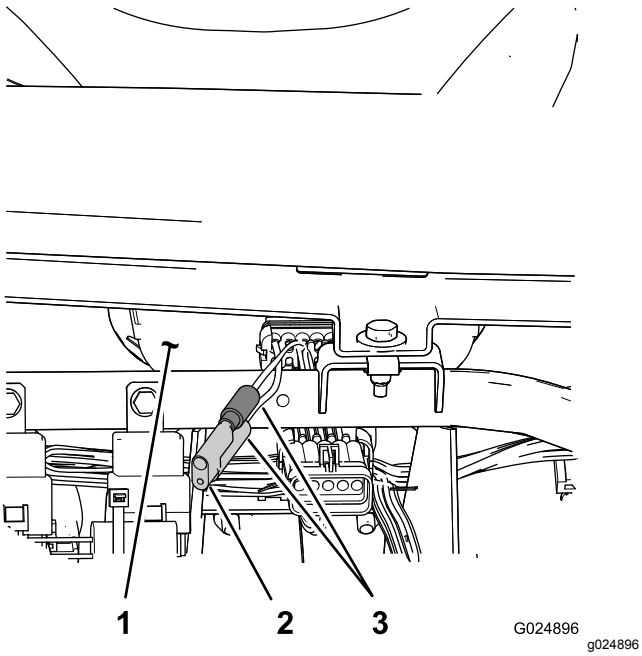


図 78

1. 速度計前向き
2. プラグ
3. 速度計の電気コード

4. コネクタプラグをハーネスワイヤから外して、2本のワイヤをいっしょに接続する図 78。

   注 速度計の表示単位がMPHマイルからKPMキロメートルに切り替わります。表示単位をMPHに戻す場合を考えて、プラグは保管してください。

5. フードを取り付ける。

油圧系統の整備

油圧系統に関する安全確保

- 万一、油圧オイルが体内に入ったら、直ちに専門医の治療を受ける。万一、油圧オイルが体内に入った場合には、数時間以内に手術を受ける必要がある。
- 油圧系統の整備作業を行う時は、必ずエンジンを停止し、ダンプバルブを上昇から下降に切り替えるか、荷台やアタッチメントを下降させてシステム内部の圧力を完全に解放してください。リモート油圧装置のレバーは平らに寝た状態にセットしてください。また、荷台を上げて作業する場合には、かならず荷台安全サポートで荷台を固定してください。
- 油圧装置を作動させる前に、全部のラインコネクタが適切に接続されていること、およびラインやホースの状態が良好であることを確認すること。
- 油圧のピンホールリークやノズルからは作動油が高圧で噴出しているので、絶対に手や足を近づけない。
- リークの点検には新聞紙やボール紙を使う。

油圧オイルについて

油圧作動液の仕様

油圧オイル溜めに高品質の油圧オイルを満たして出荷しています。初めての運転の前に必ず油量を確認し、その後は毎日点検してください 油圧オイルの量を点検する (ページ 58)を参照。

交換用の推奨油圧オイルToro PX Extended Life Hydraulic Fluid19 リットル缶または208 リットル缶。

注 推奨オイルを使用するとオイルやフィルタ交換の回数を減らすことができます。

使用可能な他のオイルToro PX Extended Life Fluidが入手できない場合は、以下に挙げる特性条件および産業規格を満たす石油系の油圧オイルを使用することができます。合成オイルは使用しないでください。オイルの専門業者と相談の上、適切なオイルを選択してください

注 不適切なオイルの使用による損害については弊社は責任を持ちかねますので、品質の確かな製品をお使い下さる様お願いいたします。

高粘度インデックス低流動点アンチウェア油圧作動液, ISO VG 46

物性	
粘度, ASTM D445	cSt @ 40°C 44-48
粘性インデックス ASTM D2270	140 以上

高粘度インデックス低流動点アンチウェア油圧作動液, ISO VG 46 (cont'd.)

流動点, ASTM D97	-37°C–45°C
産業規格	Eaton Vickers 694 (I-286-S, M-2950-S/35VQ25 or M-2952-S)

注 多くの油圧オイルはほとんど無色透明であり、そのためオイル洩れの発見が遅れがちです。油圧オイル用の着色剤20 ml 瓶をお使いいただくと便利です。1瓶で15-22 リットルのオイルに使用できます。パーツ番号はP/N 44-2500 ご注文は Toro 代理店へ。

油圧オイルの量を点検する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日—油圧オイルの量を点検する。 初めての運転の前に必ず油量を確認し、その後は毎日点検。

油圧オイルの容量非TC モデル7.5 リットル

油圧オイルの容量ハイフロー油圧キットオプションを搭載している非TC モデル、およびTC モデル15.1 リットル

1. 平らな場所に駐車する。
2. 駐車ブレーキを掛ける。
3. エンジンを止め、キーを抜き取る。
4. 油圧オイルタンクの注油口周辺とキャップをきれいに拭きく図 79 と図 80 。

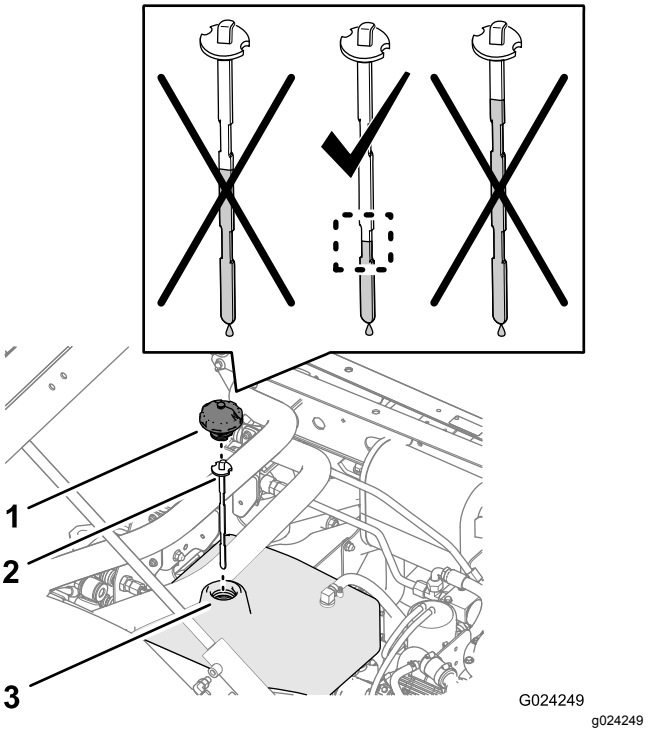


図 79
油圧オイルのレベル非TC モデル

1. キャップ
2. ディップスティック
3. 補給管

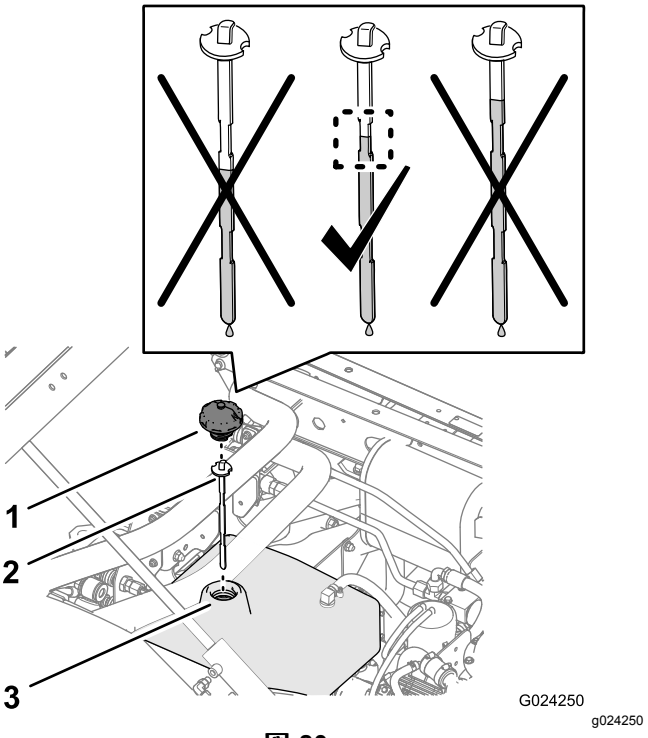


図 80
油圧オイルのレベル ハイフロー油圧キットオプションを搭載している非TC モデル、またはTC モデル

1. キャップ
2. ディップスティック
3. 補給管

5. 補給管からキャップとディップスティックを外し、ディップスティックをウエスできれいに拭く図 79 と 図 80。
6. もう一度首に差し込んで引き抜き、オイルの量を点検する図 79と図 80。
   - **非TC モデル** ディップスティックに表示されている範囲のうち、低い方の範囲内にあればよい。
   - **非TC モデルハイフロー油圧キットを搭載しているものまたはTCモデル** ディップスティックに表示されている範囲のうち、高い方の範囲内にあればよい。
7. オイルレベルが規定よりも低い場合には、所定のオイルを補給する。ディップスティックに示されている規定範囲の中間部分までオイルを入れるようにする図 79 と 図 80。
8. タンクの補給口にディップスティックとキャップを取り付ける図 79と図 80。

油圧フィルタの交換

整備間隔: 1000運転時間ごと—**推奨オイルをご使用の場合**には、油圧オイルフィルタを交換してください。

重要 **純正品以外のフィルタを使用すると関連機器の保証が適用されなくなる場合があります。**

1. 平らな場所に駐車し、エンジンを停止させ、駐車ブレーキを掛けてキーを抜き取る。
2. フィルタ取り付け部の周辺をウェスできれいにぬぐう図 81。

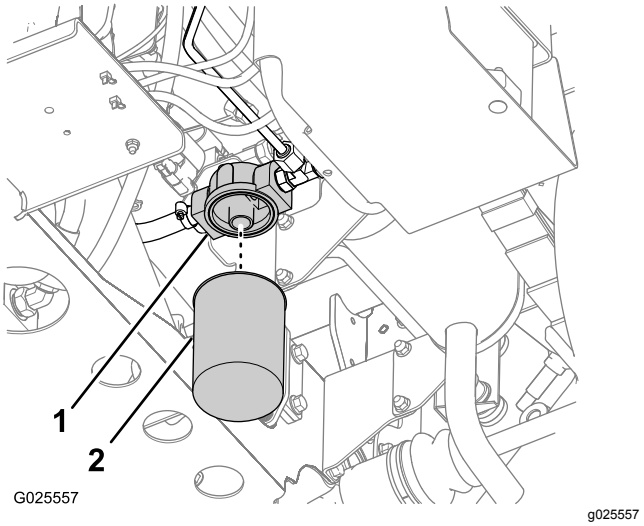


図 81

1. フィルタのアダプタ　　2. 油圧フィルタ

3. フィルタの下にオイルを受ける容器をおく図 81。
4. フィルタを左に回して外す図 81。
5. フィルタのアダプタの取り付け部をきれいに拭く図 81。
6. 新しいフィルタについているガスケットに 油圧オイルを塗りつける。
7. フィルタのアダプタにフィルタをねじ込んで取り付ける。ガスケットがアダプタの取り付け面に当たるまで手で回し図 81、そこからさらに 1/2 回転増し締めする図 81。
8. エンジンを始動して2分間運転し、システム内のエアをパージする。
9. エンジンを停止し、タンクの油量を点検し、フィルタ付近でのオイル漏れがないか調べる。

油圧オイルの交換

整備間隔: 2000運転時間ごと—推奨オイルを使用**している**場合には、油圧オイルを交換してください。

800運転時間ごと—推奨油圧オイルを使用**していない**場合や代替品のオイルを使用したことがある場合には、ハイルフロー油圧オイルとフィルタを交換してください。

油圧オイルの容量非TC モデル7.5 リットル

油圧オイルの容量ハイフロー油圧キットオプションを搭載している非TC モデル、およびTC モデル15.1 リットル

1. 平らな場所に駐車し、エンジンを停止させ、駐車ブレーキを掛けてキーを抜き取る。
2. 荷台を上げる。
3. タンクの補給口についているディップスティックとキャップを外す図 82。

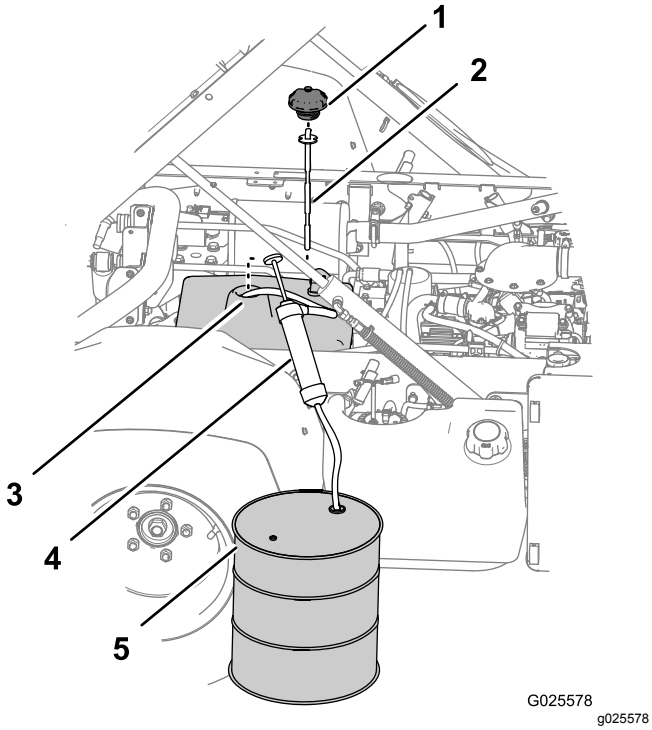


図 82

1. キャップ
2. ディップスティック
3. 補給管(油圧オイルタンク)
4. サイホン
5. 回収容器

4. サイホンに吸い込みホースを接続し、ホースを油圧タンクの補給口からタンク内部に入れ、タンクの底まで送りこむ図 82。
5. 吸い込みホースの端を回収容器に入れる図 82、回収容器は、12 リットルのオイルを回収できる大きさが必要である非TC モデル。ハイフロー油圧キットオプションを搭載している非TC モデルやTC モデルの場合には、 20 リットルのオイルを回収できるだけの大きさが必要である。
6. タンクからサイホンでオイルを抜き取る。
7. 抜き取りを終了したら、タンクからサイホンを取り外す図 82。
8. 油圧オイルタンクに油圧オイルを入れる。油量は非 TC モデルの場合には 7.5 リットル、ただしオプションのハイフロー油圧キットを取り付けている非TC モデルの場合や TC モデルの場合は 15.1 リットルである図 82。

   重要 **指定された銘柄のオイル以外は使用しないでください。他のオイルを使用するとシステムを損傷する可能性があります。**
9. 油圧オイルタンクの補給口にディップスティックとキャップを取り付ける図 82。
10. エンジンを始動させて運転を行い、システム全体にオイルを行き渡らせる。
11. オイルの量を点検し、必要に応じて補給する。

緊急時の荷台の上げ方

エンジンで荷台を上げられなくなった時には、スタータを使うか、もう一台のワークマンの油圧装置を使うかして上げることができます。

スタータを使った荷台の上げ方

昇降レバーを上昇位置にした状態でスタータモータを回せば荷台を上げることができます。但し、スタータは10 秒間以上連続で回さないでください 10 秒使用したら 60 秒休んでください。クランキングできない時は、積み荷を降ろして荷台アタッチメントを外し、エンジンまたはトランスアクスルの整備を行う必要があります。

別のワークマンの油圧装置を使った荷台の上げ方

⚠ 注意

荷台に資材を積んだままで荷台を上昇させ、確実に支持しないと荷台が急に降下する可能性がある。適切に支持されていない荷台の下での作業は危険である。

- **車両の整備や調整を行う時には、まず平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、エンジンを停止させてキーを抜き取ること。**
- **荷台の下で作業するときは荷台もアタッチメントも空にし、昇降シリンダが完全に延びた状態にして荷台を安全サポートで支える。**

この方法には本体側のカップラに合うクイックカップラの付いた油圧ホース片側にオスのカップラ、もう一方にメスのカップラが 2 本必要です。

1. もう一台のワークマンを、故障しているワークマンに背中合わせに寄せる。

   重要 **ワークマンの油圧システムにはDexron III ATF オイルを使用しています。油圧装置の汚染を防ぐため、2 台のワークマン救援車と故障車が共に同じオイルを使用していることを必ず確認してください。**
2. それぞれの車両で、クイックカップラホース2 本を、カップラブラケットのホースから外す図 83。

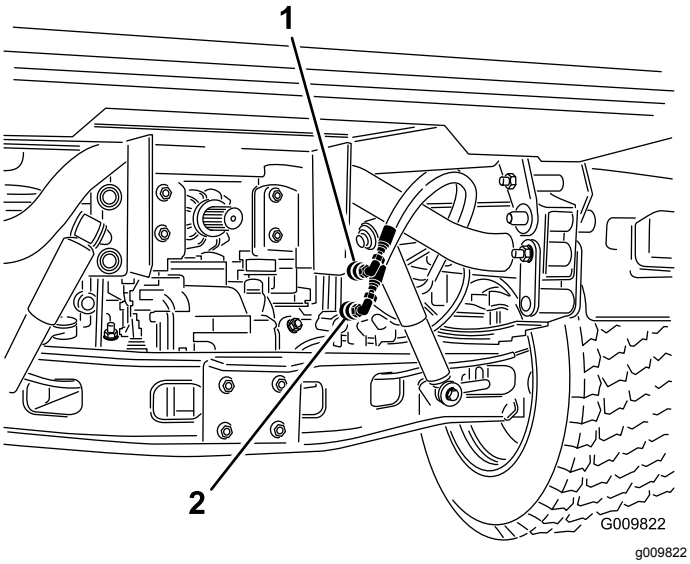


図 83

1. クイックカップラホース A
2. クイックカップラホース B

3. 故障しているワークマンのカップラホースに、救援用ホース 2 本を接続する図 84。
4. 使用しないフィッティングにはキャップをかぶせておく。

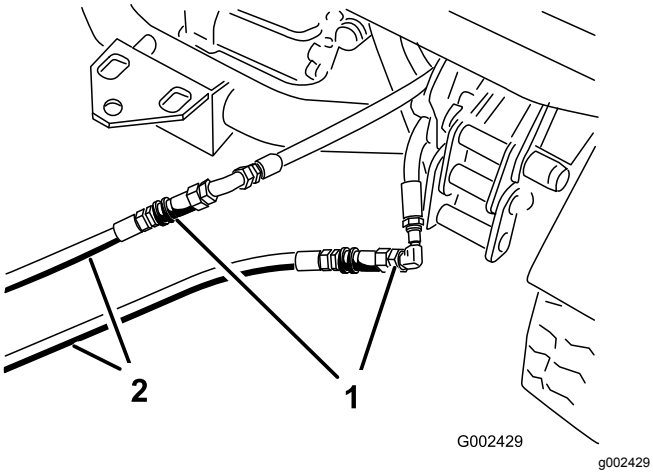


図 84

1. 外したホース
2. 救援用ホース

5. 救援側のワークマンのカップラブラケットにまだついているカップラに、救援用ホースを接続する上のホースは上のカップラに、下のホースは下のカップラに接続する図 85。
6. 使用しないフィッティングにはキャップをかぶせておく。

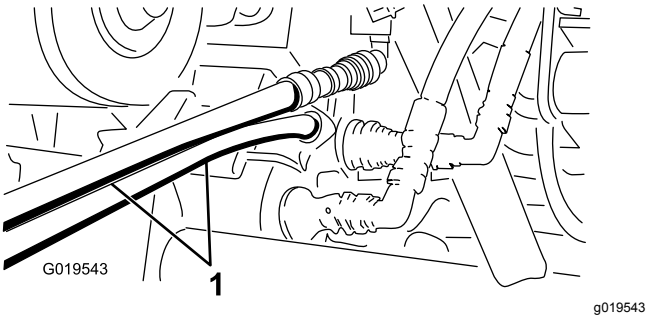


図 85

1. 救援用ホース

7. 周囲から人を遠ざける。
8. 救援車のエンジンを始動し、油圧昇降レバーを「上昇」位置にすると、故障側の荷台が持ち上がる。
9. 油圧レバーをニュートラル位置にしてレバーをロックする。
10. 伸ばした昇降シリンダに、荷台サポートを取り付ける 安全サポートの使い方 (ページ 34)を参照。

    注 両方の車両のアタッチメントとエンジンを停止させた状態で、油圧昇降レバーを数回前後に動かし、内部の圧力を解放するとクイックカップラが外しやすくなります。

11. 作業が終わったら救援ホースを外し、各ワークマンの油圧ホースを元通りに接続する。

    重要 **両方の車両とも、運転を再開する前に必ず油圧オイルの量を確認してください。**

洗浄

車体を清掃する

整備間隔: 使用するごとまたは毎日—マシンを洗浄する。

必要に応じて水または水と刺激の少ない洗剤で車体を洗浄する。柔らかい布などを使っても構いません。

重要 **塩分を含んだ水や処理水は機体の洗浄に使用しないでください。**

重要 **高圧洗浄機は使用しないでください。圧力洗浄機を使うと、電装部の損傷、ステッカー類の剥がれ、潤滑部のグリス落ちなどを起こす可能性があります。また、コントロールパネル、エンジン、バッテリー付近に大量の水をかけないようにしてください。**

重要 **エンジンを駆動させたままで洗車を行わないでください。エンジンを駆動させたままで洗車するとエンジン内部を損傷する恐れがあります。**

保管

格納保管時の安全

- マシンを停止させ、キー付きの機種ではキーを抜き取り、各部の動作が完全に停止したのを確認してから運転位置を離れる。調整、整備、清掃、格納などは、車両が十分に冷えてから行ってください。
- ガス湯沸かし器のパイロット火やストーブなど裸火や火花を発するものがある近くでは、機械や燃料容器を保管格納しないでください。

マシンの保管

整備間隔: 200運転時間ごと—通常ブレーキと駐車ブレーキを点検する。

400運転時間ごと—ブレーキシューが磨耗していないかブレーキを目視点検する。

1年ごと

1. 平らな場所に駐車し、駐車ブレーキを掛け、エンジンを停止させてキーを抜き取る。
2. エンジンのシリンダヘッドや冷却フィン、ブロアハウジングをふくめた車両全体を洗浄する。

   重要 **機体は中性洗剤と水で洗うことができます。ただし高圧洗浄器は使用しないでください。高圧の水で洗浄すると電気系統やグリス部へ水が浸入する恐れがあります。また、コントロールパネルやヘッドライド、エンジン、バッテリー部に大量の水をかけないようにしてください。**
3. 必要に応じ、ブレーキペダルと駐車ブレーキの点検調整を行う ブレーキペダルの調整 (ページ 56)と 駐車ブレーキの調整 (ページ 55)を参照。
4. エアクリーナの整備を行う エアフィルタの整備 (ページ 39)を参照。
5. 機体のグリスアップを行う ベアリングとブッシュのグリスアップ (ページ 38)を参照。
6. エンジンオイルとフィルタの交換を行う エンジンオイルについて (ページ 40)を参照。
7. タイヤ空気圧を点検する タイヤ空気圧を点検する (ページ 20)を参照。
8. 保管期間が 30 日間以上に及ぶ場合には、燃料系統に以下の整備を行う

   A. 石油系のスタビライザ/コンディショナ燃料品質安定剤を燃料タンクの燃料に添加する。アルコール系のスタビライザエタノール系やメタノール系は使用しないこと。

      重要 **スタビライザ品質安定剤を添加した燃料であっても、スタビライザメーカーが推奨する保管期間を越えて保管しないでください。**

   B. エンジンをかけて約5分間作動させ、コンディショナ入りのガソリンを各部に循環させる。

C. エンジンを停止し、エンジンの温度が下がるのを待ってガソリンを抜き取る。

D. エンジンを再度始動するチョークを引いて始動し自然に停止するまで運転する。

E. 始動できなくなるまでエンジンの始動運転を続ける。

F. 抜き取った燃料は地域の法律などに従って適切に処分する。地域の法律や規則に従ってリサイクルする。

9. 点火プラグを外し、点検を行う 点火プラグの整備 (ページ 42)を参照。

10. 点火プラグの取り付け穴から、エンジンオイルをシリンダ内に 15 mlスプーン2杯程度流し込む。

11. スタータモータを使ってクランクを回転させて内部にオイルを十分に行き渡らせる。

12. 点火プラグを取り付け、それぞれを規定値にトルク締めする 点火プラグの整備 (ページ 42)を参照。

注 点火プラグには点火コードを取り付けない。

13. 冷却水エチレングリコール不凍液と水との 50/50 混合液の量を点検し、凍結を考慮して必要に応じて補給する。

14. 車体からバッテリーを外し、フル充電する バッテリーの整備 (ページ 45)を参照。

注 保管期間中は、バッテリーケーブルを外しておいてください。

重要 **氷点下での凍結破損を防止するため、バッテリーは必ずフル充電してください。フル充電したバッテリーは周囲温度約 4°C でほぼ 50 日間電圧を保持します。保管場所の気温がそれよりも高い場合には 30 日ごとに再充電してください。**

15. 各ボルト類の締め付けを確認する。破損個所はすべて修理する。

16. 表面のキズや塗装のはがれているところには再塗装を行う塗料は代理店にて入手可能。

17. 汚れていない乾燥した場所で保管する。

18. 保管中は ON/OFF スイッチからキーを抜き取り、子どもなどの手の届かない場所で保管する。

19. 機体にはカバーを掛けておく。

故障探究

問題	考えられる原因	対策
クイックカップラの着脱がしにくい。	1. 油圧が解放されていないクイックカップラに油圧がかかっている。	1. エンジンを止めて油圧昇降レバーを前後に何度か操作し、その後にクイックカップラを補助油圧パネルのフィッティングに接続する。
パワーステアリングが重い。	1. 油圧オイルが不足している。 2. 油圧オイルの温度が高い。 3. 油圧ポンプが作動していない。	1. 油圧システムの整備を行う。 2. 油圧オイルの量を点検し、必要に応じて補給などを行う。代理店に連絡する。 3. 代理店に連絡する。
油圧フィッティングからオイルが漏れている。	1. フィッティングがゆるんでいる。 2. 油圧フィッティングのO リングが無くなっている。	1. フィッティングを締め付ける。 2. O リングを取り付ける。
アタッチメントが作動しない。	1. カップラの接続が完全でない。 2. カップラの接続が逆になっている。	1. クイックカップラを外し、ていねいに清掃してもう一度取り付ける。磨耗したり破損したりしているカップリングは交換する。 2. クイックカップラを外し、補助油圧パネルの対応する接続口に正しく合わせてもう一度取り付ける。
キーキーというノイズが出る。	1. 油圧昇降レバーがON 位置にロックされているリリーフバルブにオイルが回っている。	1. 油圧レバーをのロックを解除してニュートラル位置にする。
エンジンを始動できない	1. 油圧レバーがON位置にロックされている	1. 油圧レバーをのロックを解除してニュートラル位置にしてからエンジンを始動する。
トランスミッションのシフトが重い。	1. エンジンのローアイドル速度が速すぎる。 2. クラッチが汚れている。	1. エンジンのローアイドル速度を1,250~1,350rpm に調整する。 2. クラッチを洗浄する。
クラッチの接続が滑らかでない	1. エンジンのアイドル速度が遅すぎる。 2. ベルトがまだ新しい。 3. アクセルペダルの遊びが大きすぎる。 4. クラッチが汚れている。	1. エンジンのローアイドル速度を1,250~1,350rpm に調整する。 2. ベルトがなじむのに10時間ほどの時間が必要である。 3. ブレーキペダルを調整する。 4. クラッチを洗浄する。

メモ

カリフォルニア州第65号決議による警告

この警告は何?

以下のような警告ラベルが貼られた製品を見かけることがあるでしょう

WARNING: Cancer and Reproductive Harm—www.p65Warnings.ca.gov.

Prop 65 って何?

Prop 65 は、カリフォルニア州で操業している企業、製品を販売している企業、カリフォルニア州で販売または同州に持ち込まれる可能性のある製品のメーカーを対象とした法律です。この法律では、ガン、先天性などの出生時異常の原因となることが知られている化学物質の一覧をカリフォルニア州知事が作成維持しこれを公表しなければならないと定められています。危険物リストは、日常の生活の中で使用するものから発見された数百種類の化学物質を網羅しており、毎年改訂されます。Prop 65 の目的は、こうした物質に触れる可能性があることを市民にきちんと知らせることです。

Prop 65 は、こうした物質を含む製品の販売を禁じているのではなく、そうした製品、製品の包装、製品に付属する文書などに警告を明記することを求めています。また、こうした警告があるからといって、その製品が何等かの安全基準に違反しているということではありません。実際、カリフォルニア州政府は、Prop 65 警告はその製品が安全か安全でないかを示すものではないと説明しています。こうした物質の多くは、様々な生活用品に何年も前から使用されてきておりますが、それらの物質が今までに何らかの健康問題を起こしたという記録はありません。さらに詳しい情報はこちらへ https://oag.ca.gov/prop65/faqs-view-all.

Prop 65 の警告は、以下のうちのどちらかを意味していますある企業が自社製品への化学物質の使用量について評価したところ、目立った危険は何一つないとされる基準を超えていることがわかった、または (2) 製品に使用している化学物質は法律で規制されているものだったので、特に評価を行うことはせず、法に従って警告文を添付することにした。

この法律は全世界に適用されるのですか

Prop 65 警告はカリフォルニア州でのみ要求される法律です。Prop 65 警告はカリフォルニア州のいたるところで目にすることができます。レストラン、八百屋、ホテル、学校、病院など、そして非常に多くの製品にも、この警告が印刷されています。さらには、オンラインやメールオーダーのカタログなどにも掲載されています。

カリフォルニア州の警告と連邦政府の上限との関係は

Prop 65 の内容は連邦政府の規制や国際規制よりも厳しいものが大変多いです。Prop 65 の規制基準値は連邦政府基準に比べてはるかに厳しく、連邦政府基準では表示義務がないが、Prop 65 では表示義務があるものが数多く存在します。たとえば、Prop 65 の基準では、一日当たりの鉛の排出量が 0.5 マイクログラムとなっており、これは連邦政府の基準や国際基準よりもはるかに厳しい数値です。

似たような製品なのに警告が付いていないものがあるのはなぜ

- カリフォルニア州内で販売される場合には Prop 65 ラベルが必要でも、他の場所で販売される場合には不要だからです。
- Prop 65 関連で裁判となった企業が、和解条件として Prop 65 警告の表示に同意したが、そうした問題に巻き込まれていない企業の製品には何も表示されていないといったこともあるでしょう。
- Prop 65 の表示は必ずしも一律に行われているわけではないのです。
- 自社内で検討した結果、Prop 65 基準に抵触しないと判断して、警告の表示を行わないことを選択する企業もあります。警告が書かれていないからと言って、その製品に対象化学物質が含まれていないということは言えません。

なぜ Toro 製品にはこの警告が表示されているのですか

Toro では、十分な情報に基づいてお客様ご自身が判断できるようにすることがベストであるという考えから、できる限り多くの情報をお客様に提供することとしております。リスト記載物質のいくつかが自社製品に該当する場合、Toro では、それらの物質のほとんどの量はごくわずかであって実際の表示義務はないことを認識した上で、排出量などを厳密に評価することなく、警告を表示するという判断をすることがあります。Toro では、自社の製品に含まれる化学物質の量が「重大なリスクはない」レベルであると認識した上で、あえてProp 65 警告の表示を行うという選択をしております。これはまた、もし Toro がこうした警告を表示しなかった場合、カリフォルニア州政府や、Prop 65 の施行推進を目指す民間団体などから訴訟を提起される可能性もあるということも視野に入れての判断です。

EEA/UK におけるプライバシーに関するお知らせ

Toro によるお客様の個人情報の利用について

The Toro Company (“Toro”) は、お客様のプライバシーを尊重します。弊社の製品をお買い上げ頂いた際、弊社ではお客様に関する情報を、お客様から直接、あるいは弊社の支社や代理店を通じて入手いたします。入手した情報は、お客様との契約を履行するために使用されます。具体的には、お客様のための製品保証登録、保証請求の処理、万一製品をリコールする場合のご連絡、さらには弊社の事業を進めるため、たとえばお客様満足度を調査したり、製品の改良、またお客様にとって役に立ちそうな製品のご紹介などに使用します。また、トロが上記の業務を遂行するために必要となる活動のために、弊社の子会社、提携会社、代理店などのビジネスパートナーに情報を開示する場合があります。また、法律に基づく要請があった場合や、事業の売却、買収、合併などが発生した場合にはお客様の情報を開示する場合があります。ただし、マーケティングのためにお客様の個人情報を他社に売ることは絶対にいたしません。

個人情報の保存

Toro では、上記の目的にとって必要な期間にわたり関連法律に従ってお客様の個人情報を保持いたします。具体的な保持期間についての詳細をお知りになりたい方は以下にご連絡くださいlegal@toro.com。

セキュリティーについての Toro のお約束

あなたの個人情報についての情報処理作業は、米国またはあなたが居住される国のデータ保護関連規制よりも規制がゆるやかな第三国で行われる場合があります。あなたの情報をあなたの居住国の外に移動する場合には、弊社は必ず法律が定める手続きを踏み、あなたの情報が安全に取り扱われ適切な保護がおこなわれるように、そして正しく取り扱われるように配慮します。

アクセスと訂正

お客様には、ご自身の個人情報を閲覧・訂正する権利があり、また、ご自身に関するデータの処理に対して異議申し立てないしは禁止を申し立てる権利があります。このような権利行使をなさりたい場合には legal@toro.com にメールでご連絡ください。弊社があなたの情報を取り扱った方法に懸念をお感じになった場合には、弊社に直接申し立てをしていただくようにお願い申し上げます。なお、ヨーロッパにお住まいの皆様は、Data Protection Authority に対して異議申し立てを行うことができます。

Toro 製品保証

2 年間または 1,500 時間限定保証

保証条件および保証製品

Toro 社およびその関連会社であるToro ワランティー社は、両社の合意に基づき、Toro 社の製品「 製品」と呼びますの材質上または製造上の欠陥に対して、2 年間または 1,500 運転時間のうちいずれか早く到達した時点までの品質保証を共同で実施いたします。この保証は、エアレータ以外のすべての機器に適用されますエアレータ製品については別途保証があります。この品質保証の対象となった場合には、弊社は無料で「 製品」の修理を行います。この無償修理には、診断、作業工賃、部品代、運賃が含まれます。保証は「 製品」が納品された時点から有効となります。
*アワーメータを装備している機器に対して適用します。

保証請求の手続き

保証修理が必要だと思われた場合には、「 製品」を納入した弊社代理店ディストリビュータ又はディーラーに対して、お客様から連絡をして頂くことが必要です。連絡先がわからなかったり、保証内容や条件について疑問がある場合には、本社に直接お問い合わせください。

Toro Commercial Products Service Department
Toro Warranty Company
8111 Lyndale Avenue South
Bloomington, MN 55420-1196

952–888–8801 または 800–952–2740
E-mail: commercial.warrnty@toro.com

オーナーの責任

製品のオーナーは、*オペレーターズマニュアル*に記載された整備や調整を実行する責任があります。必要な整備や調整を怠ったことが原因で発生した不具合などの問題点はこの製品保証の対象とはなりません。

保証の対象とならない場合

保証期間内であっても、すべての故障や不具合が保証の対象となるわけではありません。以下に挙げるものは、この保証の対象とはなりません

- Toroの純正交換部品以外の部品を使用したことまたはToroの純正部品以外のアクサセリや製品を搭載して使用したことが原因で発生した故障や不具合。
- 推奨された整備や調整を行わなかったことが原因で生じた故障や不具合。
- 運転上の過失、無謀運転など「 製品」を著しく過酷な条件で使用したことが原因で生じた故障や不具合。
- 製品を使用したことによって消耗した正常なパーツ通常の使用に伴って磨耗消耗する部品類とは、ブレーキパッドおよびライニング、クラッチライニング、ブレード、リール、ローラおよびベアリングシールドタイプ、グリス注入タイプ共、ベッドナイフ、点火プラグ、キャスタホイール、ベアリング、タイヤ、フィルタ、ベルトなどを言い、この他、液剤散布用の部品としてダイヤフラム、ノズル、チェックバルブが含まれます。
- 以下のような外部要因が原因で発生する不具合天候、格納保管条件、異物、不適切な燃料、冷却液、潤滑剤、添加物、水、薬品などの使用。
- エンジンのための適正な燃料ガソリン、軽油、バイオディーゼルなどを使用しなかったり、品質基準から外れた燃料を使用したために発生した不具合。
- 通常の使用に伴う運転音や振動、汚れや傷、劣化。通常の使用に伴う「 汚れや傷」とは、運転席のシート、機体の塗装、ステッカー類、窓などに発生する汚れや傷を含みます。

部品

定期整備に必要な部品類「 部品」は、その部品の交換時期が到来するまで保証されます。この保証によって取り付けられた部品は、この製品保証により保証期間終了まで保証され、取り外された部品は弊社の所有となります。部品やアセンブリを交換するか修理するかの判断は弊社が行います。弊社が保証修理のために再製造した部品を使用する場合があります。

ディープサイクルバッテリーおよびリチウムイオンバッテリーの保証

ディープサイクルバッテリーやリチウムイオンバッテリーは、その寿命中に放出することのできるエネルギーの総量kWhが決まっています。一方、バッテリーそのものの寿命は、使用方法、充電方法、保守方法により大きく変わります。バッテリーを使用するにつれて、完全充電してから次に完全充電が必要になるまでの使用可能時間は徐々に短くなってゆきます。このような通常の損耗を原因とするバッテリーの交換は、オーナーの責任範囲です。注リチウムイオンバッテリーのみ2 年経過後は日割り計算とします。詳細についてはバッテリーのサービスマニュアルを参照のこと。

クランクシャフトのライフタイム保証プロストライプ 02657 モデルのみ

トロ社の純正摩擦ディスクおよびクランク安全ブレードブレーキクラッチ統合ブレードブレーキクラッチBBC摩擦ディスクアセンブリを当初から搭載し、当初の購入者様がトロ社の推奨する運転方法および定期整備を遵守してご使用されたプロストライプ製品には、クランクシャフトの曲がり不具合に対するライフタイム保証が適用されます。摩擦ワッシャ、ブレードブレーキクラッチBBCその他のデバイスを搭載した製品には、このクランクシャフトのライフタイム保証は適用されません。

保守整備に掛かる費用はオーナーが負担するものとします

エンジンのチューンナップ、潤滑、洗浄、磨き上げ、フィルタや冷却液の交換、推奨定期整備の実施などは「 製品」の維持に必要な作業であり、これらに関わる費用はオーナーが負担します。

その他

上記によって弊社代理店が行う無償修理が本保証のすべてとなります。

両社は、本製品の使用に伴って発生しうる間接的偶発的結果的損害、例えば代替機材に要した費用、故障中の修理関連費用や装置不使用に伴う損失などについて何らの責も負うものではありません。両社の保証責任は上記の交換または修理に限らせていただきます。その他については、排気ガス関係の保証を除き、何らの明示的な保証もお約束するものではありません。商品性や用途適性についての黙示的内容についての保証も、本保証の有効期間中のみに限って適用されます。

米国内では、間接的偶発的損害に対する免責を認めていない州があります。また黙示的な保証内容に対する有効期限の設定を認めていない州があります。従って、上記の内容が当てはまらない場合があります。この保証により、お客様は一定の法的権利を付与されますが、国または地域によっては、お客様に上記以外の法的権利が存在する場合もあります。

排ガス保証についてのご注意

米国においては環境保護局EPAやカリフォルニア州法CARBで定められたエンジンの排ガス規制および排ガス規制保証があり、これらは本保証とは別個に適用されます。くわしくはエンジンメーカーのマニュアルをご参照ください。上に規定した期限は、排ガス浄化システムの保証には適用されません。製品に同梱またはエンジンメーカーからの書類に同梱されている、エンジンの排ガス浄化システムの保証についての説明をご覧下さい。

米国とカナダ以外のお客様へ

米国またはカナダから輸出された製品の保証についてのお問い合わせは、お買いあげのToro社販売代理店ディストリビュータまたはディーラへおたずねください。代理店の保証内容にご満足いただけない場合は弊社の正規サービスセンターにご相談ください。